
C i t y F a n g

葉月佳音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

City Fang

【Zコード】

Z9605L

【作者名】

葉月佳音

【あらすじ】

20XX年、カルト教団『青銀天聖教団』によつて引き起こされた連続児童誘拐事件。

その被害者の一人であり、教団の信者である少年に救われた過去を持つ少女・星海那々は、五年の時を経て、彼の面影を持つ銃工の青年・天瀬斎に出会つ……。

銃規制が緩和された仮想東京で繰り広げられる、ダークサイド・ガンアクション。

Prologue (前書き)

この作品には流血・暴力表現及びアンダーグラウンドな表現が点在します。

苦手な方はお読みにならないことをお勧めします。
また、銃器や犯罪を推奨するものでもありません。あしからずご了承ください。

「ここに来てから、どれだけの時間が経つたのだろうか。膝に顔を埋めて、ため息をついた。拘束はされていないが、逃げ出せる状態でもない。

カーテンが閉まつた窓が一つだけの、殺風景なプレハブの部屋。そこに、自分を含めて四人の子供がいた。そして、見張りのようにドアの傍に椅子を置いて座っている、面をつけた人間が一人。足を組み、黒い金属の塊 オートマチックの拳銃を、手持ち無沙汰に弄んでいる。オペラ座の怪人みたいなつべりした面をいつもつけていて、素顔を見たことはないが、今まで自分たちに危害を加える様子はなかつた。

下校途中にいきなり三人の男に誘拐され、ここに連れて来られた。それからはずつと、ここに閉じ込められている。ドアに鍵がかかっているわけでも、窓に鉄格子がはまつているわけでもないが、銃を持つた見張りの存在は簡単にその代わりを務めていた。逃げられない。唯一チャンスに思えるトイレに立つ時は、別の人間が一人呼ばれ、目隠しをされて連れて行かれた。

自分がここに来た時は、他に五人の子供がいた。三人が出て行き、一人が新しく入つて来て、現在は四人。見たところ自分が一番年上で、他は大体小学校低学年くらい。一人、小学校にも上がつていなさそうな男の子がいた。

「交替するぞ」

ドアが開いて、やはり面をつけた、大柄な男（だろう、声からして）が入つて來た。一番小さな男の子が、泣き出しそうな顔になつてしまつてくる。最初に怒鳴りつけられて以来、子供たちはこの男を怖がつっていた。言動も粗暴な感じの男なのだ。

男は虫の居所が悪いらしく、前任者が立つた後の椅子にどかりと腰かけた。

「おい、そこガキ。こっちへ来い」

指差されて、最年少の五歳くらいの男の子がびくりとする。ためらうと、間髪入れず怒声が飛んできた。

「来いつつてんだろが！」

「やめてよ！ 怖がってるじゃない！」

思わず、声が出ていた。はつとした時には、男がこちらを向いていた。

「……刃向かうガキには、お仕置きだなあ」

ねつとりした声で、男は言った。立ち上がり、こちらが逃げる間もなく、頬を張られた。

「自分の立場が分かつてねえようだな。刃向かうようなら、多少痛めつけてもいいって言われてんだ」

倒れ込んだところで腹を蹴られた。痛みに、思わず身体を丸めて目を閉じる。子供たちが泣き出すのがかすかに聞こえた。

ガウン。

轟音に、室内の音が消えた。恐る恐る目を開けると、大柄な男が右足を押さえ、うずくまつて獣のように呻き声をあげている。それを見下ろすのは、今まで見張りをしていた人物だった。その手には、薄く硝煙を上げる銃が握られていた。

「……ペインレス・ドッグ……てめえ……！」

半身を起こした男に向け、仮面の人物はためらいなく引鉄を引いた。左肩を抉られ、わめきながら男は転げ回る。その鳩尾を蹴つて黙らせると、仮面の人物は手を差し伸べてきた。

「立てる？」

思っていたより若そうな声だった。自分より、少し年上くらい。大人の男の人、といった感じではなかつた。手を借りて立ち上がる

と、彼が服の埃を払ってくれた。

「ついて来て。ここから出るんだ」

彼の言葉に、一瞬啞然とした。出る？ ここから？

だが彼は、さつさと行動を起こしていた。ドアを開け、周囲を見回して子供たちを手招いた。

「おいで。今なら人がいない」

半信半疑ながら、従つた。何となく、彼が本気で自分たちを助けようとしているのが分かつた。他の子供たちも、それが分かるのだろう、怖がるでもなくついて来る。さつき、暴行してきた男を倒したもの効いているのだろう。

プレハブが建つのは、どこか大きな施設の外れのようだつた。少し離れたところに大きな建物があつたのは、窓から外を覗いて分かっている。そういうば、この人には何をしても怒られた記憶がないと、ほんやりと思い当たつた。大柄な男の方は、自分たちが窓に近付くだけで怒つたのだが。

彼に連れられて、建物の方に近付いていく。彼の目当ては、建物の裏口に停まつてゐる車だつた。生活物資を運んで来たのか、バンの車体には社名らしき文字が書いてある。

彼は近付いて行き、運転席に誰もいのを確かめて、自ら運転席に座つた。運転手はすぐ戻るつもりなのだろう、キーがつけつ放しになつてゐる。彼らにとつては好都合だつた。

「さ、乗るんだ」

助手席のロックを解除してもらい、車に乗り込んだ。小さい子供たちは、後部座席へ。最後に助手席へ落ち着いたこちらへ、彼は顔を向けた。といつても、仮面のままなので少々不気味だ。

「ああ、もうこれはいいや

気づいたらしく、彼は仮面を外した。

驚いた。

テレビのアイドルタレント顔負けの、整つた顔立ちだつた。どう

見ても、高校生くらいの少年。少し細められた目が優しそうだ。間違つても銃をぶつ放し、車を強奪するような人間には見えない。

「ベルトして。気づかれる前に出る」

振り向くと、裏口から運転手らしき中年男が出て来るところだつた。イグニッショングリーンキーを回して、エンジンがかかると、その音にようやく気づいたのか、中年男が慌てて駆け寄つて来る。

だが、遅い。

サイドブレーキを解除、ギアはドライブ。少年がアクセルを思い切り踏み抜いた。バンはもの凄い勢いで飛び出し、建物の間を縫うように走つて行く。少年はちらりとミラーを見やり、ドアポケットに突っ込んでいた拳銃を取り出した。

「みんな、頭抱えて伏せて。気づかれた」

その瞬間、銃声と共に左のサイドミラーが吹っ飛んだ。舌打ちした少年が、左腕だけで大きくハンドルを切る。前方に、大きな門が見えてきた。

「あ、あれ……！」

その門には、見覚えがあつた。以前、何かのテレビ番組で見た覚えがある。振り返ると、目に飛び込んできた大きな建物も記憶にある。

「青銀天聖教団…………？」

ここ数年で急速に規模を拡大させた、新興宗教法人。名前だけは知つているが、関わりなどまったくない。信じられない思いで呟くと、少年はあつさり肯定した。

「そう。みんなは、家族にテロを手伝わせるための人質として誘拐されたんだ」

片棒担いで言う台詞じゃないけどね、と苦笑し、少年はウインンドウを下ろす。銃を握った右腕を一杯に伸ばした。トリガーを引き絞り、同時にクラクションを盛大に鳴らす。

出入りの確認をしようとした係員が、足下への着弾に泡を食つて飛びのいた。その鼻先を、暴走車は駆け抜けていく。

教団施設を出ると、登山道のような人気のない道が伸びている。バンが疾走するそのすぐ右後方に、黒のカルディナが喰らいついてきた。

カルディナの窓から、銃口が火を噴いた。

ボディに着弾し、がんがんと音をたてる。フロントガラスの右端に、蜘蛛の巣のようなヒビがさつと走った。少年が銃のグリップで視界を妨げるフロントを叩き壊す。その拍子に、少年の右腕が血に染まっているのを見てしまった。

「 怪我、」

「 うん、ドジ踏んじゃつた。そこそこ深いね」

とんでもないことをあつさりと言つ彼に、痛がる様子はない。

「 ……痛く、ないの？」

「 うん、昔からね、ちょっと痛覚神経おかしいらしくて。君こそ、怖くない？」

「 なにが？」

「 色々。誘拐されたり、銃で撃たれたり」

「 だつて 助けてくれるんでしょ？ あなたが」

そう言つと、少年は面食らつたような顔でこちらを見た。ややあつて、破顔する。

「 初めて言われた。そんなこと」

緩い下り坂、直線。少年は、銃から空になつたマガジンを抜き、ズボンに挟んだ新しいマガジンを取り出して入れ替え、スライドを引いた。数秒の早業。そして血塗れの右腕を窓の外に伸ばす。銃を持つたまま。

「 ジゃあ、期待に応えなきやね。しつかり掘まつてて」

大きなカーブ。ハンドルを右に切りながら窓から身を乗り出し、曲がりきるまでの数秒ほどで全弾を撃ち込んだ。吐き出された残弾すべてが、カルディナのフロントやボンネットを襲う。

カルディナがコントロールを失い、道路脇のガードレールに突っ込んで行つた。

「 ……終わったよ」

そう言われて、やつと頭を上げた。少年はのろのろと、銃をドアポケットに落とし込む。

そつと少年を見上げると、彼の顔色は蒼白になり、脂汗が浮かんでいた。右腕からの出血は止まつていない。それどころか、よく見ると右の胸の辺りにも、血が広がっていた。身を乗り出した時に撃たれたのだろう。こんな状態で、しかも運転しながらの射撃で追手を仕留めたのだ。

「大丈夫？ 顔色、真っ青だよ？」

「そう？ でも、もうちょっとだから」

何が？ そう訊こうとして、巡らせた視線の先に答えを見つけた。警察署。

「……心配しないで。みんなは、ちゃんと家に帰すから」

警察署前のロータリーに、ぼろぼろになつたバンが滑り込んだ。ブレーキを踏み、少年は気が抜けたようにハンドルに突っ伏す。クラクションが派手に鳴り響き、玄関に立つていた警官が駆けて来るのが見えた。

「しつかりして！ ねえ、大丈夫？」

どうしていいか分からなくて、とりあえず少年の背中をさする。見当違いとは思つても、そうせずにはいられなかつた。

「……大丈夫、痛くないから」

「そうじやなくて！」

「どうしたんだ、大丈夫か？ 何があつた？」

事故車のような有様に、警官が驚いて矢継ぎ早に尋ねてくる。少年は顔を上げると、わずかに笑みを浮かべた。

「……すいません、この子たちを保護してもらえますか？ 誘拐さ

れて……逃げて、來たんです。僕は 青銀天聖教団 の者です」

「逃げて來た？ とにかく、君たちは降りなさい。彼も、病院へ

」

「うん」

助手席から降りて、後部座席の子供たちを下ろすのを手伝う。そして、運転席のドアに手をかけた。ようやく上体を起こした少年と、目が合つた。目を細めて、彼は言つた。

「……さよなら、だよ」

エンジンは、かかつたままだった。

後部座席のドアを開け放したまま、バンは飛び出した。あつとう間にロータリーを出て、見えなくなってしまう。呆然とそれを見送っていた警官と子供たちの中で、自分一人だけが、弾かれたように駆け出していた。道路に出た時にはもう、バンの姿はどこにもなかつた。

さよなら。もう会えない。

膝の力が抜けて、そこに座り込んだ。

いつの間にか泣いていることも、気づかなかつた。

信号無視とスピード違反の連続で、どれだけ走つただろうか。

いつしか辿り着いていた人気のない山道で、少年はバンを乗り捨てた。エンジンを切ると、とたんに襲ってくるのは静寂。遠くからかすかに潮騒の音が聞こえるのは、海が近いからだろう。バンを降りると、ふとドアポケットの銃のことを思い出した。そしてついでに、全弾を使い切つたことも思い出す。

「……一発くらい、残しきときやよかつた」

苦笑して、ふらりとその場を離れた。頭がくらくらする。血を流しそぎたらしい。

ついに目が回って、倒れ込んだ。何とか仰向けになると、空を見上げる。

静かだ。

痛みはない。物心ついた時から、この身体に痛覚はなかつた。いつからか 痛がらない犬ペインレス・ドッグ と呼ばれ、銃弾が飛び交う世界に身を晒してきた。

だがそれも、もう終わる。

ふと、さつきの少女のことを思い出した。痛みなど感じない自分

の背中をさすってくれた、あたたかい手。昔、同じことをしてくれた人がいた。

(……もうすぐ、いくよ)

頭が重い。急激に視野が狭くなつた。このまま引き込まれてしまおう。

そつと目を閉じた。

遠くからかすかに、エンジンの音が聞こえた気がしたが、すぐにどうでもよくなつた。

一〇××年、七月。神奈川と山梨の県境に近い山中に本部を置く青銀天聖教団 に、強制捜査のメスが入つた。

きつかけは、相次いだ子供たちの誘拐事件だった。中央官庁や金融機関、空港、JR中央司令室などに勤める職員の子供を誘拐し、その命と引き換えに職場に爆弾を仕掛けるよう要求したのだ。警察に通報すれば子供の命はないと脅されたものの、要求に従えばテロの片棒を担ぎ、最悪多くの死者を出すことになる。刻々と迫るタイムリミットに、被害者たちは苦渋の選択を強いられていた。

しかしその状況を、一つの事件が打破した。教団の裏側に属する少年が、子供たちを連れて警察署に出頭してきたのだ。彼は誘拐の事実を告げ、教団の関与を仄めかした。子供を取り戻した家族も口を開き始め、異例ともいえる早期の強制捜査へと繋がつた。

逮捕者三十六人以上ったこの事件で、青銀天聖教団 は事実上崩壊した。教祖以下幹部は軒並み逮捕され、追い討ちをかけるように、違法薬物の密造や銃の密輸なども明るみに出たことで、教団の裏の顔を知らなかつた一般信者も雪崩を打つように退団した。

強制捜査の足掛かりを作つた少年については、子供たちを警察署に送り届けたその足で姿を消し、すぐに敷かれた検問も彼を捉える

ことはできなかつた。その後、目撃情報を総合して辿り着いた人通りの少ない海岸の崖下で、逃走に使われたと思しきバンを発見。バンはフロントの半分が損傷、海底に突っ込んだような状態で発見され、車内に運転手の姿はなかつた。しかしシートには多量の血痕が見つかり、保護された子供たちの証言や現場の状況から、捜査本部は少年が運転を誤つて転落、もしくは自殺し、遺体は海に流されたものとの見解に達した。

少年には戸籍がなく、ただペインレス・ドッグ という通称だけが、警察内部の資料に残つた。

以後、彼の情報は公表されていない。

shoot : 1 Dog and Realize Girl (1) (前書き)

レイアウト設定の勝手が分からずちょっと時間が開いてしまいました……。

彼は、田を細めて微笑っていた。

『……さよなら、だよ』

待つて！ 置いてかないで！

息が切れるほど走つても、追いつけない。バンばんどん遠ざか
つて、そして。

「！」

星海那々は、弾かれたように飛び起きた。息が上がっているのは、
夢のせいだとすぐに理解する。

夢、だ。

彼はもう、夢の中にしか現れない。

那々は田を覆つて深く息をつくと、気分を切り替えるように頭を
振つた。ショートボブの髪がばらばらと揺れる。
ベッドを抜け出してリビングに行くと、母の由里が朝食を用意し
ているところだった。

「あら、今日は早いじゃない」

「まあ、たまにはね」

そう答えた時、テレビのアナウンサーが新しいコースを読み上
げた。

『……今日で一〇〇〇〇年の 青銀天聖教団 事件から、丸五年を迎
えます。この事件は、子供たちの誘拐事件に端を発し……』

思わずテレビを見つめた那々に、母がちらりと気遣うように視線
を向けた。

「……もつ、五年も経つたのねえ」

「うん……」

那々は窓際に立つて、外に向かつて手を合わせた。

ありがとうございました。あなたのおかげで、無事に高校生になれました。ここ五年の恒例行事。七月十一日、毎年この日の朝は、この窓越しに手を合わせる。

彼女は五年前、誘拐された子供の一人だつた。

母が成田空港で職員として働いていたため狙われたのだ。小学校六年の夏休み直前、下校途中に三人組の男に取り囮まれ、薬のようなものを嗅がされて気を失つた。気がついた時にはもう、教団施設内に囚われていたのだ。

あの時のこととは、忘れようにも忘れない。殺風景なプレハブ、仮面をつけて銃を持つた見張り役。毎日増えたり減ったりする、自分と同じ立場の子供たち。家族を利用するための誘拐だとうのは、後から知つた。顔を見なくなつた子供は、親が退職しようとしたため見せしめにドラッグを打たれ、隔離されていたのだとうことも。

だが、彼女の記憶に最も鮮やかに残つていたのは、一人の少年だつた。

ペインレス・ドッグと呼ばれていた彼は、元は見張り役の人だつた。しかし、もう一人の見張り役が那々に暴行を働いた時、それを撃ち倒して子供たちを逃がしたのだ。折良く雑貨の搬入に来ていた業者の車を奪い、銃撃戦で怪我を負いながらも、那々たちを麓の警察署まで連れて行つてくれた。

なぜ彼がそこまでしてくれたのか、那々は未だに知らない。その後彼は姿を消してしまい、連絡を受けて駆けつけて来た母の腕の中で、那々は泣きじやくつた。

しばらくして彼の搜索が打ち切られたというニュースが流れた時も、大泣きに泣いた。礼の一言も言えなかつたことが、心残りでならなかつた。

那々は未だに、はつきりと覚えている。あの少年の優しい端整な顔立ちも、少し甘さの残る声も。彼が流した血の鮮やかさ、最後に見た微笑みさえも。

それは、恋だつたのかもしれない。

たつた数日で永遠に叶わなくなつたけれど、確かに彼女は、彼を想つていたのだ。

だから、那々の中にはもう恐怖はない。

彼女があの事件を思い出す時はいつも、監禁され手を上げられた負の記憶ではなく、あの少年と一緒に逃げた時の不思議な安心感が浮かんでくる。

あの少年は五年経つても、那々をあの事件から守ってくれるのだ。そして、那々は毎年、この窓から彼が亡くなつたという場所の方角に向かつて、手を合わせる。あの時言えなかつた、礼の言葉と共に。

「氣づくと、ニュースはとうに別の話題に変わつていた。

「ほり、さつあと食べちゃいなさい」

「はい」

テーブルに着こつとして、那々はテーブルに置かれた一通の封筒に気づいた。宛名として那々の名前だけが書かれた、真っ白な封筒。「お母さん、これ」

「ああ、新聞取りに行つたら郵便受けに入つてたのよ。あんた宛になつてるから」

「いいわよ、どうせストーカーからだもん。捨てちゃつて」「ストーカー？」

由里が目を丸くした。

「あんた、ストーカーされてるの？」

「大したことないよ。手紙でつらつらぶざけたこと書いてくるだけだもん。好きですか愛しますとか……あ～寒つ」

びりびりと豪快に封筒を破つて中身を読み、すぐに放り出す。

「今まで五、六回来たけど、特に実力行使してくるわけでもなし、放つときやその内諦めるでしょ。それに、あたしの理想はもつと高いの！」

「はいはい。腕つ筋が強くてハンサムで、優しい人でしょ。そんな

人がそうそついるもんですか

「どつかにいるもん」

ストーカーからの手紙を握り潰してゴミ箱に放り込んだ。人のことを調べ尽くして手紙にまで書いてくるくせに、自分は顔も出さないような相手に用はない。

それに 那々はまだ、彼を忘れられない。忘れてしまっては、

彼の記憶は鮮やかすぎた。

「でも那々、それ切手がないってことは、直接届けられたってことでしょう？ 気持ち悪いじゃなく、住所知られてるなんて。警察に言えば？」

「これくらいで捜査なんてしてもらえないよ。それに、何かしてきたら、殴り倒してやる」

「あんたねえ、女の子がそんなこと言つもんじやないわよ」

眉をひそめる母親を尻目に、那々はテーブルに着いて朝食に手をつけ始めた。

朝食と身支度を終えると、インター ホンが鳴った。七階上に住む、同じクラスの友人の沖田直美（おきたなおみ）だ。大体同じ時間に家を出るので、いつもはエレベーターか一階のエントランスで合流するのだが、今日はこちらが少し遅くなってしまったので、迎えに来たらしい。

「はいはい」と聞こえるわけでもないが返事をして、那々は玄関のドアを開けた。

直美は親が会社社長で、年季の入ったお嬢様だ。高校進学を機に一人暮らしをしたいという希望に、親がポンとこのマンションを寄越したというから恐ろしい。活発でどちらかといえば“可愛い”タイプの那々とはまた違う、パツと目につく華やかな印象。彼女は、那々が五年前に事件に巻き込まれたことも知っていた。

「そういえばさ、こないだいい店見つけたんだあ」

「いい店つて、この前みたいにライブハウスとかじやないよね」

あの時は引っ張られて行つて、帰り道に危うく補導されかけた。白い目を向ける那々に、直美が力説する。

「ちつがあう、喫茶店！　コーヒー専門みたいなんだけどさあ、そのウェイターのお兄さんがすっごい美形なんだよねえ」

直美がずい、と那々に詰め寄る。

「あたしが狙おうかとも思つたんだけど、まあここは一つ、親友に新しい恋を提供するべきかと」

「新しい恋つて」

「助けてくれたお兄さんに片思いつてのも、それはそれでいいじらしけどさ。いつまでも後ろ向いてばっかじゃ春は来ないわよ

「いいもん」

つん、とそっぽを向いて歩き出す。

それでも結局は、直美に引っ張られてその店を訪れる」とになりそうだと思いながら。

新宿の一画、雑居ビルに挟まれた小さなビルの一階に、喫茶店ペニー・ハウス はあつた。十八世紀イングランドのコーヒーハウス 通称 ペニー・カレッジ をコンセプトにしたこの店は、シックな内装と絶品の「コーヒーで、近隣はもとより少し離れたオフィス街からも、足を伸ばしてくる常連が多い。だが店自体はさほど大きくなく、従業員もオーナー兼マスターの他には、ウェイターが一人だけという慎ましさだった。

その唯一のウェイターである天瀬斎あまがせ いつきは、テーブルを拭き終えてメニューなどを整頓すると、カウンターの内側に戻つてタオルを洗いにかかつた。全体的に瘦躯だが、捲り上げたシャツの袖から覗く腕は貧弱ではない。引き締まつた、均整の取れた体躯をしていると、容易に想像がつく。

端整な顔立ちを、今時珍しいくらいの漆黒の髪が縁取つている。好青年という言葉がこれほど似合う人物もいるまいと思える、穏やかな雰囲気を漂わせた青年だった。

斎はタオルをラックにかけ、手を洗つて各テーブルのシュガーポットや紙ナプキンの補充を始める。そうしていると、休憩に行っていたマスターの立河敏也たてかわ とじやが戻つて来た。

「戻つたぞ。次、行つてきな」

「ありがと」

手早く補充を終え、斎はカウンターの脇を通つて、奥に続くドアを潜る。細く短い通路から入れるハ置ほどの部屋は、現在は倉庫になつていて備品や豆のストックを保存する冷蔵庫、ユニフォームの替えを入れたロッカーなどが置かれている。そこには入らず通路の突き当たりのドアを開け、建物の裏手の階段を上ると、三階は住まいになつていた。間取りとしては2LDK。どちらかといえば殺風景な部屋だ。白いシャツと黒のスラックス、黒いエプロンのクラシカルなユニフォームから、エプロンだけを外してダイニングの椅子にかける。テーブルの上に作り置きされているチャーハンが、今日の昼食だ。

ペニー・ハウスは、斎と叔父に当たる立河の一人で切り盛りされていた。ここに住んでいるのも彼ら二人だけ。立河は四十三年独身を通しているし、斎はまだ二十一歳だ。結婚どころか、恋人もいない。

チャーハンを頬張つた斎の耳に、電話のホールが聞こえた。この電話は複数回線引いてあり、番号ごとにホール音が違う。この音は、自宅用ではない。

「……はい、ペニー・ハウスです」

『『ああ、俺。こないだトリガーの調整頼んでたけど、できるか?』』

『『はい、できます。いつでも結構ですよ』』

『『じゃあこれから取りに行く。十五分くらいで着くと思うから、用意しとして』』

『『分かりました』』

電話を切ると、斎は内線で下の店にかけた。

『『さつき、お客様さんから電話があつて。十五分くらいで着くって

しばらくそつち行けないけど、大丈夫?」

『ああ、こつちは心配いらない』

「じゃあ、そつち頼むね。僕は下にいるから」

短い休憩を終え、斎はエプロンを掴んで階段を下りていった。倉庫のロッカーにエプロンを放り込み、白のシャツを脱いでハンガーにかける。そして隣にかけてあつた薄いグレーのシャツに着替えると、ロッカーを閉めて再び階段に向かった。今度は上がるのではなく、下りていく。一番下まで下りきって、建物の脇を回ると、普段は閉めている一階の入口の鍵を開けた。室内の照明のスイッチを入れると、壁一面の棚とカウンター、その脇にもう一つのドアが浮かび上がった。

斎はバインドーを片手に棚をざつと見て、田的の番号の入った扉を小さな鍵を使って開け、中のものに手を伸ばす。

シグザウエルSSG3000。競技用ライフルの流れを汲む、ボルトアクション式のスナイパーライフルだ。

ライフルケースに収められたそれをさつとチェックして、大丈夫といふ風に肯くと、カウンターの下の引き出しから弾薬を取り出した。

そうこうしていると、出入口が開いた。二十代半ばの男が、親しげに手を上げる。斎も笑みを返した。

「いらっしゃいませ」

「よつ、おひさ。相変わらずマスターのコーヒーは絶品だな」

「どうも。これ、お預かりしてたシグです」

SSG3000を受け取り、男はカウンターの脇のドアを指した。

「レンジ借りるぜ」

「どうぞ。シユーティンググラスは?」

「必要ない」

実弾と、ドライファイア用のダミーカートリッジを差し出し、斎はドアの鍵を開けた。開かれたドアの向こうにはまたしても階段。下りるとそこには、二十メートルのシユーティングレンジが五レー

ン並んでいた。ターゲットの位置を必要に応じて変えられるようになつてゐるが、現在はすべて二十メートルの位置にセットされている。

男はSSG3000を構え、まずダミーカートリッジを込めて引鉄を引いた。カチン、と切れのいい音がする。

肯いて、今度は実弾を込めるど、スコープを覗いて倍率を調整。

引鉄を引いた。

ターゲットの真ん中が、綺麗に撃ち抜かれた。三回ほどそれを繰り返して、短く口笛を吹いた。

「いいな。トリガー・ブルが軽くなつたし、よく切れてる。これぞ理想つて感じだな」

「どうも。じゃあ、受け取りのサインお願いします」

「了解」

男はSSG3000をしまって一階に戻り、カウンターで差し出された用紙にペンを走らせた。

一圓千秋。いっせん ちあき

彼とは一年前にペニー・ハウスが開店して以来の付き合いだ。彫りの深い顔立ちをしていて、色を抜いた明るい髪色がよく似合つている。無造作に伸ばし、やはり無造作に括つただけの髪型だが、百八十を超える身長・整つたマスクとあいまつてまるでモデルのようだ。

千秋はペンを置くと、代金の封筒をカウンターに置く。試射後のクリーンアップを済ませて、斎は中を改め、それを手提げ金庫にしまふと、サインの入った用紙をファイルに綴じて領収兼明細書に手早く金額を書き込んだ。

「これ、領収と明細書です」

「サンキュー。これがないと経費で落ちねえからな」
領収書を受け取り、千秋はしげしげと斎を見やる。

「いつも思うんだけどさ、上でウェイターしてる時とこことで、どうして服が違うんだ？ そのまま来りやあ、面倒ないだろ？」
「うち用の仕事着です。喫茶店のユニフォームに火薬とガンオイ

ルの臭いなんてつけるわけにいきませんから。コーヒーの香りにそ
んなもの混ぜたら、叔父に殴られます」

「はあ、なるほどねえ」

気の抜けた返事をして、彼はライフルケースを抱えた。

「ありがとうございました」

挨拶にひらひらと手を振つて、千秋はドアの向こうに姿を消した。
アメリカ力を筆頭とする銃器生産国の圧力に押される形で、七年ほど前に法改正があり、日本でも銃の規制が緩和された。これま
で公然と銃を所持できる職業は（建前上）警察官と自衛隊くらいだ
ったが、規制緩和によりその幅が広がったのだ。代表的なところで
警備会社。中でも現金輸送に携わる会社は、強盗の脅威に対抗する
ため率先して銃を導入した。

もつとも、そのためのハードルは高い。法改正以前から所持が認
められていた猟銃などと同様、国家公安委員会の定める講習・試験
(実技含む)を受け、各都道府県警に銃所持の申請をし、精神異常・
重大疾患なしという医師の診断書を提出しなければならないのはも
ちろんだが、その上さらに倫理講習、危険物取扱講習、応急処置講
習、誓約書の提出が待つている。そして職務上銃が必要だと認定さ
れてようやく、帯銃許可証が発行される。申請をしてから許可証が
発行されるまで約九ヶ月という、気の長い話だ。そして実際に銃を
所持すれば、その銃についての届出をしてナンバーをもらわなければ
ならない。有効期限はいずれも一年。そのたびに更新する。

そして、それらの銃の整備・修理においての事故を防ぐため、専
門の技術を持つ職人も必要になつた。いわゆる銃工ガンスマスターだ。銃工は、国
家公安委員会と都道府県警察の両方に承認される必要があり、営業
するためにはその承認と帯銃許可証が必須となる上、一年に一回審
査を受ける。この審査をパスしないと、営業ができない。

ペニーハウスは、コーヒー専門喫茶店という顔の他に、銃工
という別の顔を持っている。店舗のオーナーは立河だが、銃工の資
格を持っているのは斎だけなので、銃工の仕事の管理責任者は斎だ。

管理責任者が別なら、別業種を並行営業しようと何の問題もない。

ペニー・ハウスは東京でもまだ数少ない公認銃工店であり、斎は業界ではそこそこ有名な腕利きの若手銃工だった。

シュー・ティングレンジルームの鍵をかけると、今日引き渡し予定の品が他にないのを確かめ、入口の鍵をかけた。銃工のペニー・ハウスは原則予約制だ。もっとも、飛び込みもないわけではないが、そうひつきりなしに客が来るわけでもない店で一日中過ごすのは非効率以外の何物でもないので、普段は上の喫茶店を手伝っている。客の方も大体分かっていて、まず喫茶店の方でそれとなく用件を仄めかし、ついでにコーヒーを楽しんでから下に来る、というのが定番だった。

シュー・ティングレンジが地下にあるのは、防音のためだ。試射の音が高らかに響くようでは少々具合が悪い。その点ここはおあつらえ向きに、ライブハウスだった地下一階が転用できた。防音の設備がしつかりしているのがありがたい。もともとは個人営業の楽器店が入っていたビルだったが、立地が良いとはいえないため、価格もそこそこだった。立地の悪さは腕の良さで補えばいいと斎たちは考え、そしてそれは確実に実践されている。

斎は倉庫兼用ロツカールームでシャツを着替え、エプロンを着けると喫茶店の方に戻った。三組ほど客が入っている。若い女性客がちらちら視線を送つてくるのかわしつつ、カウンター内のシンクで手を洗うと、早速トレイを渡された。

「三番のお客様だ」

「分かった」

三番テーブルは女性三人組だった。見たところ女子大生。お待たせいたしました、と営業スマイルつきで会釈すると、はにかむように笑顔を返された。こうして口ごみで“美形の店員がいる”という評判が広まっていることを、斎は知らない。

二十分ほどすると、客も引き始めた。

「落ち着いたね」

「ああ。おまえ、ほとんど休憩になつてないだろ。一杯飲むか？」
「うん、カプチーノがいいな」

冷房の効いた店内にいると冷える。熱いカプチーノを啜つていると、テレビが十分枠のニュースを流し始めた。

『 今日、七月十一日で、青銀天聖教団 事件から丸五年を迎えた。この事件は……』

カタン、とカップがカウンターに置かれる。斎の顔がわずかに歪んでいた。

「……そつか。今日だけ」

「斎」

「うん、大丈夫。これ、洗つとくね」

三分の一ほど残ったカップを取り上げ、カウンターの中に入る。とたんに、店のドアが開いてカップルらしい客が入つて来た。

「いらっしゃいませ」

にこやかに会釈する斎の表情に、先程の翳りはもつなかつた。

午後四時を過ぎると、この界隈にも学生の姿が目立ち始める。それでもコーヒー専門という敷居の高さか、店内の客の平均年齢は高めだ。主は、帰社前の息抜きを楽しむ営業社員風のサラリーマン。「お待たせいたしました」

疲れた表情のサラリーマンらしい客のテーブルにカップを置いた時、ドアが開いて一人の男が入つて来る。スーツ姿だが、明らかに普通の会社員ではないと分かる、四十代後半ほどの体格のいい男。この店の常連だった。

「いらっしゃいませ」

「よお、いつもの頼む」

「はい」

カウンターに一直線、メニューも見ない。頼むものはいつも決ま

つてはいるので、立河は彼が店に入つて来た瞬間から、ブレンンドの用意を始めていた。モカブレンンドが、彼の定番メニューだ。

「諸角さん、今日はどちらにご用で？」

尋ねられて、諸角久尚は苦笑した。

「鋭いな。今日は甥っ子の方にも世話になりに来た」

「じゃあ下、鍵開けてきます。こっち、大丈夫だよね？」

「ああ、多分な」

斎がエプロンを外しながら奥へと引っ込む。ウェイターと銃工の兼業は、なかなか慌ただしい。

「忙しいかい、マスター？」

立河は肩をすくめて微笑する。

「コーヒー一本に絞つちまうと、なかなかね。斎がいるから、あいつ田当てのお嬢さん方がちょいちょい来るが。本人は気づいちやしないがね」

「マスターの若い頃も、あんなんじゃなかつたのか？」

「あいつの方が人当たりがいいな。若い頃の俺は、とことん一匹狼でね」

そう言つ立河も、四十三歳という年齢より少し上には見られるものの、なかなか渋いナイスミドルだ。

「モカ、どうぞ」

出されたコーヒーを一口。広がる味わいに諸角は微笑する。

「ここ」のコーヒー飲んじまつと、自販機のはもう飲めないな「嬉しいね」

ゆつくりとコーヒーを飲み干すと、諸角は椅子を下りた。

「美味かつたよ。」しきそつさん

代金を払つて店を出る時、女子高生らしい一人連れとすれ違つた。この店に若い女性が来る場合、目的は大体決まつてはいる。だが今日ばかりは、そのお目当ては不在である。

（悪いなあ、嬢ちゃんたち）

その原因であるところの諸角は胸中で詫びつつ、一階への階段を

下りて行つた。

斎はすでに、仕事着に着替えて待つていた。

「悪いな、待たせたか」

「いえ。ところで、今日は修理ですか?」

「ああ、こいつを頼む」

諸角は上着の下のショルダー・ホールスターからリボルバーの拳銃を取り出し、カウンターに置いた。

「薬物中毒(ヤクモノキ)」のガキと撃ち合いになつてな。何とか取り押さえたはいいが、こいつがマトモに弾喰らつちまつた。まあ、一步間違えば俺の指か頭が吹っ飛んでたがな」

黒光りするS&WM29を取り上げて、斎はしげしげと見つめる。かなりの大口径弾がシリンドラーに当たつたらしく、端が抉れていた。傷の縁も変形してささくれ立つてゐる。確かに、これを引き続き使おうとは思わない。

「あちやあ……シリンドラー交換ですね。他也傷んだりしてないか見たいし、少し預からせてもらひうことになりますけど……」

「ああ、頼む。きつちり直してくれよ、俺の命の恩銃(おんじゆ)だ。ところで、代わりはあるか?」

「629によければ、すぐ出せます」

「それでいい、貸してくれ」

「分かりました」

斎は後ろの棚から、同型のリボルバーを取り出した。S&WM629は、M29のシルバー・モデルだ。個人的に、こういった大口径のモデルを斎は好んでいた。

「レンジ開けます。少し慣らしてください」

「ああ、借りるぞ」

シュー・ティングレンジルームを開け、諸角が階下に下りていくと、斎は厚みのあるバインダーを取り出し、シートに記入を始めた。彼が“カルテ”と呼ぶこのシートには、顧客ごとの銃のデータや修理・整備の状況などが書き記してある。後で時間ができた時に、自宅ス

ベースに置いてあるパソコンでデータベース化するようにしていた。
(S&WM29、シリンドラー破損、要交換、つと。分解して中のパ
ーツも掃除した方がいいかな。諸角さんって仕事が仕事だから、そ
んな時間ないだろうし)

そんなことを考えながらカルテを埋める。備考欄に貸出有の
文字と銃のナンバーを記入してペンを置いた時、試射を終えた諸角
が階段を上がってきた。

「使いやすいな。俺のより引鉄のキレがいい。さすがにきちんと手
入れしてるな」

「何ならメンテもしますよ、サービスで」

「ありがたい。暇がないんだ」

「でしょうね」

バインダーをぱたんと閉じて、預かったM29を奥の工房の棚に
置いた。

「時間かかりそうか?」

「できるだけ早く上げますよ。諸角さんはお得意様だし」

「その瞬間だつた。

壁の向こうから聞こえた音に、彼らは揃って顔を跳ね上げた。銃
を扱う者なら聞き間違はずのない 銃声！

「諸角さん！」

斎が叫ぶより早く、諸角はドアを蹴破らんばかりの勢いで駆け出
していく。斎も続こうとしたが、ふと思い直したようにカウンター
の引き出しのベレッタを弾」と引つ掴むと、諸角に続いて駆け出し
た。

店内には、マスター一人しかいなかつた。

「ねえ……確かに渋いオジサマだけどさあ、直美が言つてたのって
あの人じゃないんでしょ？」

「当たり前よっ！ あ～もう、ついてないなあ。ちゅうど用事で抜

けてるなんてさあ

ため息をつく直美を、那々は白い目で見やる。しきりに悔しがる彼女は放つておいて、カフェオレに専念することにした。ウェイターのお兄さんはともかく、このカフェオレは確かに収穫だ。

落ち着いた店内には、自分たちの倍くらいは年上のサラリーマンたちが目立つた。この味で値段も手頃と来れば、仕事の息抜きに寄るにはもってこいだろう。

冷たいカフェオレをちびちびと飲みながら、ちょっとした人間觀察をしていた那々は、ふと窓の外に目をやつた。周囲に雑居ビルが多いせいか、店の前を行き交う人はバラエティ豊かだ。中には、一瞬ぎょっとするような奇天烈な服装をしている女性もいる。

自棄のようにシロップとコーヒーフレッシュをぶち込んだアイスコーヒーを飲み干し、直美は息をついた。

「お兄さんいないし、もう帰ろっか」

「ま、今日は巡り合わせが悪かつたってことよ」

カフェオレを片付けて、那々は立ち上がった。マスターに申し訳なさそうに微笑されると、自分たちの目的がバレたようでちょっといたたまれない。

店を出ると、とたんに初夏の熱気が押し寄せてきた。夕方だとうのに、まったく涼しくない。

「あつつい」

直美が辟易したように声をあげた時、向かって右手の方から悲鳴があがつた。何事かと目をやると、ヒールが十センチ近くありそうなミニョールを履いた女性が、帽子を被った派手なTシャツの少年に突き飛ばされて転んだところだった。

「突つ立つてんじゃねえよ、クソアマツ！」

「何あれ、ガラ悪」

眉をひそめた那々は、だがすぐに目を見張った。少年がズボンのベルトに挟んでいるのは、どう見ても。

「おい、待てよ！ てめえ人の連れ突き飛ばしといて、詫びもなし

かよ！？」

女性の連れらしい二十歳くらいの男が、少年の腕を掴んだ。

「はなせよ！」

「ンだと」

もみ合いになり、少年の手がベルトに伸びた。

ガウン！

銃声が耳を打つ。脇腹を押さえて男がうずくまるように倒れ、呻き声をあげた。女が叫びながら後ずさる。

「馬鹿にすんじゃねえぞ！ お、俺はさつき、そこのコンビニやつてきたんだからな！ 一人撃つてやつたぜ！」

銃を振り回しながら、少年が叫ぶ。周囲は一瞬にしてパニックに陥つた。悲鳴と共に、通行人は我先に逃げ出していく。

動き出したのは、那々の方が早かつた。直美の手を掴んで、踵を返す。

「え、那々！？」

「店に戻るの、早く！」

屋内に逃げ込めば、わざわざ追いつては来ないだろう。トチ狂つて発砲されても、建物の中にいれば怪我をする可能性は低い。遮蔽物が山ほどある。五年前の経験から、那々はじく自然にそう思いついていた。

だが、直美が足をもつれさせて転んだ。

「直美！」

那々が振り返ると、

「銃を捨てろ！ 警察だ！」

ペニーハウス の入ったビルから、銃を持った男が飛び出してきたのはほぼ同時だった。

シルバーの大型リボルバーを構え、彼は撃たれて逃げ遅れた男を庇つように動く。ちらりと振り返つて、彼が重傷ではなさそうなを見て取ると、胸ポケットから身分証を取り出した。

「警視庁捜査一課の諸角だ。銃を置いて、両手を……」

「うるせえ！」

少年は銃を振りかざすと、那々の手を借りて立ち上がりかけていた直美に銃口を向けた。

「よせ！」

「動くな！ この女撃つぞ！」

直美的顔から血の気が引き、那々は凍りついたように立ち尽くす。もう少しだったのに！

その時 諸角が開けっ放しにしていったドアが静かに動いた。バン！

いきなり大きく開け放たれたドアに、少年がぎょっとして肩越しに振り向く。瞬間、銃声。銃を持つ少年の右手に、弾丸が叩き込まれた。着弾の衝撃で、銃口が直美からそれる。

ドアから飛び出してきた青年が、斜め前方の地面に向かつて飛び込みざまに撃つたのだ。立ち尽くす那々を傷つけず、万一外しても通行人に当たらない射線を確保するには、少年の斜め後ろ、地面すれすれから上方に向けて撃つしかない。青年はほんの刹那の間にその射線を見出し、少年の右手を撃ち抜いたのだ。恐ろしい腕前だった。

そして、左手を支えに地面に触れるが早いか、身体を捻つて転がりながら着地。その勢いで右足を振り抜き、少年の膝裏を打つた。少年が体勢を崩した時には、諸角がすでに動いている。銃を左手に持ち替え、渾身の右ストレート！

少年は、足下の青年の身体を飛び越えて吹っ飛んだ。

時間にしてほんの数秒。那々が呆然と見つめる間に、すべては終わっていた。

「……まったく、無茶苦茶しやがる」

撃たれた男に応急処置を施した後、救急車待ちの間に少年を引きずり立たせて拘束しながら、諸角は苦笑した。起き上がりつて服を払つた蒼が、涼しい顔で肩をすくめる。

「諸角さんの位置から44マグナムなんて撃ち込まれたら、周りが

タダじゃ済みません」

確かに、下手をすれば跳弾して周囲の通行人に当たつたかもしない。諸角はため息をつき、言及をやめた。その代わり、斎の右手に目をやる。

「それにしても、また可愛らしいのを持つて来たな」

「大口径はまずいでしょ。どうせ近距離になるだろうし、下手に大怪我させないように弱装弾のやつの方がいいかと思って」

ベレッタM950“ジップトファイア”。手の中に収まってしまうサイズの、二十五口径オートマチックだ。としさのことだったので三発しか弾を持ち出せなかつたが、一発は使わずに済んだ。

少年の銃を諸角が没収し、ためつすがめつ観察する。

「銃にナンバーはないか。違法だな。強盗・傷害に銃器不法所持もプラスだ」

「……そういうえば、僕が撃っちゃつたのはOKなんですか?」

「おまえは帯銃^(ライセンス)許可証持つてるし、その銃も申請済みだろ。状況が

状況だから、正当防衛が通るだろ?」

そこで言葉を切つて、諸角が渋い顔になる。

「……それにおまえ、あの公安の“姫”のお気に入りだろ? が。そんな奴をし�ょつ引く度胸のある奴が、本庁にいると思うか?」

「はは……」

斎も、乾いた笑いを浮かべた。

「しかし、こいつも運がなかつたな。よりもよつて、実技試験でオール満点叩き出した化物が相手とは」

「勝手に人を人外扱いしないでくださいよ……」

「実際に人間離れしてるんだからしそうがないだろ。拳銃からライフルまで、全部ターゲットのど真ん中にぶち込みやがつて。どんな訓練してたんだ」

「まぐれですって」

「おまえ、あれ未だに銃器管理課で語り草になつてゐるぞ。知つてゐか?」

掛け合いで漫才のような会話を遮るように、救急車とパトカーのサインレンが響き始めた。ぱらぱらとパトカーを降りて敬礼する警官たちに少年と銃を引き渡すと、運悪く巻き込まれてしまつた少女たちに田に向けた。

「ほれ、あのお嬢ちゃんたちを介抱してやれよ。氣の毒に、怖い目に遭つちましたしな」

「余計に怖がられますよ。田の前で銃撃ったのに」

「まあ、そうかもしれんが……そもそもあのお嬢ちゃんたち、おまえ田当てでここに来たんだるうしな」

「……僕田当て？」

「本当に氣づいてないのな、おまえ……」

呆れたように嘆息する諸角に首をかしげつつ、斎は少女たちの方へ歩いて行つた。

「大丈夫？」

声をかけられ、那々がびくっと肩を跳ねさせる。直美に駆け寄つてからずっと、青年の方を食い入るように見つめていたが、彼が近づいてくるととたんに顔を伏せた。

「やっぱり、怖がられちゃつたか」

それを彼は自分に対する恐怖と受け取つたらしく、諦めたような口調でぼやく。那々はゆるゆると首を振つた。

「……ちが、そうじや、なくて……」

上手く言えない。だが、彼に対しても恐怖などは感じなかつた。ただ、信じられなかつただけだ。

彼は、五年前に死んだはずのあの少年に、よく似た顔立ちをしていた。

白昼堂々の強盗事件に巻き込まれた那々たちは、直美の傷（転んだ時に擦り剥いていた）の手当の後、事情聴取のため警視庁に連れて来られた。現行犯逮捕したのが本庁の警部である諸角本人だったこともあるが、強盗傷害及び銃器不法所持という重大事件だったことや、許可証持ちとはいえ一応民間人である斎が発砲した件で少々ややこしい事態になってしまい、早々に本庁の捜査一課に処理が回されたのだ。

当然のごとく引っ張られてきた斎が解放されたのは、午後七時を過ぎた頃だった。型通りの聴取は受けたが、諸角の口添えもあってどうにか無罪放免で済みそうだ。

もう ペニー・ハウス の営業時間は終わっている。結局店を放り出してしまった形になるが、不可抗力だから仕方がない。斎はとりあえず、壁に背を預けてぼんやりと廊下を眺める。あまりうろうろするなと諸角に釘を刺されたのだ。

警視庁に来るのは、別に初めてではない。帯銃許可証を申請する時、実技試験を受けに来たのはここだつたし、何度か銃の修理や整備の仕事を受けて、品を届けに来たこともある。事情聴取をされたのは今回が初めてだが。

「…………あの…………」

ほそい声に、ふと我に返った。そこに立っている少女の姿を見つけて、安心させるように微笑む。

「大丈夫？ もうすぐ帰れると思うよ。 って、僕もこんなのも初めてだから、詳しいわけじゃないんだけど」

少女は答えずに、顔を伏せる。ずっとこの調子だった。星海那々。運悪く事件に巻き込まれてしまつた少女。

「友達は？」

「まだちょっとパニック入つてるらしくて、婦警さんに面倒見もらつてます。あたしは、気分転換してきたりいって言われて」「うん、その方がいいと思うよ」

彼女の表情は緩まない。斎は視線をさまよわせる。

「……平氣で銃を撃つ人間は、やつぱり怖い？」

尋ねると、ふるふるとかぶりを振る。

「……怖くは、ないけど。でも……」

似てるから。

呟いて、彼女は黙り込んでしまった。

「……そう」

斎はまた、廊下の壁に視線を戻した。誰に似ているのかは、訊かない。

しばらく、沈黙。

「あの、天瀬さんは」

「え？」

再び彼女を見ると、見上げてくる視線にぶつかった。初めて、真正面から彼女に見つめられている。

「どうして、あんなに銃の扱いが上手いんですか？」

「あ……」

痛いところを突いてくる。斎はため息をついた。

「……銃ガン^{スミス}工ミスつて、知つてる？」

「銃工？」

「銃を整備したり修理したり、改造したりする職人のこと。僕、一応営業許可受けてる公認銃工だから。銃つて、整備しつ放し、改造しつ放しつてわけにはいかないでしょ？ ちゃんと試し撃ちして、問題なく撃てるのを確認しなきゃいけないし、資格試験の時には射撃指導なんかするから、銃を撃つ機会は下手したら現役自衛官よりも多いんだ。扱い慣れてて当然なんだよ」

事実である。帯銃許可証の申請のためには試験をパスする必要があり、そのためには射撃の訓練を受けなければならない。とはいえる。

指導までできる人材となると、数は限られてくる。まさか現職警官や自衛官が出張つて行くわけにもいかず、そうなると民間人でありますながら、ある意味銃のスペシャリストでもある銃工などはおあつらえ向きの存在なのだ。自動車教習所の教官のようなものである。

説明に納得したのか、那々は口をつぐんだ。そういえば、と斎はふと思い出す。提出してあるベレッタを、諸角から受け取る話になつていたのだが、まだどううか。

ベレッタに意識を飛ばしてしまった斎を、那々はそつと盗み見た。彼と、重なる。

一瞬でわざかな射線を捉え、銃を持った相手を制圧した技量が、車を運転しながら追手を仕留めたあの少年にオーバーラップするのだ。その顔立ちや、穏やかな物腰、何もかもが彼を思い出させてやまない。

もう、彼はないのに。

この世に、いるはずのない人なのに。

「 っ……」

泣きそうになるのを、懸命にこらえた。

よりもよつて、今日。こんなに、彼に似た人に逢つてしまふなんて。

彼が生きていれば、まさに田の前のこの青年のようになるのだろうと、ぼんやりと思う。やさしい、穏やかな雰囲気をたたえた人。それでいて、いざとなれば野生の獣のように、牙を剥くこともできる青年。

そういえば、年齢的にもぴったりかもしれない。

そこまで考えて、那々は斎から田をそらした。考えれば考えるだけ、空しくなつてくる。

過ぎた過去は、どれだけ望もうと変わらないのだ。

互いを見ないまま、斎と那々はしばらくそこに立ち尽くす。

「 星海、那々さん？」

女性の声に、那々ははつと顔を上げた。

「あ、はい」

「お母さんが迎えにみえたわよ。お友達も」「はい！」

ほつとして、那々は部屋に戻らうとした。ふと斎を見ると、彼はどう解釈したのか苦笑する。

「いくら何でも、僕は迎えに来てもらひような年じゃないよ。ベレッタ待ち」

「ええと、そういうつもりじゃなかつたんですけど……」

「あ」
勘違いに気づいて、斎がぽかんとした顔になつた。那々が笑いをこらえる。

「おい、待たせたな」

ちょうどやつて来た諸角が、「ありう」とかベレッタを斎目がけて投げて寄越した。

「うわあっ！」

絶叫しながら、斎が飛びついて受け止める。しっかりと両手で抱え込んで、きつとばかりに田を向けた。

「何でことしてんですかっ！」

「おい、いくら何でも弾入った銃を投げるほど非常識じゃないぞ俺も。ほれ、弾はこっちだ」

「心臓に悪い冗談はやめてください。かつちつ一秒は止まりましたよ」

ぶつくさ言いながら、斎はベレッタをポケットに突っ込んだ。弾は、マガジンに詰めて銃にはセットせず、ハンカチに包んでシャツの胸ポケットに。転ばなければ大丈夫だらう。

事情聴取を受けた部屋に足を向けると、椅子に座っていた女性が立ち上がつた。

「那々！ あんた大丈夫なの！？ もひ、電話もひつた時は倒れるかと思つたわよ」

「うん、大丈夫。怪我もないもん」

女性は娘の無事を確かめて安堵の息をつく。そして諸角に気づいて目を見張った。

「まあ、もしかして刑事さん？あの時の」

「はあ。五年ぶりですか。すっかり大きくなつてて、最初は分かりませんでしたよ。名前を聞いて気がつきましたが」

「……知り合いなの？」

首をかしげた那々に、母が顔をしかめた。

「あなた、覚えてないの？あの事件の時に、お世話になつた刑事さんよ。ほら、帰つて来てから少しして、挨拶にいらしたでしょ。その時に、会つてゐるはずだけど」

「え……？」

思わず見上げると、諸角は笑つて手を振つた。

「いや、五年も経ちや顔も忘れるせ。あんな事件の後だつたし、むしろ思い出したくないだろ？」

「……じゃあ、あの教団の事件の時の……？」

「正直、あの時は、警察はほとんど何もできなかつたからなあ……あのペインレス・ドッグ　が子供を連れ出してくれてなかつたら、捜査令状も下りたかどうか……」

思いがけない再会にて、那々も諸角も驚きが先に立つて、一瞬時を忘れた。

だから、気づかなかつた。

少し離れて立つ斎の表情が、凍りついたことに。

「畜生！」

がん、と部屋の壁に拳を打ちつけ、西脇哲治は吐き捨てた。鞄を放り出して、燃えるような眼で何もない壁を睨みつける。

(俺だつて！　俺だつて、あれくらい……！)

彼女を守るのは、自分のはずだつた。先にあいつが飛び出して来

なければ……！

哲治が彼女に出会ったのは、高校に入学してすぐだった。廊下ですれ違つただけの、ありきたりといえばありきたりな出会い。

星海那々。一年後輩の、哲治にとつては誰よりも愛しい少女。

普段の明るい勝気な表情も、時折見せる遠くを見るような表情も、すべてが哲治の目には好ましく映る。他の少女たちのように、どれだけ自分を飾り立てるかなどという、つまらないことに固執していないのもいい。

彼女のことを知りたいがため、何度か後をつけたこともあった。家も知り、よく立ち寄る店も見つけた。何度か手紙も書いたが、特に反応はないように見える。だが、いつかは返事をくれるはずだ。根拠のない思い込みでしかないが、哲治にとつては確信だった。

今日は、彼女が友人に連れられて新しく見つけた店に行くというので、こつそりと後をつけた。顔のいい店員がいるからと彼女を引つ張つて行く友人が鬱陶しい。だが彼女自身は乗り気ではないらしく、哲治をほっとさせた。

そう、大して気にはしていなかつたのだ。

あの事件が起こるまでは。

彼女に銃が向けられた時、哲治の身体は硬直して動かなかつた。周囲の通行人に紛れたまま、彼女を救うために割つて入ることもできなかつた。

那々を救つたのは哲治ではなく、ビルから飛び出してきた青年だつた。

彼が銃を鮮やかに操り、刑事と協力して強盗を取り押さえたのを、哲治は目の前で見せられたのだ。ことが終わつた後に、那々があの青年を食い入るように見つめていたことが、身震いするような屈辱感を呼び起こした。

(俺だつて、あれさえあれば……！)

動けなかつた後ろめたさと嫉妬を、彼への対抗心にすり替えて、

哲治は歯噛みした。

苛々と頭を搔きむしり、机の引き出しを開ける。せりんと並べたノートや筆記具をかき回すようにじけると、その下に隠してあったピルケースを掘み出した。中から小さな袋を取り出して、中の錠剤を見つめた。

そうだ。今日調子が悪かつたのは、これを忘れていたからだ。痛恨のミスだった。

初めてこれを飲んだ瞬間、哲治の世界は変わった。痩せぎすで上目遣いばかりだった自分の顔が、精悍で自信に満ちた表情に変わつていったあの時の快感を、哲治は生涯忘れない。

これさえ飲めば、自分は変われる。あいつなんかよりずっと強くなつて、彼女を守るんだ。

哲治は錠剤をピルケース」と制服のポケットに突っ込むと、リビングに向かった。哲治名義の通帳とカードが、サイドボードに保管されている。カードだけをそつと抜き出して、ポケットにしまい込んだ。

もう薬が残り少なくなつている。補充しなければならない。薬は高価で、哲治の貯金は尽きかけていたが、そんなことは言つていられない。薬がなくなれば、もう自分を保てなくなりそうなどころまで、彼は薬に頼りきつっていた。

玄関の方で音がして、哲治は慌てて引き出しを閉めた。

「哲治？　帰つてるの？」

「う、うん」

母の声から逃れるよつて、哲治は自分の部屋へと駆け戻つた。

ドアの開く音に、カップを片付けていた立河は顔を上げた。斎の姿を見つけて、ほつと頬を緩める。

「どうだつた」

「うん、何とか無罪放免。諸角さんが口添えしてくれて。ここまで

「送つてもらつたし」

「そりや、良かつた」

そう言つて、斎の浮かない表情に気づいた。

「……どうした？」

「うん……ちょっとね」

斎は息をついて、椅子に腰かけた。カウンター越しに、立河を見上げて苦笑する。

「世の中つて狭いよね。まさか、また会うなんて思わなかつた」

「会う？」

「五年前の、女の子」

立河が息を呑んだ。

「……確か、なのか」

「五年前の事件の時さ、最初誘拐事件つてことで、本庁の捜査一課が担当したでしょ。諸角さんが、覚えてたんだ。その子のお母さんも、諸角さんと顔見知りで。間違いないと思つよ」

「そりや、」

かぶりを振つて、立河はカウンターを出た。斎の隣に腰かけ、肩に手を置く。

「だけど、もうおまえは ペインレス・ドッグ じゃない。天瀬

斎。俺の甥だ」

「……うん」

斎は肯いて、立河と入れ替わりにカウンターに入る。

「僕が淹れるよ。何がいい？」

「ブルマンだ」

「……何かさ、お茶汲み特権でこいつそりいいお茶飲んでるのしみたいだよ」

「頼む客が少ないんだ。豆を消費しないと、新しいのが使えんだろ」「はいはい」

口の応酬と並行して、斎の手は慣れた様子で豆を挽き、サイフォンのフラスコで湯を熱しながら片手間にカップも温めておく。サイ

フォンから香ばしい香りが立ちのぼるようになるまで、そう時間はからなかつた。カップに注いだブルーマウンテンブレンンドを、立河の前に置く。

「どう?」「

「まあまあだな。俺には遠いが」

「年季が違うよ。でもまあ、進歩か」

もう一杯分を余熱なしのカップにそのまま注ぎ入れ、自分の口に運んだ。

……やはり、カップは温めるべきだったかもしない。少しぬるくなつた。

「斎」

「ん、何?」

「コーヒーを啜っていた斎は、視線だけを立河に向ける。立河は、半分ほどでやめて斎を見据えていた。

「……おまえ、銃工を辞めるつもりはないか」

斎が視線を落とした。ポケットには、突っ込んだままのベレッタ。「俺が銃を扱えなくなつてから、おまえが継いでくれたのはまあ、ありがたかった。一度銃を持つちました以上、俺も所詮、銃から離されられない人間だ。おまえが傍にいるおかげで、安心して喫茶店のマスターなんぞやっていられる。　だが、おまえはそれでいいのか?　離れられなくなつちまうぞ」

「……今更だよ、叔父さん」

カップを置いて、斎は立河の隣に座る。ポケットのベレッタを右手に握り込んだ。

「僕の方が、よっぽど染まつてるんだ。銃が身体の一部になつてる。切り離せない。　ずっと、そうやって生きてきたんだ」

「もう、終わつたことだ。　ペインレス・ドッグ　はもう死んだ」

「そうかもしれない。でも僕は多分一生、火薬とガンオイルの匂いを落とせない。銃の撃ち方、ナイフで人を殺す方法を、箸の持ち方と同じくらいはつきり身体が覚えてる。そういう風に、育てられた

から

「斎、それは」

「叔父さんは、ぼろぼろだつた僕に 天瀬斎 つていう人生をくれた。だから僕は、叔父さんの銃になる。そう決めた。それでいいでしょ？」

「……馬鹿か。わざわざ苦労を背負い込みに行きやがつて」

「うん」

笑つて、斎はベレッタをカウンターに置いた。弾もその隣に。「……こうこう話つて、お酒でも飲みながらなら、まだ格好つくんだろうね」

「原因の大部分はおまえだぞ。成人したら親父と息子みたいに一杯酌み交わしてやるつと思つてたのに、まさかおまえが下戸だとは思わなかつた」

「う、それは僕の責任じゃない。DNAの掛け合わせの問題だよ」「訓練しろ。どんな下戸でも回数重ねりや、それなりに飲めるようになるもんだ」

「嫌だ。ビールは苦い。チューハイは炭酸がきつくて飲みにくい。やつぱりコーヒーでいいや」

「どんな味覚だ、おまえは「呆れたように、立河が笑う。

自分を“家族”として受け入れてくれる人がいる。それが嬉しいでならない。

考えてみれば、妙なものだ。斎を家族として愛してくれた人は、皆斎とは血の繋がりのない人だつた。

守りたい。だから、銃は捨てない。

斎はそつと、ベレッタに指を滑らせた。金属の冷たさを心地よく感じる自分も、やはり銃から離れられないのだとひとりづいた。

翌日、那々は一人で登校した。直美はまだ昨日のショックから立ち直れず、今日は欠席すると連絡があつたのだ。

無理もない、と思う。銃を向けられるなんて、普通は経験しない。直美のようなお嬢様育ちなら、なおさらだ。そこへ行くと、自分は少々規格外なかもしれないと、那々は諦め半分に思つた。小学生にしてすでに誘拐・監禁経験があるので。

幸い昨日の事件は、学校では教師にしか連絡が行つていない。そう騒がれることもないと、普通に登校した。

昇降口で上履きに履き替えようとした時、一通の封筒が乗せられているのに気づき、眉をひそめる。嫌な予感がした。

封筒の表には、ぽつんと那々の名前が書かれている。

(げつ……ストーカー！？)

見慣れすぎた字体に、那々は反射的に手紙を握り潰しかけた。今まで家にしか来なかつた手紙が、学校の下駄箱に。導き出される答えは一つ。

(ストーカーは、この学校に通つてることね)

全校生徒七百人超、その内半数は女子だから除外……したいところだ。いくら女友達が多いからとはいえ、ストーカーまで行つてほしくはない。

そもそも、名前も分からぬのだ。反応の返しようがない。好きだの何だと書き連ねてくるくらいなら、まず名前くらい書いて寄越せと那々は言いたい。

封筒を開けると、今回の手紙は際立つて短かつた。

【昨日は大変だつたね。でも今度は、僕が守つてあげるよ】

そのまま握り潰して、ゴミ箱に叩き込んだ。
寒い。寒すぎる。

コイツに守られるくらいなら自分の身は自分で守つた方がマシだ。本気で護身術でも習い始めた方がいいかも知れない。無論、このストーカーも撃退の対象である。

教室へ向かう那々から少し距離を置いて、一人の男子生徒が同じ

方向へ歩き始める。西脇哲治は通りざまにちらりと「ミミ」箱を覗き込み、少し顔を曇らせた。彼女にはまだ、自分の想いは通じないようだ。

幸運なことに、彼女のクラスと哲治のクラスは、同じ階にある。後について行つても怪しまれない。

那々が自分の教室に入るのを見届け、哲治は心持ちゆっくりと、その前を通り過ぎた。トイレに入ると、個室の中でポケットを探り、ピルケースを取り出す。残り少ない薬を、一錠だけ飲み下した。この薬を飲むと、頭の働きもクリアになるのだ。今日は数学の小テストがある。評価を下げるためにも、落としたくはなかつた。だが、これで残りはあと四錠。今日中にもう一錠は飲むだろうから、残りは三錠になる。早く補充しなければ。ルートはあるのだが、今は手持ちがない。帰りにでも、どこかの銀行のATMで現金を下ろしに行くことにする。

トイレを出ると、人のいない空き教室を探して飛び込み、携帯のメモリを呼び出した。

「もしもし?」

『おお? 誰かと思つたら西脇じゃん? 何、またクスリ?』

「うん、もうあんまりないんだ。またもらえるかな。前と同じ量で、構わないから」

『金は?』

「放課後下ろして持つてく。できるだけ、人のいないところがいい」「じゃあやっぱ屋上だろ。鍵くすねて開けとくから、テキトーに上がつて来い」

「分かった、じゃあ放課後に」

話を終えるとほつとした表情になつて、哲治は携帯をポケットにしまい込む。そのまま彼が足早に出て行つた後、教卓の中から一人の少女が顔を出した。彼女はスカートのポケットからメンソールの煙草を取り出し、火を点けてくわえると、ほとんど金に近づくまで脱色した髪をかき上げた。

「……何か、マズイもん聞いたやつたかなあ」

桜庭まひるは、左手に持ちつ放しだったライターのような携帯灰皿に、灰を落とし込んで煙を吸い込む。朝の一服は、彼女の日課だつた。学校で吸うのが、またスリルがあつていい。しかし今日ばかりは、そのせいで妙な話を聞き込むことになつてしまつた。

「……ま、いつか

黙つていれば自分に害が及ぶことはない話だ。そう片付けて、まひるは切れ長の眼を細め、メンソールの煙を味わうこととした。

グリップを外し、サイドプレートを外すと、細心の注意を払つてメインフレームからパーツを取り外していく。破損したシリンドラーは脇へ置いておいて、パーツの清掃を優先することにした。シリンドラーの方は、メーカーの代理店から仕入れておいたものがある。バレルカバーも外してバレルを露出させ、トリガー部分も徹底的にばらしてみる。やはり全体的に汚れていた。バレルはもちろん、ハンマーからトリガー、ネジ一本に至るまで、汚れ具合を見て丁寧に磨き上げていく。

それらの作業が一段落ついたところで、斎は身体を起こして大きく伸びをする。壁の時計の指す時刻は午前十時一十分。今日は喫茶店の方は定休日だった。とはいゝ、完全な休日になどならないところが自営業の辛さだ。立河も普段はできない倉庫の整理をやってくるし、斎は銃工の方の仕事がある。こちらの方には定休日などないのだ。

幸い、このところはそう立て込んでいないので、すぐに諸角のM29の修理にかかることができた。このモデルは好きなので、パツを取り寄せておいたのも役に立つていて。刑事などという職業では銃に命を預けるようなことも多いから、できるだけ早く届けておきたい。

磨いたパーツを組み立てる。新しいシリンドー（磨き済み）を取り付け、軽く回して調子を見る。良さそうだ。

ダミーカートリッジをセットし、引鉄の落ち具合を確認。カートリッジを抜いて44マグナム弾を三発持つと、階下のショーティングレンジに向かう。

ショーティンググラスをかけると、右端のレーンに立つた。距離は十五メートル。弾をシリンドーに装填し、構えた。射撃姿勢はスタンディング、両手でホールドする。ハンマーをコック、サイトをターゲットに合わせる。

撃つた。

ガウン、と銃声が耳を打ち、反動が両手を伝わる。ターゲットの真ん中を綺麗に貫通した。続いてもう一発。右に一ミリほどずれて、開いた穴の縁が削られる。

次いで、右手に持ち替えた。コック、発射。上方に一ミリ。穴は増えない。

（こんなもんかな）

シリンドーをスイングアウトさせて、空薬莢を排出エJECTした。

店に戻り、M29をもう一度さつとクリーンアップしてから保管棚に置くと、斎は三階、つまり自宅スペースに戻った。工房にしばらく籠った上に、試射で硝煙の臭いもついている。ガンオイルと硝煙の臭いをさせてコーヒーなど飲みに行つたら、それこそ叔父に殴られかねない。

適当に着替えを掴んで、バスルームに直行した。

服を洗濯機に放り込み、軽くシャワーを浴びて汗を流す。着痩せる性質なのか、服の上からでは細身に見えるが、実際は意外やしつかりした筋肉がついて、まるでアスリートのようだ。

硝煙の臭いを落とすように肌を滑っていた手が、右の鎖骨の辺りでぴたりと止まつた。かすかな傷痕を指でなぞる。自嘲のような笑みが漏れた。

十分ほどでさつとシャワーを浴びると、バスルームを出て着替え

た。タンクトップとブラックジーンズ。タオルを首にかけたまま、喫茶店の方に顔を出した。

先に倉庫を覗いたが立河の姿はなかつたのだ。極めつけに、店の方からコーヒーの芳香が漂つてきているとなれば、

「叔父さん、倉庫の整理は？」

「もう終わつた。おまえも飲め

コーヒー ブレイク決定である。

今日はキリマンジャロだ。ゆつくじと味わつてみると、立河が二杯目を注ぎ足しながら言つた。

「下で何やらガンガンいつてたみたいだが、もう修理は済んだのか？」

「うん、シリンドーと、後はメンテだけだつたし。これから諸角さん連絡しようと思つて」

「そうだな、早い方がいい」

いくら防音設備ができるいても、わずかながらこぼ響くのである。いつもは店内にBGMがかかっているので、客で氣づく人間はいないだろうが。

店の電話で諸角に連絡し、銃が仕上がつたのを伝えると、すぐに行くと返事が返ってきた。やはり自分の銃が一番なのだろう。彼を待つ間、コーヒーを楽しむことにする。

「モカ、淹れとこつか」

気を利かせて、立河はモカブレンドの準備を始めた。

諸角は、驚くほど早くやって來た。斎が迎えに出ると、開口一番言い放つた。

「ずいぶん早かつたな。しばらくなんて言つから、三、四日くらいは覚悟してたぞ」

「29系は僕も好きなモデルなんで、パーツを取り寄せといたんですよ。それに、ここんとこそんに立て込んでなかつたんで。一応、徹底的にばらしてメンテしちきました」

「悪いな。大分汚れてただろう」

そこで、タイミングよく出されたモカブレンドを、礼を言つて受け取る。ガブリと一口飲みながら、疲れたように嘆息した。

「まったく、近頃のガキはどういつもこいつも、安易に薬なんぞに手え出しやがつて」

「……昨日の事件、ですか？」

「ああ。きつちりキメてやがつた。俺のM29を傷モノにしてくれた奴もな。最近の少年事件の半分近くが薬絡みだ。まったく、頭が痛えよ」

「薬も銃も、今は結構簡単に手に入るようになつてますしね」

銃規制緩和の影響で、正規の銃器輸入の裏に隠れて、密輸も増えた。さらに、その正規の輸入銃を「コピー」した銃も出回つている。ドラッグの蔓延とあいまつて、銃器関連の少年犯罪が確実に増加していた。とはいえ、今更また規制を強化したところで、減るのは合法の銃だけだ。非合法の銃は減らない。

ちなみに警官の銃は基本的に貸与品だが、規制緩和を受けて自前の銃を持つ警官も増えた。諸角もその一人だ。もちろん警官の銃はきちんとナンバーが振られて管理されるが、銃工に持ち込んで修理するなどの場合は、今回のように代替品を借りることが認められる。無論、持ち込み先は公認を受けている銃工に限られるが。

「そういうことだ。　おまえのところにも、来てないか。カスタムの依頼とか」

「ウチは非合法の銃は受けませんよ。合法銃でも、話聞いて、犯罪に使われそうな場合は断つてます」

「公認銃工の鑑だな」

「せつかくの営業許可、取り消されたくないですから」

肩をすくめて、斎はぬくなつたコーヒーを飲み干した。

「下、鍵開けてきます」

「ああ、俺もそろそろ行こう」

諸角も席を立つ。連れ立つて一階に下り、斎が鍵を開けた。諸角はショルダーホルスターからM629を抜いて返し、自分のM29

を受け取つて、嬉しげに眺めた。

「やつぱり黒い方が落ち着くなあ

「諸角さん、レンジ使います？」

「おまえの調整なら間違いないだらうが、まあ慣らしとくか
下のレンジに移動し、ターゲットを見て、諸角が感心したような
声をあげた。

「あれ、何発撃つた？」

「三発です。両手と片手で」

「相変わらず凄え腕してやがる。俺なんか十五メートルじゃ、十セ
ンチ内に集めるだけで精一杯だつてのに」

まじまじとターゲットを見つめ、諸角は銃に弾を装填して構えた。
両手のホールドで、引鉄を引く。

真ん中の穴から一センチほどずれて、ターゲットに穴が増えた。

「くそ、やつぱりオール満点にや敵わんか」

もう一発撃つと、今度は一センチほど左上。それでも中心近くに
集めている。

「ハンマーが引きやすいな。やつぱりメンテはしつべべきか

「ホントなり、使った後はマメにメンテするのが一番なんですね
けどね

「そんな暇があると思うか？」

「ですよね」

店に戻り、M629を片付けて、修理代金を受け取る。もちろん、
領収書はきつちり発行した。会計に回せば、経費で落ちるのだそう
だ。

帰りざま、諸角は振り返つた。

「……おまえは、薬なんかに関わるんじゃないぞ

「分かつてますよ。そんなものに手を出したら、終わりですから」

「そうだな。おまえは分かつてると思つんだが、どうも心配にな
つてな。若い奴中心に、広まつてゐらしくんだ」

「こんな商売ですから、銃や薬の怖さは知つてますよ

「ああ、そうだったな」

ひらひらと手を振つて、諸角は店を出て行つた。

「……心配、か」

斎は少し笑つた。何となく、面映い気分になる。

ペニー・ハウスの常連の中でも、諸角は特に斎に肩入れしてくれている。息子に重なるのだと、前に聞いたことがあった。小学校の時に、交通事故で亡くなつたらしい。生きていれば、斎と同年代になつていたはずだそうだ。

『そりやあ心配さ。おまえはもう、私の息子なんだから』
ふと、思い出した。過去に、斎を“家族”として、愛してくれた人。

大丈夫。僕にもまた、“家族”ができたから。
僕はまだ、生きていられる。

軽く息をついて、斎は店を閉め、階段を上つていいく。コーヒーの匂いが漂ってきた。吸い寄せられるように向かう足に、苦笑した。
(薬物中毒にはならなくとも、カフェイン中毒はもう手遅れかな)

校舎の屋上は、原則立入禁止だ。だが、哲治は人の目のこととを確かめつつ、屋上への階段を上つていた。バリケードのように置かれた机や椅子は、一人一分ほど間が空けられている。相手はもう来ているようだ。

いつもは鍵がかかっているはずの重いスチールのドアは、軋みながら開いた。

「よーう、西脇」

コンクリートに胡座をかけて、車座になつっていた四人の少年が、こちらを振り返る。一人が手招きした。

「金は?」

「下ろしてきた」

財布から取り出した十枚近い一万円札に、一人がひゅう、と口笛を鳴らす。

「さあすが、お坊ちゃんは氣前がいいよなあ

「そんなことより、薬は？ あるんだろう？」

「ああ、ほらよ」

袋に入れられた錠剤を受け取つて、哲治はほつとした笑みを浮かべる。

「イイだろ？ ヴァンパイア・キス はさ」

「最高だよ。これ飲み出してから、成績上がったんだ」

「だろ？ アタマは冴えるし、腕つ節も強くなんだぜ？ 最ツ高のドラッグだよな」

「けどさ、他のも試してみたくなえ？」

一人が、ポケットから紙袋を引っ張り出した。病院で処方される薬のように、小分けにされたビニールに薄いピンクの粉末が入っている。

「これ、ヤル時に使つたら凄えイイんだぜ。一度使つたらもうこれナシじやできねえつてくらい。おまえだつていんだろ、ヤッてみたい女の一人くらしさ」

那々の顔が、頭に浮かんだ。頬が熱くなつてくる。少年が、にんまりと笑みを浮かべた。

「だろ？ 使つてみろよ、意識飛ぶくらいイケるぜ」

「け、けど彼女は、こっちのことなんて知らない……」

「そんなもん、ヤッちやつたもん勝ちじゃん？」

「そーそー、向こうだつて騒ぎ立てやしねえつて。心配なら、相手にも ヴァンパイア・キス 使わせりやいいんだよ。したら、薬欲しさに何でも言いなりだぜ？」

その言葉は、哲治の頭に響き渡つた。

「彼女を、自分の好きにできる？」

「……それ、いくら？」

気がつくと、口が勝手に声を出していた。

「そう来ねえと。グラム一万。高純度品だつてよ

「一万か……」

ぎりぎりしか下ろしてこなかつたので、手持ちがない。だが、さつきの言葉が頭について離れなかつた。

哲治の逡巡を見通したように、一人が唇を歪めた。

「……けどさ、おまえもそろそろ金きついだろ? ヴァンパイア・キスも結構するからさ。」いつの条件呑むなら、俺たちの仲間つてことで、卸値で回してやつてもいいぜ?」

「ほ、ホントに?」

「ああ」

「それで、その条件つて?」

勢い込んで尋ねる哲治に、少年は悪魔の囁きを吹き込む。

「仲間を増やすんだ」

「仲間?」

「ヴァンパイア・キスを他の誰かに飲ませて、薬なじじやいられないよつに仕向けるんだよ。そしたら、俺たちの仲間だつて認めてやるよ」

「飲ませるつて……どうやつて」

「それは、自分で考えるよ。そういう頭のある奴じやねえと、仲間とは認められねえな」

「それとよ、獲物はなるだけ、金持ちの坊ちゃん嬢ちゃんにしろよ。おまえなら、そういう知り合いいんじやねえの?」

ひとしきりはやし立て、少年たちは屋上から引き上げていった。哲治は一人取り残されて、ぼんやりと考える。

誰かを犠牲にする。そうすれば、彼女が手に入るのだ。

その時、閃いた名前があつた。

(そうだ……あいつにすればいい)

そして、ヴァンパイア・キスでハイになつた脳細胞が、近付くための作戦を組み立てていく。

(……それでいい。そうすれば、彼女は俺のものになる!)

自分で考えついた作戦に満足し、哲治はうつそりと笑った。

警察組織の垣根を越えたたくさんのハイクションです。

藤城グループ
ふじしろ

日本で最初に銃の輸入・特許使用許可を取つての銃製造を始め、一気に日本有数の規模となつた企業体である。もともと重工業からIT産業にまで手を出し、幅広く活動していたが、銃の規制が緩和されるや、いち早く銃器分野に乗り出したことで知られていた。機を見るに敏というか、銃規制緩和の動きを早くから掴んでおり、水面下で海外メーカーとの商談を進めていた結果、銃器の分野では圧倒的なスタートダッシュで差をつけ、一躍経済界のトップクラスに躍り出たのだ。

その藤城グループの中核ともいいくべき存在、会長の藤城隆造^{（とうじょうりゅうぞう）}が脳溢血で他界したのは一年半ほど前のことだった。^{（まさか）}藤城グループの全権は、長男であり十年来の補佐役でもあつた藤城雅孝^{（まさかずかず）}に受け継がれ、彼は父に劣ることなくその任を全うしていた。

だがそれは同時に、多数の敵を作ることも意味する。会長である彼の周囲には常に護衛チームが付き従い、大臣並みの警備体制が敷かれていた。

一圓千秋は、その護衛チームの一員として、現在ホテルの屋上にいた。

調整から戻つたばかりのシグザウエルSSG3000を抱え、ビル前のロータリーを見下ろしていた。グループ系列のホテルのオープニングセレモニー。本来なら会長自ら出張るような仕事ではないのだが、ここに支配人になる人物は血縁に当たるという。そこそこできる男ではあるのだが、やはり箱をつけるために直々の出席を、と頼み込まれたのだそうだ。同族会社はこういつところが不便である。

屋外で貴賓席など、狙つてくれと言つてゐるようなものだが、それで本当に襲撃されるようでは護衛チームの立場がない。ちゃんと仕事はしてゐる。会場にはそれとなくチームの人間が紛れ込み、周辺にも数十人体制の警備網が敷かれていた。そして、最も怖い狙撃に対しては、考え得るポイントに人員を配置、狙撃自体を阻止すべく布陣している。しかしそれでも突破され、襲撃された場合そこで、千秋のような狙撃手の出番となるのだ。このホテルは近隣の建物の中で一番高い。言い換えれば、周囲を見やすく周囲からは見られにくい。陣取るには絶好。

数十メートルの下方から、来賓の長広舌が切れ切れに聞こえるのを聞き流しながら、千秋はふと目をすがめた。

右斜め向かい、距離約六百メートル。このホテルよりも若干低いビルの屋上で、黒い影が動いた。千秋はインカムで、そのポイントの警備に当たつていたはずの同僚を呼び出す。

「おい、ポイント18！ 屋上に人上がつてんぞ！ 警備はどうじた!?」

応答はなかつた。

舌打ちして、千秋は素早く伏射姿勢を取り、SSG3000^{ブローン}を構える。銃口にはすでに、サイレンサーを取り付けてあつた。そのままコッキング^{チャンバー}、薬室に弾を込める。スコープの倍率調整。スコープ越しに、向かいのビルの人影も伏射姿勢でライフルを構えているのが見えた。

「ちいツ ！」

風は微風。ほとんど勘で照準を合わせ、引鉄を引く！

バスン、とくぐもつた銃声と共に、硝煙が広がつた。強烈な反動が身体を突く。ライフルを上手くホールドしていないと、この時点で肩か鎖骨を持つていかかるが、もちろん千秋がそんな羽目に陥るはずもない。すぐにコッキング、スコープで相手の状態を確認した。わずかに風を読み違えたか、それとも焦りが出たせいか、銃を狙つたはずが肩を射貫いていた。防弾ベストを着っていても、ライフル

弾ならあつたり貫通する。引鉄を引くのは千秋の方が早かつたようだ。向こうに硝煙らしきものは見えない。サイレンサーをかませたところで、硝煙を消すことはできないのだ。

競り勝つことに息をついて、千秋は今度は誤差を考慮し、落ち着いて狙つた。さつきの一発で、相手はこちらの存在に気づいた。失敗を悟り、ライフルを置いたまま逃げようとする。

(逃がさねえよ)

一発目で風の流れは大体読めた。照準合わせ、発射。向こうの屋上のドアノブを吹っ飛ばした。コツキングして第三射。足が止まつた相手の、左足を掠める。まともに当たら出血多量で死なせる可能性がある。そこまでやると過剰防衛に問われかねない。

必要以上の怪我を負わせず、動きは止めるという離れ業を成功させて、千秋はインカムで近くのポイントに連絡する。

「ポイント一八の屋上で、狙撃手を一人撃つた。肩と足に一発ずつぶち込んであるから動けないはずだ。押さえてくれ」

『了解した』

短い返答から数分と経たずに、向こうの屋上のドアが蹴破られた。同僚たちに狙撃手が取り押さえられるのを確認して、千秋はようやくスコープから目を離し、身を起こした。

カウンタースナイピング。それが千秋の役目だった。遠距離からの狙撃が怖ければ、逆にその狙撃手を狙撃し返してやればいい。その発想のもとに、護衛チームには複数の狙撃手が所属している。千秋はその中でもトップクラスの腕前を持ち主だった。

下のロータリーでは、セレモニーが終わろうとしていた。頭上で狙撃戦が行われたことを、ほとんどの客は気づいていないようだ。藤城の周囲を護衛チームが固め、特別仕様の車に乗り込むのを確認して、千秋はSSG3000をライフルケースにしまった。薬莢も拾い上げてポケットに突っ込むと、ホテルの屋上を後にした。

エレベーターで地下駐車場まで下りると、チームの同僚が待つていた。

「会長は？」

「現在移動中だ。狙撃手を押されたそつだな。よくやつた」
リーダーの大杉のねぎらいに、気になつたことを尋ねる。

「そついや、あそこの警備してた連中は？」

「襲われたそつだ。一人、重体で病院に担ぎ込まれた」

「そつか……」

覚悟の上の職場とはいえ、いい気分ではない。

「今度はどこかな」

「狙撃手の他に数人、押さえてある。吐かせるぞ」

大杉が言うと凄みがある。身長百九十に届こうとう長身とそれに見合つた逞しい体格。初めて会う人間はほとんど、威圧されてしまって目を合わせられないという。性格は至つて物静かなのだが、仕事となれば相手に容赦などしないだろう。

相手の狙撃手たちに少々同情しながら、千秋は同僚たちと共に黒のヴォクシーに乗り込んだ。何台かに分乗した護衛チームが、次々に駐車場を出て行つた。

「今日はもう、外出はないだろ？」

「ああ、あのまま自宅に戻られるそうだ」

「やれやれ、じゃあ俺らの今日の仕事はこれで終わりつてことか」
戻つたら、SSG3000を念入りにメンテナンスしなければなるまい。今日の殊勲者だ。

千秋は車窓から見える景色にぼんやりと見入る。

ふと、ペニーハウスのコーヒーが飲みたくなつた。ついでにメンテナンスも斎に頼んで……と考えたところで、舌打ちする。

今日は定休日だった。

帰宅後、那々はマンションの十四階にある直美の部屋を訪れていた。チャイムを押すと、直美ではなく家政婦の女性がドアを開けて

くれた。直美の親が、娘のために通いの家政婦を雇つているらしい。部屋に上げてもらつと、直美はリビングでDVDを観ていた。

「何だ、元気そうじやん。休むつていうから、寝込んでると思つてた」

「朝の内はホントに起きられなかつたんだもん……」

直美はDVDを止め、口を尖らせる。

「……学校、何か言つてた？」

「そんなには。事件のこと、先生しか知らないし。特に何か言われたり、つてのはなかつたよ。」「あ

思い出して、那々は顔をしかめた。

「そういうや、ストーカーからまた手紙來た……」

「え～つ、ホントあ？ 今日もまた、おんなじような内容で？」

「それが違うの。何かさ、昨日のこと知つてたんだよね。『昨日は大変だつたね』って」

「え、じゃあ昨日、ストーカーがあたしたち見張つてたワケ？ 気持ち悪～っ！」

「しかも、手紙があつたのつて家のポストじやなくて学校の下駄箱だよ。ストーカーは十中八九、ウチの生徒とみた」

「うつそ」

直美が目を丸くした。

「じゃああれよ、隣のクラスの佐野！ なあんかさ、怪しくない？ 暗そうだもん」

「暗いからつてストーカーじゃ、今頃世の中ストーカーだらけだつて。それに、話したこともないよ？」

「一方的に好きになつてつきまとうのが、ストーカーなんじやない」

「……そりやしあうだけど

妙に納得。

「ていうか直美、いきなり元気になつたね」

「そりやあ、ストーカーの正体に迫るつってところだもん。許すまじ、よ」

「その意見には賛成。襲つてきたり殴り飛ばしてやる」

「ばしん、と拳を掌に打ち付ける。今どきの女子高生、ナメたら痛い目に遭つることを覚えてもらおう。

「けどまあ

ふと、直美が田を輝かせた。

「あのウエイターのお兄さん、天瀬さん、だつけ？ 無茶苦茶かつこ良かつたよね～」

「……あの状況で何言つてんの」

「だつて、見たでしょ、あれ？ アクションスターみたいじゃない。あたし、やっぱ粗つちやおつかな」

「あ、あんた彼氏いるじやない！」

「そんなの気にしない、気にしない。 って言いたいトコだけど」

にやり、としか形容できない笑みを、直美は浮かべる。

「那々、気になるでしょ」

「つ、あたしは別に」

「那々の好みのストライクゾーンだもんね～、腕つ節強くて優しいハンサムなお兄さん」

「そうだけど、つていうか！」

那々は目を伏せた。

「似てる、んだよね。あの人、すりへじく似てる。生きてたらこんな風になつてただろうなつて、思つくりこ」

「……那々」

「年もさ、生きてたらちゅうどあれくらいで。 でもれ、だから分かんなくなりそくなんだ。もし好きになつても、どつちを好きなのかつて。本人を好きなのか、それとも似てるから好きなのか、分かんなくなりそうで、それがやだ」

“彼”的顔が、頭に浮かんだ。面影があの青年に重なる。

「似すぎて……はまりすぎてて、何か、さ」

ため息をついた那々に、直美があつさうと言つた。

「いいじゃん、別に」

「何が」

「最初は“似てるから好き”かもしないけどさ、その内“本人が好き”になるんじゃない？ そんなもん、一日一日じゃ分かんないよ」

「そうかもしないけどさ」

「だからさ、とりあえず告つちゃえ」

「何でそうなるの！？」

「だつて、那々が好きかもつていう相手、好きになるわけにいかないじゃない。大丈夫、那々が振られたら、改めてあたしが告るから」

「あのねーーー！」

ちょっと感謝しかけたのに、キレイさっぱり吹っ飛んだ。
相談相手間違ったかも……。

直美がすっかり元気になつたのは喜ばしいものの、那々はこつそ
りため息をついた。

午後五時。斎はなぜか、警視庁にいた。

昼過ぎにいきなりかかってきた電話で、本庁まで呼びつけられた
のだ。昨日の事件で、犯人逮捕に貢献したということで感謝状を渡
すとかという話だった。辞退しようかとも思ったのだが、

『公安の“姫”がわめいてるぞ。こっちが忙しくておまえの顔見ら
れないのに、俺だけ会うのは抜け駆けだつてな。このままじゃ本庁
が崩壊する。東京の治安のためにも、感謝状は受け取りに来てくれ。
金一封もつくぞ』

諸角の口説き落としに負けた。金一封はともかく（あつて困るも
のでもないが）、公安のあの“お姉様”を放つておくのが怖い。
捜査一課の部屋は、相変わらずがらんとしていた。これだけ広い
部屋に、余すところなくデスクが並んでいるというのに、人の姿が

見事にない。さすがに警視庁、捜査員も多いが抱えた事件はそれに倍して多い。

斎を見つけた諸角は、上機嫌で近寄ってきた。

「早かつたな」

「叔父さんに送つてもらいました」

斎は車やバイクを持つていねい。本来ならあつた方がいいのだろうが、あまり運転はしたくないのだ。身分証明に便利なので免許だけは取つたが、まったくのペーパードライバーである。だからこういう時は、叔父に送つてもうか公共交通機関を使うかだ。交通網の発達した大都市はありがたい。

「でも、昨日の今日で感謝状つて、異様に早くないですか？」

「“姫”がごねた。昨日も同じ本庁内にいたのに、ニアミスで会えなかつたのが相当悔しかつたらしいな」

「……警視庁がそんなんで動かされちゃつていいんですか？」

「諦める。あの“姫”的ことだぞ」

確かに、諦めるしかなさそうだ。斎はため息をついた。

その時、捜査一課の入口から黄色い声があがつた。

「斎くん！ 久しぶりねえ！」

振り向くが早いが、すぐ眼前に瞬間移動のごときスピードで移動していた相手に、心持ちのけぞる。下手をすれば抱きつかれかねない勢いだ。

明るい栗色の髪をアップにまとめて、ベージュのパンツスーツに身を包んだ美女。年は三十前というのが一年前からの自己申告だ。そう高いヒールを履いているわけでもないのに、斎と同じくらいの身長があつた。ちなみに斎は一七五センチ。

「お久しぶりです、氷峰さん」

「斎くんが来るつていうから、一番のお気に入り着て来たわよ。似合つてる？」

「似合つてますよ。知的美人つて感じです」

「やつだ、嬉しいこと言ってくれるじゃない。あなたも相変わらず

いい男ね。彼女はできた?」

「まだですよ」

「あらり、そういう方面は奥手ねえ。いつそわたしが、見繕つてあげましょうか?」

「遠慮します!」

見かねた諸角が、助け舟を出した。

「そろそろこっちの用事を済ませてもいいか? 感謝状の授与があるんだが」

「あら、そんなの後でもどうとでもなりますでしょ?」

助け舟、あっさり撃沈。

「新聞社の方にも、写真の撮影は断つてあるから大丈夫よ。」一ん

な美形なのに写真が嫌いなんて、もったいないわねえ」

「嫌いっていうか、苦手なんですよ。身内の記念写真程度ならとも

かく、大人数に見られる写真つていうのが、ちょっと……」

「あーんもう、人見知りがまた可愛いのよね」

二十一の男が可愛いなんて言われても嬉しくないです。ついでに人見知りってわけじゃないんですけど。

無論面と向かつてなど言えやしないので、あやふやな笑みを浮かべてお茶を濁す。

まだまだ話し足りなさそうな彼女のポケットで、その時携帯の着信が鳴り響いた。

「はい、氷峰。 出動オ? 集会い? こつちは今貴重なランデブーの時間を……あーつもう、分かったわよ、行きやあいいんでしょ! つたく、あンの薄らハゲ、後でじっくり締め上げてやる!」
鼻息も荒く電話を切った彼女は、これ以上ないよつな悔しそうな表情でヒールを踏み鳴らした。

「ああ、つたく! セつかくの潤いの時間だったのにイ!」

「大変ですね」

「ものすつごく悔しいけど、一応仕事はしなきやね。じゃね、斎くん。また来てね」

「はあ……できれば事件以外で来たいんですけどね」

「待ってるわ」

軽く投げキスを残して、彼女はヒールの音も高らかに捜査一課を後にした。

……嵐が去つた……。

見送つた斎と諸角は、揃つて息をついた。

「今日はいつになくハイでしたね、氷峰さん……」

「ストレス溜まつてたんだろうな。やれやれ、今田公安の世話になる奴は悲惨だぞ」

諸角の慨嘆に、斎は乾いた笑いを浮かべた。

氷峰凜子^{りんこ}。警視庁公安部に所属する彼女は、本庁では密かに“姫”と呼びならわされていた。彼女の父親は国家公安委員長。警察庁の大ボスである。だからといって彼女が親の七光りで警視庁に所属しているかといえば大間違いで、彼女は東大法学部主席卒業、國家？種ストレート合格という恐ろしい経歴の持ち主だ。泣く子も黙るキャリア組。

そんな彼女の目下のお気に入りは、斎だった。どうも彼女は年下好みらしい。銃の修理でペニーハウスを訪れた時に一日で氣に入られ、以来何かにつけて構い倒されている。

「さて、と。時間取らせて悪かつたな。こつからが本題だ」

「……忘れてました」

実際、感謝状のことなど頭から飛んでいた。まあもう少し付き合え、と肩を叩かれて、ため息をつきながら従つ。

本来の用件だったはずの感謝状授与^与の方がよっぽどあつさり終わつて、それでも斎が解放されたのは、警視庁に来てから一時間近く経つてからのことだった。近くで時間を潰している立河に連絡してから、正面玄関から出ようとして、エントランスの張り紙に目がまる。

【この顔にピンと来たら110番】というお馴染みのフレーズの下に、ずらりと写真やモンタージュが並んでいた。その中に一際スペ

ースを割いて、数人の男女の顔が配置されている。

【 青銀天聖教団 幹部たち】。

斎の表情がわずかにこわばる。目をそらして、エントランスを出た。

しばらく待つていると、立河のフィットが見えた。駆け寄つて乗り込むと、深々と息をつく。

「どうした、えらく疲れて」

「氷峰さんの勢いに負けたの」

「彼女はおまえを気に入ってるからなあ」

笑いながら、立河はフィットを車の流れに滑り込ませる。遠ざかる警視庁を見ながら、斎はぽつりと呟いた。

「……教団の残りのメンバー、まだ捕まってないみたいだね。張り紙があった」

「おまえにはもう、関係ないことだ」

「うん、でも……もし。万一、僕のことがばれたら」

「その時は、俺も一蓮托生だな。諸共に刑務所か」

「違うよ。警察にじやなくて。 教団の残党は、僕のこと恨んでるよ。教団の崩壊のきっかけになつたのは僕だから。報復くらい、してきかねない。時々、怖くなるんだ。もし今、教団が襲つてきたらどうしようかって」

「斎、」

「僕だけならまだ構わない。けど、叔父さんや周りの人気が巻き込まれたって思うと……いつそ、僕だけ消えちゃつた方がいいんじゃないかつて、何度も考えて」

「ペインレス・ドッグ はもついない。海の藻屑になつて消えた。それが事実なんだ。そうだろう?..」

「でも僕は、顔を変えてない」

ガラスに映り込む自分の顔を、斎は見据えた。

「教団の人間が見れば、すぐ分かるよ。あの子にだって、顔を見せてる。あの子、覚えてるみたいだった」

「五年経つててか？」

「……似てるつて、言われた」

「知ってるか？世の中には三人、似た顔の人間がいるんだよ」

「それで、言い逃れるの？」

「くすくす笑つてそう言えば、大真面目に肯かれた。

「ペインレス・ドッグは天涯孤独だつたんだろう？おまえには俺つていう、立派な保護者がいるじゃないか」

「……僕一応成人してるんだけど」

「親にとっちゃや、子供はいくつになつても子供なんだよ。もつとも、叔父と甥だから“子供みたいなもの”か」

ああ、このひとも。

同じことを、言う。

自分の“親”だつたがために、死んでしまったあの人と。

気がつくと、ガラスの中の自分が泣いていた。

「おい、斎……？」

氣遣わしげな立河に、ふるふると首を振る。

「ちが……あのさ」

これは、五年前の自分の涙だ。とまらない。

「……僕が、守るからね。誰かが僕らを狙つてきたら、戦つてでも

その人を、撃つことになつても。叔父さんたちを、守るから」

そのために斎は、銃を持ち続けている。

戦うための爪と牙を、捨てずにはいるのだから。

例え、誰かを傷つけ

その命を奪うことになつたとしても、大切な人を守るためにならば、何も感じずにいられる気がした。

あの頃と同じように。

(……やっぱり僕は、ペインレス・ドッグのままか)

身体も心も痛みを感じない、ただ戦うだけの犬。

ガラスの中の自分を嘲笑うように唇を歪めて、斎は少し乱暴に両

眼拭つた。

今日もまた、下駄箱の中に手紙がある。那々はうんざりした気分で、それをゴミ箱に叩き込んだ。朝っぱらから、いきなり気分をブルーにしてくれる。

「何かもう、ここまで来ると根性じゃない？ ホントに読まれてるって思つてんのかな」

「知らない。っていうかもうゴミ箱に放り込むのすり面倒になつてきたんだけど」

「いっそポストでもつけてあげれば？」

「それこそ逆効果だつて。調子に乗られたらどうすんの」
ため息をついて、那々は上履きに履き替え、教室へ向かう。すると、追いついてきた直美が腕を引っ張つてきた。

「ねえねえ、今日、あのお店行かない？ ペニーハウス

「え？ あそこに？」

「そ。だつてまだ、お礼言つてないじゃない？ 警察に呼ばれた時は、それどころじやなかつたしさ」

「……つて言いつつ、実はもつかい天瀬さんに会いたいだけでしょ」「あら、那々だつて嫌なわけじやないでしょ？ それに、これつてチャンスよ？」

「チャンス？」

「彼と接近するチャンスつてことよ。ああもう、あたしつて友達思いよね」

「あのねえ！」

「で？ どうする？」

「……行く」

「そう、助けられた礼を言いに行くへりは、当たり前のことだ。直美の迷惑に乗るのはともかく、那々は肯いた。

「そー来なくちゃ！　じゃあ放課後　」

「直美！」

那々が声をかけたが、遅かった。話し込んでいて前を見ていなかつた直美が、階段の降り口からひょいと出て来た女子生徒にまともにぶつかつたのだ。

「ごつめーん……」

ぶつかつた相手を見て、直美は絶句した。

長く垂らしたストレートの髪は、ほとんど金に近いほど徹底的に脱色されている。切れ長の目がきつい印象を与えるが、クールな雰囲気の美人だつた。どちらかといえばいいところの子女が多いこの学校では、あまりいないタイプだ。

彼女は落としたバッグを拾い上げ、さっさと廊下を歩いて行った。ぽかんとそれを見送り、一人は何となく顔を見合わせた。

「……あんな子、いたつけ？　今まで見たことないけど……」

「学年違うんじゃない？」

「でも、上履きの色おんなじだつたよ。ウチつて上履きの色で学年分かるじゃん」

「けど、何かきつそうな子よね」

直美が眉を寄せる。彼女とは、あまり合わないタイプに見えた。教室に入ろうとした時、那々は一人の男子生徒に呼び止められた。

上履きの色は一年生の青。

「ねえ、君、今朝手紙捨てたよね？」

「……そうですけど？」

別に他人にどうこう言われる筋合はない、と言おうとするが、彼は意外なことを口にした。

「あのさ、俺、その手紙入れてたっぽい奴、見たんだ」

「ええ！？」

那々と直美は、思わず拗つて声をあげた。

「それって、どんな奴でした？　実はこの子、ストーカーされてて

「ちゅうと、直美！」

いきなり核心の話をしようとする直美を、慌てて止める。あまり吹聴したい話ではない。しかし、彼はあまり動じた様子もなかった。「そうなんだ。だったらやつぱり、声かけてよかつたよ。そいつ、君らと同じ学年みたいだったな。上履きの色が同じだつたんだ」「名前とか、分かります？」

「さあ……そこまでは。学年違つちゅうと、もう誰が誰だか分かないし。けど、何か下駄箱でがさがさやつて、変な奴だと思つたからさ」

「そつなんですか……どつも、ありがとうございました。学年も何も分かんなくて、気持ち悪いと思つてたんですね」

「いや、役に立つてよかつたよ。じゃあ、俺はそろそろ教室戻るから」

男子生徒が行つてしまつと、那々は直美と顔を見合わせた。直美が勢い込む。

「やつぱさあ、隣のクラスのあいつじゃないの？」

「まだ分かんないよ。けど、おんなじ学年ならまだ気が楽だよね。一、三年とかだつたら、断るにしても何か気まずいじやん」「えーでもさ、同学年は三年間一緒なんだよ？ そっちの方が嫌じやない？」

「う、それはそうかも」

一長一短。那々は複雑な気分でこめかみを押さえる。

「とにかく、一步前進かあ。よかつたじやん。解決の日は近いかもよ」

「だといいけど」

あまり期待せずにぼやいて、那々は自分の席に腰を下ろした。

哲治は、弾むよつた足どりで教室に向かっていた。

彼女と話せた！

今まで遠目にしか見たことのなかつた星海那々と、間近で話したのだ。響きのいい、柔らかい声。はきはきした物言いが心地よかつた。緩みそうになった頬を押さえるので必死だつた。

我ながら、いい手だと思う。協力者を装えば、絶対に疑われることはない。現に彼女だって、感謝してくれた。

そうだ。俺はいつだって、彼女の味方だ。

やはり ヴァンパイア・キス は手放せない。これがあれば、何でもできそうな気がする。

哲治はそつと、ポケットに手をやつた。そこには、小さな袋に詰めた粉末状の ヴァンパイア・キス が入っている。

昨日、一錠分を潰しておいた。気づかれないよう他人に飲ませるには、錠剤では都合が悪い。粉状にしたものを作り、飲ませるつもりだった。この一錠はもちろん、自分の取り分から出したものだ。痛いが、仕方ない。成功すれば、 ヴァンパイア・キス も、そして那々も手に入るのだから。

飲ませる相手は、決まつていた。

沖田直美。

沖田商事の社長の娘で、那々の親友。生贊としては、これ以上ない存在だ。彼女を引き込めば、“彼ら”も哲治を認めるだろう。不思議と、那々自身に ヴァンパイア・キス を飲ませようとは思わなかつた。昨日は、彼女を思いのままにできるという一言に強く惹かれたが、時間が経つにつれて考えが変わってきたのだ。

薬で振り向かせても意味がない。自分自身を、那々に認めてもらうのだ。そして互いに想い合つようになつてから、 ヴァンパイア・キス を使つても遅くはない。

それに、哲治が直美に ヴァンパイア・キス を飲ませようとしたのは、他にも理由がある。

一昨日の事件。

直美があの店に引つ張つて行かなければ、那々があんな危険な目

に遭うこととはなかつたのだ。そして、彼女を救いに飛び出せなかつた哲治が、身を焼かれるような嫉妬と屈辱を感じることも。すべての原因は、あの女だ。

だから、めちゃくちやにしてやる。

あの女を薬漬けにして“彼ら”にくれてやる。“彼ら”は喜ぶだろ。何せ、高嶺の花のお嬢様だ。豊富なドラッグで、身も心も犯し尽くしていくのは目に見えていた。

当然の報いだ。日々を危険に晒したことへの。

そのためにも、彼女たちに近づく必要があった。

最初の一手は、思つた以上にうまく行つた。彼女たちはまったく、哲治を疑つていない。後は、彼女たちに協力するふりをしながら、機会を見計らつて直美に ヴァンパイア・キス を飲ませればいい。一度飲ませれば、後は坂を転がり落ちるようにのめり込む。哲治自身が、そうだつたように。

(明日辺り、また同じ奴見かけたつて言つてやるうつか。それから、誰か適当な奴をストーカーに仕立て上げて……)

ヴァンパイア・キス を摂取した頭は、目まぐるしく回転し、作戦を練り上げていく。その感覚が心地よく、哲治はくつくつと喉を鳴らした。

予鈴のチャイムが、校舎内に響き渡つた。

「いらっしゃいませ」

店のドアが開く音に振り返った斎は、少し目を見張った。

「あれ？」

「あの……」「んにちは」

おずおずと店に入つて来たのは、二人の女子高生だつた。星海那々と、友人の沖田直美。

「あの、一昨日はもうありがとうございました。あの後バタバタしてて、言い忘れてたから……」

「あたしも、あの後ちょっと寝込んだじやつて。ホントは、昨日来なきやいけなかつたですよね」

気後れしたような彼女たちに、斎はかぶりを振つた。

「そんなことないよ。実は昨日、ウチも定休日だつたから。来てくれても、いなかつたかも。夕方なんか出かけてたし」

「そうなんですか？」

「うん、だから気にしないで。つていうか、わざわざありがとうね」にこりと微笑まれて、少女一人はほつとしたように顔を見合せた。

「でも、凄いですよね」普通あんな状態で、犯人取り押さえになんて行けないですよお

「まあ……あのが初めてつてわけじゃないし」

「え！？」

「前なんか、いきなり店に押し込まれて、大変だつたなあ。店の中のもの壊したら、叔父さんに殴られかねないし……」

「こり、聞こえてるぞ、斎」

「あ」

カウンターから飛んできた声に、斎はしまったと振り返る。立河は苦笑しながら、グラスを一つ取り出して、コーヒーを淹れているところだった。

「大体、その犯人を椅子でのしちまたのはおまえだらう」「あ～うん、それはそうなんだけど」

「……椅子……？」

「うん、相手銃持つてたし、手近に他に適当なものもなかつたから。店壊されない内に、椅子できつちりトドメ刺させていただきました」意外にバイオレンスな一面に、那々も直美も一瞬呆気に取られた。だがこれぐらいでないと、銃を持つた強盗を取り押さえなど行けないのかもしない。

「お嬢さん方、そいつはこう見えて結構修羅場潜つてるよ」立河が笑いながら、斎を手招きする。

「ほら斎、お客様を席に案内しろ。それと、これ」トレイに載せたグラスを、斎によこした。

「サービスだ」

「分かつた」

斎は少女たちをテーブルに案内し、グラスを置いた。一昨日彼女たちが注文したのと同じメニュー。

「マスターから。サービスだつて」

「え、でも……」

「いいの、若い女の子には親切なんだから。ありがたくいただいときなよ」

「どうせ他にお客さんいないし、と身も蓋もないことを言つ。確かに、ぽつかりと空白になつたように、店内に客の姿はなかつた。

「それじゃ……いただきます」

那々はカフェオレを一口呑んだ。相変わらず絶品だ。

カフェオレは冷たいのに、ほんわりと温かいものが広がる。カフェオレの温度ではなく、記憶の底の方から。

今度は、ちゃんとお礼言えた。

五年前は、言いたくても言えなかつた。言つ前に、“彼”は永遠に手の届かないところに行つてしまつたから。

ちらりと斎を見やると、彼は他のテーブルを拭いていた。手慣れた、無駄のない動き。あの手で、一昨日はためらいもなく、銃を撃つた。

どつちが、本当の彼なんだろう。

ウェイターの彼と、銃工の彼。

そして重なる、“彼”的面影。

ぼんやり見つめる那々の視線に気づいたのか、斎がふと振り返つた。

「何か？」

「あ、いえ、別に……」

「那々の好みのタイプに、天瀬さんがぴったりなんですね～」

「直美いいっ！」

よりもよつて本人の目の前で言つた、それを！

耳まで真っ赤になつた那々を、直美がにやにやしながら見やる。

「だあつてその通りじゃん。腕つ節強くて優しいハンサムなお兄さん」

「それなら直美だつて、狙おうかなあなんて言つてたでしょ！」

「ええと……それはとっても光栄なんだけど」

遠慮がちな斎の声に、一人ははたと言ひ合ひをやめた。照れ臭そうに、斎がカウンターを指差す。

「できれば、もう少しトーン抑えてほしかったなあ、と……」

カウンターの中で肩を震わせている立河に、那々と直美は揃つて頬を赤らめた。

「……ごめんなさい」

「いや、そいつはそういう方面には小学生並みに奥手だからな。末だにフリーなんだ。せいぜいからかってやつてくれ」

「叔父さん！」

慌てる斎に、今度は那々たちが笑い出す。

「でもフリーなら大チャンスじゃん。那々、立候補しちゃえば？」
直美がけしかけるが、那々はふつと顔を翳らせた。

「あたしは……まだ、そういうのは」

「そうだよ。別に急ぐもんじゃないし、そういうのは」

「おまえは少しは急げ。五年前から彼女の一人もいないじゃないか」
フォローした斎に立河の絶妙な突っ込みが入って、少女たちがまた沸いた。だが那々は、奇妙な一致が気になる。

（五年前？）

もちろん、ただの偶然なのだろうが。

那々は再び、斎を見つめた。

また、“彼”が重なった気がした。

礼を言いに行つたつもりが結局「コーヒーを一杯ずつ」馳走になり、那々たちがペニー・ハウスを出たのは五時半を回っていた。斎とはもちろん、マスターの立河とも予想以上に話が弾んでこの時刻だ。

立河と斎は叔父と甥ということだったが、むしろ親子のように見えた。しかし那々がそう言うと、二人とも意味深な目配せを交わして苦笑してみせたものだ。何か事情がありそうな感じではあったが、馴染みでもない自分がどうこう言つ筋でもないと思つて見ないふりをした。

マンションへの道を辿つていると、直美のポケットから携帯の着信が聞こえた。

「誰？」

「んふふ~、マ・サ・ヤ」

「ああ、彼氏ね」

名前など知らなかつたが、この浮かれようからして間違いない。直美が上機嫌で電話しているのを那々は聞くともなしに聞いていたが、通話を終えた直美がいきなり拝み倒すように頬み込んでいた辺

りから、他人事ではなくなつてきた。

「あのセ、那々。今日、マサヤのバイト先が定期清掃の日で、早く帰れるつていうから、これからデータの約束しちやつた。悪いんだけど、中村さんこうまこと言つて『ごまかし』してくれない？ 一、三時間くらいで帰るからさあ」

「そんなにどうやって『ごまかす』のよ？」

「うへん……じゃあ、本屋に寄つて、そこで中学ん時の友達に会つて話してたことにするから、口裏合わせてよ。ね？」

「ん、まあ、それくらいなり……」

「せへんきゅつ！ ジャああたし、待ち合わせあるから！」

せつと行つてしまつた直美を見送り、那々はため息をついた。やつぱり、彼氏作つた方がいいんだろうか……。

“彼”に重なる彼を思い出し、慌ててそれを打ち消した。

(いくら何でも……昨日の今日で)

ぶんぶんとかぶりを振つて、足を早める。実は少々心細かつた。ストーカーが一昨日の事件を知つていたことは、後をつけられていたということだ。もしかして今も、などと考へると、つい足どりが早くなる。

マンションの入口が見えた時は、ほつとして急いで駆け込んだ。エントランスの郵便受けに何もないのを確認し、家に戻るより先に七階上の直美の部屋へと向かつた。

チャイムを押すと、家政婦の女性が顔を出す。中村といふ名前なのは、今日初めて知つた。

「あら、お嬢様のお友達の……」

「あの、直美……さん、ちょっと本屋に寄るから遅くなるつて言つてました。中村さんに伝えてほしいって頼まれたんで、お邪魔したんですけど」

「あらまあ、わざわざどうも。お宅から電話でも結構でしたのに」「いえ、どうせ近くだし、エレベーターで上がって来るだけなんで

……

もごもごと喋つて、早々に辞去した。何となく後ろめたい。

家に帰ると、母はまだ帰つていなかつた。五年前の事件の後、母は空港職員を辞め、現在は保険の外交員の仕事に就いている。定時に帰れても、バスの時間がかかるのはしそつちゅうだ。きっと今頃は三十分くらい余計にかかるのはしそつちゅうだ。帰りのバスの中か、デパート辺りで買い物の真っ最中だらう。リビングでテレビを見ようとして、ふと窓が目に入った。毎年七月十一日、“彼”が亡くなつた場所に向かつて、那々が手を合わせる窓だ。

あたしは、どうしたいんだろう。

那々はぼんやりとソファに座つて、窓を見つめた。“彼”を想つているはずなのに、彼 天瀬斎のことが気になつて仕方ない。いつの間にか、直美のデートのことも忘れていた。

運が向いてきたのかもしれない。

そんなことを考えながら、哲治は直美の後をつけていた。

ヴァンパイア・キスの効用か、直美に薬を飲ませる方法は何通りか考えついた。帰り道、那々について行きたいのを我慢して、必要になりそうな道具を手に入れるために走りもした。直美の方がペニー・ハウスに行くとか騒いでいたので、彼女たちの行方を掴むのは簡単だつた。

そして今、直美は那々と別れ、一人で繁華街の方へ向かつている。

哲治の計画の一番のネックが、偶然に解決された。

彼が一番悩んだのが、どうやって二人を引き離すかだつた。哲治は二人ともに顔を知られている。直美に薬を飲ませることが成功しても、那々に怪しまれては元も子もない。二人を引き離した上で、直美に ヴァンパイア・キス を飲ませるケースが理想的だつた。そのチャンスが、棚ボタのように転がり込んできたのだ。

直美は携帯で時間を確認すると、一軒の喫茶店に入った。ここで待ち合わせか、時間を潰すのか。

どちらにしても、チャンスだ！

哲治は顔を伏せ、彼女から少し間を置いて店に入った。ざつと見渡し、直美が窓際のテーブル席にいるのを確認する。カウンターはいくらも空いているのだから、ここで待ち合わせなのかもしない。直美は入って来た哲治に気がつかず、携帯のメールに夢中になっていた。

奥まつたテーブルを確保すると、まずアイスコーヒーを注文する。そして哲治はデイパックを置き、必要なものをポケットに突っ込んでトイレに向かった。途中でシロップや氷を置いているカウンターに立ち寄り、コーヒー用のガムシロップを一つ、手の中に隠し持つた。

トイレは男女兼用で、水道もすべて備え付けになっている。鍵をしつかりかけると、ポケットの中を探つて、ヴァンパイア・キスの袋と小さな注射器を取り出した。近くのデパートを探して、見つけてきたものだ。夏休みが近くなつて、昆虫採集のキットが売り出されているので、割と簡単に手に入つた。

注射器からピストンを外し、ヴァンパイア・キスをこぼさないように慎重に注射器の中に流し込む。そして、針から噴き出してしまわないよう、ゆっくりとピストンを押し込んだ。ある程度まで押し込むと、水道の水を掌に溜め、注射器の中に吸い上げる。針にキャップをして軽く振ると、粉状の薬はあつという間に溶けていった。

持つて来たガムシロップの容器の、蓋の少し下に針を押し込み、ピストンを押し込んだ。少し振つて混ぜてしまふと、注入した液体はガムシロップに違和感なく溶け込んだ。針の穴も、蓋の張り出しひすぐ下で目立たない。

哲治は注射器や袋をトイレに流すと、ガムシロップを持ってトイレを出た。

直美のテーブルを見ると、やつとメールを終えたのか、メニューを見ている。決めたらしく、ウェイタレスを呼んだ。

「アイスコーヒー、一ツ」

哲治はカウンターに向かつた。直美も席を立つてカウンターに行こうとしている。わずかに、哲治の方が早くカウンターに辿り着いた。

「あれ？」

あたかも今気づいたように、目を見張つてみせた。

「君、確か……」

「ああ、昨日の」

「今日は、友達は一緒じゃないんだ？」

「やだ、いくら何でもいつも一緒にわけじゃないですよ」

「それもそうだね。あ、ガムシロップ？」フレッシュもかな」

哲治は備え付けの籠からガムシロップを取るふりをして、隠し持つていたシロップをコーヒー フレッシュと一緒に直美に渡した。

「あ、どうも。じゃ、あたし待ち合わせしてるんで」

「ああ、引き止めて悪かったね」

哲治は席に戻ると、興奮を押し隠して直美のテーブルを見やつた。彼女は程なく来たアイスコーヒーに、シロップとコーヒー フレッシュをためらうことなく注ぎ入れて、一気に半分ほど飲んでしまった。やつた！

直美から目を離し、哲治もアイスコーヒーに口をつけたが、味などほとんど気にならなかつた。急に喉の渴きが襲つてきて、三分の一ほどを一気に飲み干す。

ドアが開いて、若い男が入つて來た。直美が手を振つたところをみると、彼が待ち合わせの相手らしい。

今の内に、せいぜい楽しめばいい。どうせすぐここ、それどころじゃなくなるんだから。

哲治は席を立ち、支払いを済ませて店を出た。直美の笑い声が追いかけてきたが、ドアを閉めるとすぐに聞こえなくなつてしまつた。

これは夢だ。

立ち尽くし、目の前の光景を見つめる。手にした銃が滑り落ち、ごとリと重い音をたてた。
白い布に覆われたそれが、誰より大切な人なのだと、聞かされても頭が受け付けなかつた。ふらりと足が動いて、それが横たわるベッドに近づく。

そうだ。あの人人が、こんな簡単に死ぬはずがない。

自分を落ち着かせて、そつと布をめくつた。

見知った 自分の一一番大切な人が、そこで静かに目を閉じていた。

「 ッ！」

膝の力が抜けて、その場にへたり込んだ。

「あ……ああ……っ」

シーツを固く掴んで、縋るように見上げる。横たわる彼は、もちろん目を開きはしなかつた。触れた手の冷たさに、やつと頭が動き出した。ただ眠っているだけなのだと、現実を拒否するには、少年自身同じような光景を見すぎていた。

死。

その一文字に、打ちのめされた。

喉から漏れる声が、まるで獣のようだ。人ですらない、ただの生物としての慟哭。

それでも、涙は出なかつた。

どれくらい、そうしていただろうか。

掠れた声をあげ続ける彼の肩に、手が置かれた。有無を言わざず、引き離される。

「 ……氣は済んだか」

ぼんやりと、声の主を見上げる。細面の、神経質そうな男の顔。

彼はベッドの方を一瞥し、少年を引きずるように立たせた。

「おまえも、任務を終えたばかりだろう。明日も早い。身体を休めなさい」

言葉の羅列が、頭を通り過ぎていく。

任務？ 休む？

彼が死んだのに？

「……い、やだ……」

幼い子供がそうするように、ゆるゆるとかぶりを振った。

「ここにいる。」ここで、一緒にいる！」

「いい加減にしろ、ペインレス・ドッグ！」

「嫌だ！」

腕を振り解こうとするが、頬を張られた。痛みは感じないが、衝撃は感じた。すうっと、頭に上った血が引いていく。

おとなしくなつたこちらに安心したのか、男は腕の力を緩めた。

「サイレント・ファング 静かなる牙」は死んだ。もうおまえと共にいることはかなわない。現実だ。おまえだって、仲間が死ぬのは初めてじゃないだろ？

そうだ。彼は死んだ。自分は生きている。だから、一緒にいるではない。

なら 死んだら？

ふと、視線が動いた。床に転がる一丁の銃。あれで頭を撃ち抜けば、きっと追いつける。

彼のところへ。

そう思つた瞬間、男の腕を振り解いて飛びさつた。すくうように銃を拾い上げ、セーフティ解除、スライドを引いた。

「何を！？」

「なら、僕も死ぬ。父さんと一緒に死ぬ！」

銃口を頭に押し当て、引鉄を引き絞ろうと。

した瞬間、背後から凄まじい力で手首を掴まれ、腕を捻り上げられた。取り落とした銃を、広い掌が受け止め、耳元で怒鳴り声が炸

裂する。

「てめえ！ 何してやがるー！」

「放せ！ 僕は ！」

身体が動かない。暴れようとすると、急に突き放された。虚を突かれてよろけた彼の首筋に、手刀が打ち込まれた。

そして、意識が闇に落ちる。

ガタン、と音がして、立河は田を開いた。反射的に時刻を確認する。午前一時。

嫌な予感がする。

ベッドから抜け出ると、隣の斎の部屋のドアを叩いた。

「斎？ 入るぞ」

部屋に足を踏み入れ、立河は嫌な予感が的中したことを知った。必要最小限のものしかない部屋の中、斎は手足を投げ出すようにしてベッドに横たわっている。田を見開き、荒い息を繰り返していた。しかし、田を開いてはいるものの、立河の姿を捉えてはいない。

「斎！」

声をかけても無駄だと悟つて、立河はやや乱暴に、斎の肩を掴んで揺さぶる。初夏にあるまじき体温の低さに、ぞつとした。

「あ……」

呻くような声を漏らして、斎が身じろぎした。見開いたままの瞳が、次第に焦点を結び始めて、立河を認めた。とたんに、飛び起きる。

「はあ……ッ、は……」

必死で息をつく肩を抱き込むよつとして、落ち着かせた。

「……落ち着いたか」

「「」め……今、何時……？」

「一時だ」

「屋の……じゃないよね。ごめん、起こした」

「気にするな。寝られそつか？」

「……ん、しばらく無理。喉渴いた。水飲んでくる」

ふらりと立ち上がり、斎は台所へと消える。立河は後を追おうとして、床に落ちた時計を蹴飛ばした。音の正体はこれだつたらしい。台所で、斎は冷蔵庫から取り出したミネラルウォーターを、貪るように飲み干しているところだった。ボトルの三分の一ほどを一気に飲んでしまうと、息についてキャップを締める。

「……参ったなあ。最近は、大丈夫だと思ってたんだけど……」

まだ少し掠れた声で、斎は苦笑混じりにぼやいた。

だが、無理もないと立河は思う。この数日、斎にとつて過去を思い出させるに充分な出来事が続いた。特に、五年前に救つた少女との再会は、予想などしていなかつただけに強烈だらう。

彼女の存在が悪いとは言わない。だが、それに関連していくる記憶が悪すぎた。

五年前、彼らが叔父と甥になつた当初、斎の状態はひどいものだつた。そこから、ゆっくりと時間をかけ、回復してきたのだ。しかし、もう大丈夫かと思えば、思い出したように脆い部分が顔を覗かせる。この五年間、斎がこついう状態になつた回数は両手の指ではきかなかつた。

自分も、そして斎も。それぞれ、過去を背負つている。

血塗られた過去を。

「叔父さん、もう寝ててよ。僕もうちよつと起きてるから。大丈夫、明日に響くような夜更かしなんてしないからさ」

「寝られるのか？ 僕もさすがに昔みたいに、寝付くまで面倒は見きれんぞ」
「もう子供じやないよ」
「子供みたいなもんだ、いつまで経つても」

そう言つてやると、斎はきょとんと目を見張り、ふつと微笑した。
「そうだね。 そうかもしない」

呴いて、ミネラルウォーターのボトルを揺らした。

「……昔、おんなじこと言われたよ。叔父さんみたいに、僕のこと
を子供みたいだつて、言つた人がいたんだ」

「そうか

「うん」

斎はボトルを冷蔵庫に戻すと、先ほどよりもしつかりした足どりで歩き始めた。

「寝られそうか？」

「うん、大分落ち着いたから。しばらく横になつてれば、寝られる
と思う。起こしちゃつてごめん」

「いいから、早く寝る」

ぽんと肩を叩くと、大分体温が戻つていて、ほつと息をついた。

「ん、おやすみ」

斎が部屋に戻つて行くと、立河は複雑な気分で台所を後にする。
自分より前に、斎が親のように慕つていた人物がいることは知つ
ている。だがその人物のことについて、斎はこれまで、ほとんど口
を開かなかつた。

ずいぶん、依存していたのだと思う。今でも夢に見るくらいには。
もうそろそろ、解放されてもいいんじゃないかな。

あの様子を見ると、囚われている、とさえ思えてしまつ。

(……やれやれ。ずいぶん肩入れしちまつたな)

かぶりを振つて、立河はベッドに潜り込んだ。叔父というより、
もろに父親の気分だ。

布団をかぶつて、強引に目を閉じる。

翌朝、寝過ごさないことを祈つて。

「……美。直美？」

那々の声に、直美ははつと我に返つた。

「あ、何？」

「どうかしたの、何かすっぽりと/orしてるよ。具合でも悪い？」「うん……何か、頭重いつていうか……微妙に、すつきりしないんだよね」

「保健室行つてきた方がいいんじゃない？」

「……そうだね。ちょっとサボるか。那々あ、ノート頼んでいい？」

「いいから、早く行つてきな。ついてこいつか？」

「大丈夫。そこまでひどかない」

次の三時限目は、直美が苦手な英語だつた。堂々とさぼれるのなら、体調不良もありがたいといつべきか。

保健室には、誰もいなかつた。養護教諭は席を外しているらしく。ベッドに寝転がつた直美は、一向におさまらない頭の重さに内心首をかしげた。

昨日はあんなに調子がよかつたの。特に、マサヤとトーントしている時は。

やばいなあ。風邪でもひいたのかな。

そう思いながら「うううう」と頭を起こした。もう授業は始まつていて、きつと養護教諭だらう。

「先生、気分悪いんでちょっと休ませてください」

てつくり養護教諭だと思つていた直美が声を投げると、仕切りの陰から顔を出したのは男子生徒だつた。

「あれ？ また会つたね」

昨日喫茶店でも会つた、一年の男子生徒だ。

「偶然ですね、ええと……」

「ああ、一年の西脇。そういうえば、先生いないのかな」

「あたしも、いないんで勝手に寝ちゃつてるんですけど……」

「参つたな、カッターで指切つちゃつたから、絆創膏もらおうと思つたんだけど……そういうば、そこの棚に風邪薬あつたと思うよ。飲んでおいたら？」

「棚、ですか……？」

「ああ、俺が取るよ」

西脇はそう言つて、仕切りの向こうに消えた。棚を開けて、レセコンドやつているようだつたが、ほどなくティッシュに包んだ小さな錠剤を三錠と、コップに水を入れて持つて来てくれた。

「一回一錠つて書いてあつたけど、一錠だけじやまた具合悪くなつた時困るだろ」

「ありがとうございます……」

早速一錠口に入れて飲み下すと、直美は残りの一錠をポケットに入れ、ベッドに横になつた。西脇は絆創膏を探しているのか、またあちこち棚を覗いているようだつたが、やがて保健室を出て行つたらしい。足音が遠ざかつていつた。

いつしか直美は、うつらうつらとまどろみ始めていた。

保健室を出た哲治は、階段を上りながら唇を歪めた。

これで四錠。全部飲んでしまえば、もう薬を絶つことは不可能だろ。後は、直美が薬を求めて縋りついてくるのを待つのみだ。

その時、背後に足音が近付いてきた。

「ねえ」

振り返ると、ほとんど金髪に近いような髪色をした切れ長の眼の少女が、哲治を見上げていた。

「何だよ」

「あんたさ、こないだ誰かにクスリ頼んでたでしょ、電話で

哲治は絶句した。誰だ、こいつは？

少女はその様子を見て、確信したらしい。ため息をつく。

「……別に、ばらそつてんじやないけどね。一つ、釘刺しといつと思つて」

「釘？」

「一年三組、星海那々」

紡がれた名前に、今度こそ目を見張つた。

「どうして、彼女のこと……？」

「あの子には、借りがあるから。あんたがクスリをやろうが捌

85

「うが、あたしは別にどうでもいい。けど、星海那々とその周囲には、絶対にクスリを流すな。それがあたしの用件よ」

「……借り……？」

「そう。じゃ、確かに伝えたからね。あの子たちに手を出さうとしたら、あたしがあなたを潰すから」

「潰す、だつて……？ できるもんなら」

哲治の嘲りを遮るよつに、彼女は一步一步、哲治に近付いてくる。階段の途中で動けずにいる哲治に、嘲り半分の笑みをひらめかせると、右手をひょいと哲治の眼前に突き出した。

哲治は目を見張った。後ずさりうとして段につまずき、尻餅をつく。彼女の右手には、いつの間にかバタフライナイフが握られていた。いつ取り出したのかすら、哲治には分からぬ。手品のような鮮やかさだった。

「踏んだ場数が違うよ。喧嘩なんかからつきしお坊っちゃん？」

彼女は笑いながら、バタフライナイフをポケットに収める。

「あの子たちに手を出したら、こんなもんじゃ済まらない。分かつた？」

「わ、分かった……もともと、彼女に手を出すつもりなんかないんだ！ お、俺だって彼女のこと……！」

哲治は慌てて口をつぐんだ。少女は呆れたよつて彼を見て、肩をすくめる。

「ま、いいけど。その言葉、憶えてもらひからね」

そう言つと、彼女は哲治を追い越して階段を上がつていった。ぽかんと見送つていた哲治は、慌てて後を追いかける。

だが、彼女の姿はどうに消えていた。

学校帰り、ペニー・ハウス が見える辺りで立ち止まり、那々は前を行く直美の腕を引いた。

「ねえ……本気で行くの？」

「当つたり前じゃん！ 那々だつて気になるんでしょ、天瀬さんのこと」

「そりやまあ……じゃなくて！」

「ああいうタイプは、意外と押しに弱いのよ。まずは告つて、押しまくるべし、よ！」

何だか異様にテンションが高い。少々違和感を覚えながらも、逆らうと後が怖ううので、那々は口をつぐむことにした。

ドアを開けると、マスターの立河が会釈した。

「いらっしゃい」

「どうも……あの、天瀬さん、は……？」

「あいつなら、『本業』の方に行つてるよ。しばらくすれば、戻つてくるけど

「本業？」

直美が首をかしげる。そういうえば、彼女は斎が銃工だということを知らないのだ。事情聴取の時にもちょっとしたパニック状態で、他人の話など聞くどころではなかつたから。

「じゃあ、待つてますね」

直美がさつさとテーブルに向かつ。那々も氣後れしながら、それを追いかけた。

「ちよつと、これつて何か図々しくない？」

「何で？ 何か頼めばいいじゃない。それに那々は、早いトコ誰かとくつついちゃつた方がいいって」

「だから何で！」

「ストーカー対策」

脈絡のない話の飛び方に、那々は目をぱちくりさせた。

「ストーカー？」

「だからさ、那々が誰かとくつつけば、ストーカーだつて諦めるんじゃないか、つてことよ。そこ行くと、天瀬さんなんか最高じゃない。あの人相手じゃ、大抵の奴は靈むわよ。タメ張ろうつていうん

なら、よっぽど自信家じゃないと

「確かに、そうかもしないけど……って、直美あんたまさか、天

瀬さんにそれ頼もうつていうんじゃ……！」

「ふんふん、那々もようやくその気になつたか

「あのねえ！ いくら何でもそれつて強引すぎ

思わず声を高めかけた那々は、はたと周囲に気づいて声を落とした。

「……大体、そんなこと頼んだりしたら、迷惑じやん、天瀬さんにも

「だから、そっから急接近しちゃえればいいんだって。ふりから、ホントに付き合っちゃえば

「……頭痛くなってきた」

本当に頭痛がしたような気がして、那々は「めかみを押さえる。後押しにしても、限度というものがあるだろ？」

「直美あんた、何かおかしくない？ 最近、ちょっと強引すぎるよ」と斎との件に関しては、もう無理やりにこでもくつづけてやるつとしているように見える。那々の方は、まだ“彼”への気持ちすら整理できていないのに。

すると、直美が那々を見つめた。

「だつてそうでもしないと、あんたいつまで経つても、誰とも付き合えないよ？」

……息が、詰まつた。

「五年前のお兄さんをいくら好きでも、その人はもういないんだよ？ あんただけ、取り残されちゃうんだよ。 もう、いいじやん。

他の人、見たつてさ」

「そ、んなの……！」

言葉がうまく出てこない。何をビビつてしまえば、この気持ちを説明できる？

那々にとつて、あの少年の記憶が支えだった。彼の面影を抱えていたから、事件の後もそれほどショックを引きすることなく、比較

的樂に日常に戻れた。あの事件のことで心を痛めることがあるとすれば、それは彼に一言の礼も言えなかつたのを思い出させる、あの夢を見ることくらい。

これからどんな人と出会おうと、変わらず心の中に在り続ける人。
それが、“彼”。

なのに、斎に出会つてから、それが揺らぎ始めた。
面影が、重なる。似すぎているがゆえに、斎と“彼”的面影が混同し始めていた。どちらを思い出しているのか、分からなくなる。怖い。“彼”的記憶が薄れるのが。

そうなれば、“彼”が完全に、この世から消えてなくなるような気がした。

言葉を探していた那々に、その時落ち着いた声がかけられた。

「いらっしゃい」

「あ……」

見上げると、いつもの通りウェイターのユニフォームを着込んだ斎が、トレイを片手に立っている。

「何を淹れればいいかな？　また、こないだと同じの？」

「え……と、あの」

「同じので、お願ひします。いいよね、那々？」

「……うん」

こくりと肯くと、斎はにこりと微笑んだ。

「カフェオレもいいけど、冬場はカプチーノがお勧めだよ。僕も好きなんだ。美味しいよね……って、これじゃ手前味噌か」

苦笑して、オーダーを伝えにカウンターに取つて返す。その後ろ姿を見ながら、那々は奇妙に気分が落ち着くのを感じた。昂ぶつた神経が、宥められた気がする。

息について、“彼”的顔を思い浮かべた。斎によく似た、だが幾分幼さを残した少年の顔が、脳裏に浮かぶ。ほっとして、薄く笑みを浮かべた。

大丈夫。あたしはまだ、あの人のこと忘れてない。

……しかしそのため、斎がグラスを二つ、自分たちのテーブルに持つて来たのに気づくのが遅れた。そして、直美が「あの」などと声をかけながら、彼を引き止めたことにも。

気づいた時には、手遅れだった。

直美ははつきりと、言つていたのだ。

「那々のこととで、ちょっとお願いがあるんですけど、いいですか？」

「もーっ！ 信じらんない！」

道端で絶叫した那々を、直美がまあまあと宥める。

「那々、あんたものすごい田立つてるよ」

「あのねえ、原因はあんたでしうがー よりこにゅうて、マジで
あんなこと頼まなくとも……！」

「えー、いい手だと思うんだけどなあ」

しれっとのたまう直美を、那々はぎりと睨む。

そう、直美は『冗談抜きの本気で、那々とくつづく』と ふり、
でも可 を斎に頼んだのだ。それだけでもどんでもないことなの
に、

「それに、OKもらつたんだからいいじゃん」

そう、肝心要の斎も、実にあつせりと承諾したのである。頼む直
美も直美だが、さらりとOKを出してしまう斎も相当の変わり者だ。
「だからって、こきなり『この子と付き合つてやつてください』は
ないでしょー！」

唐突にそんなことを切り出され、さすがの斎も丸くして那
々たちを凝視していた。その後で事情を説明して納得してもらつた
からいいものの、思い出すだけで顔から火が出そうだ。

その上直美はできぱきと、斎の携帯の番号を聞き出して那々と番
号交換させた上、那々の携帯でツーショットの写真まで撮らせてし
まつたのだから恐れ入る。

「でもさ、あたし今すつごい冴えてる気分なのよねー。やっぱ昨日、
マサヤとデートしたからかなあ」

「はいはい、のろけはいいから……つていうか、朝から具合悪そつ
だつたのはどう行ったのよ」

「ああ、あれ？ 風邪薬飲んだら治っちゃったから、風邪気味だったのかもね。でもあの薬、よく効くよね。どこのメーカーなのか聞いたければよかつた」

「……そんな即効性の風邪薬なんか、あるの？」

「あるつていうか、学校の保健室に置いてあるわよ。今度先生にどこのか聞いとこ」

保健室に置いてあるのなら間違いないだろうが、どうしても釈然としないものを感じて那々は首をかしげる。しかしその瞬間、そんなことは頭から吹っ飛んだ。

「さて、じゃあ後は明日から、那々が天瀬さんとくつついたって広めるだけね！」

「ちょっと！ あんた何とんでもないこと言つてんのよ！」

「だって、そうしないと意味ないじゃない。ストーカーに諦めさせるために、天瀬さんにまで協力してもらうんだから。内輪でカッブルのふりしてたつてしおうがないでしょ」

「けどさあ……そんな噂広まつたら、天瀬さんにも迷惑だよ」

「うーん……じゃあしようがない、那々に年上の彼氏ができた、ってことだけで妥協しとくか」

「……どちらにしても広めんのね」

「ストーカー対策よ、恨むならストーカーを恨むのね」

涼しい顔で言つてのける親友 悪友かもしけない を、那々は恨みがましく見やつた。こうなつたら、ストーカーを突き止めた曉には顔面に右ストレートでも叩き込んでやろうと心に決める。それくらいしか鬱憤の晴らしようがない。

しかしそれに追い討ちをかけるように、直美が含み笑いをしながら言つてきた。

「それにさ、これを機会に本氣でモーションかけちゃうつて手も…」

「あんたねえ！」

「いいじゃない、五年前のお兄さんは心の恋人、天瀬さんは現実の

…

恋人。贅沢よね~」

「贅沢つて……大体、天瀬さんならすぐ、本命の彼女できるよ。もつと大人の、綺麗な人とか。あたしどじや、年七つも違うんだよ?」

「あら、いいんじやない? そもそも五年前のお兄さんだって、十六、七くらいだつたんでしょ? 変わりないじやん?」

直美の言葉に、心臓が跳ねた。

そう。あまりにも似ている、一人。年も、顔立ちも、身にまとう雰囲気も。だからつい、思ってしまう。

“彼”が生きていれば、きっと と。

(……忘れちゃいけない。あたしが、忘れちゃいけないのに……)

“彼”的面影、記憶を、斎のそれでかき消してはいけない。

そう。だから那々は、斎を想えない。

ペニーハウスのある方を振り返り、那々はため息をついて、振り切るように歩き出した。

“彼”に囚われているのではなく、自分が“彼”に囚われていただけなのだと、分かつてはいたけれど。

少し離れたところから見つめる視線に、那々たちは気づかなかつた。

カップを片付けながら、斎はため息をついた。

「いや、ついにおまえにも彼女ができるか。よかつたなあ、可愛い子で」

「……だから、ストーカー対策で付き合つ“ふり”するだけだつて、言つてたでしょ、あの子たちも」

感慨深げな立河のからかいに、いちいち反応するものだから疲れてしまつ。かといって、黙殺すればそのまま既成事実になりかねない。

「まあそれにしても、奇妙な縁だな、おまえとあの子は、「からかいの口調をひそめて、声を落とした立河に、斎は苦笑してみせた。

「うん。 まさか！」今まで関わることになるなんて、思わなかつた」

もう一度と、会わないはずの少女だった。大体自分は、あの時に死んでいるはずだったのだ。

五年前、立河に会わなければ、斎はきっとこの世にはいなかつた。だが現実には、斎は 天瀬斎 として生き延び、そして彼女 星海那々と、再び出会つた。そしてなぜか、彼氏のふりをすることになつてゐる。

あの時の少女が、もうそんな年頃になつたのだ。
いやさか年寄りくさい感慨を抱いて、斎はふと、思い出した。

『しつかりして！ ねえ、大丈夫？』

そう言つて心配そうに、自分の背中をわすつてくれた彼女。小さな、だけどあたたかい手。

もう最期だと思つていたあの瞬間に、あたたかい記憶をくれた少女。

だから、守つてやりたいと思つたのかもしれない。

芯が強い、しつかりした子だけれど、まだ高校生の女の子だ。正体も分からぬ人間から狙われて、怖くないといえば嘘だろう。付き合つぶりをするというのは、突拍子もない提案だつたけれど、彼女を守るには確かに悪くない手だと思つた。どうせ、誤解されて困る相手もいない。もちろん、七歳も年下の女の子に本氣で手を出す気もないし。

カップを片付け、テーブル拭いて椅子を整えていた斎だつたが、足下にかすかに感触を感じて見下ろした。白い小さな包みが転がっている。拾い上げて開いてみると、小さな錠剤が一つ出てきた。

(薬……?)

首をかしげて、斎はテーブルを見る。ここは那々たちがいたテーブルだ。彼女たちのどちらかが、この薬を落としたのだろうか。それにしても、ティッシュに包んだだけというのが解せずに、斎はしげしげとそれを見つめた。

「どうした?」

「うん、落とし物……みたいなんだけどさ」

テーブルに薬を置いて、斎は肩をすくめる。

「とりあえず、聞いてみたらどうだ? セつかく携帯の番号も聞いたことだし」

にやにやしながら言つてくる立河を少し睨んで、斎は奥に引っ込むと、携帯に登録したばかりの那々の番号を呼び出した。

『……はっ、はー! もしもし?』

慌てて出たらしい那々の様子が微笑ましい。少し和みながら、斎は本題を切り出した。

「いきなり電話してごめんね? あのさ、さつき一人がいたテーブルの辺りで、落とし物見つけたんだ。薬みたいなんだけど、心当たる、ある?」

『薬、ですか? あたしは知らないけど……え?』

しばし電話の向こうで話し合つていうようだったが、やがて那々の声が聞こえた。

『それ、直美のです。風邪薬、落としちゃつたつて。念のために二錠持つてたけど、もう大体治つたからいらないです、つて』

『そう、じゃあこっちで処分しどくな。帰り、気をつけて。ホントは送つていくべきかな?』

『いい、いいですよ、そんなの! その、おやすみなさい!』

『うん、おやすみなさい!』

午後五時台で少々気の早い挨拶だが、他に適当な言葉を思いつかなかつた。電話が切れるごと、携帯をポケットに押し込んで店に戻つた。

「どうだつた?」

「やつぱりあの子たちの落とし物だつた。もついらなりつて言つてたけど

「まあ、薬だしな。落ちてたんだし、処分した方がいいだろ?」

「そうだね」

薬をゴミ箱に捨てて、斎はその薬のことすまつぱり忘れてしまつた。

ペニー・ハウス は夜七時までの営業だ。ドアにかかつた営業中の札を準備中に引っくり返し、斎はゴミ箱を抱えて店を出た。ビルの脇に置いてあるゴミバケツに、その日その日のゴミを放り込むのだ。最近は分別がどうこうといふのが、ペニー・ハウス からのゴミは大抵可燃ごみなのでその点は大分楽だ。

ゴミバケツの蓋を開け、ゴミを放り込んでいると、ティッシュの包みが転がり落ちた。

「あ

あの薬だ。拾い上げようとしたところを、寄ってきた野良猫が、オモチャにして遊び始めた。小さくてこわい転がるそれを、いたくお気に召したらしい。熱心に遊んでいる。

「あーあ

まあ後は捨てるだけだから、オモチャにされようと別に構わない。遊ぶ猫の姿に何となく癒されながら、さつさと片付けようと、斎はゴミ捨てを再開した。

すると、猫の爪や牙で弄ばれ続けていたティッシュは、当然ばらばらに散らばり始めた。中から錠剤が転がり出る。猫は今度は錠剤にターゲットを変え、匂いを嗅いだり前足で転がしたりし始めた。

「あ、こら!」

気づいた斎が声をあげるより早く、猫がぺろりと錠剤を舐める。

空腹なのか、そのまま口の中に入れてしまった。斎が錠剤を取り上げようとすると、パッと逃げ出し、その辺りを駆け回り始める。ゴミバケツに飛び上がり、中身を引っかき回そうとしたから、斎も慌てて猫を捕まえに走った。だが猫は、毛を逆立てて威嚇し、またもの凄い勢いで駆け回り始めた。

妙な胸騒ぎを感じて、斎は猫から視線を外し、地面に落ちたもう一つの錠剤を探した。薄暗かつたが何とか見つけて、手の中に握り込む。

駆け回る猫を見ていて、突然脳裏に甦る記憶があった。

かつて一度だけ見た、動物実験。その時の猫も、ちょうどこんな風に凄まじく興奮して、正気を失つたように駆けずり回り、やがて泡を吹いて身体を痙攣させながら死んでいったのだ……。

斎はゴミ箱を引っ掴み、店内に取つて返した。錠剤をティッシュで包み直して、三階に上がり服を着替える。店の片付けを終えて上がってきた立河と鉢合わせするが早いか声を投げた。

「叔父さん、車出して！」

「斎？」

面食らつた顔の立河に、斎は階段を下りながら答えた。

「急ぐかもしれないんだ。警視庁へ、早く！」

途中で諸角に連絡を取つて事情を話し、斎たちは警視庁に向かった。警視庁で合流した諸角に例の錠剤を託して、分析を頼む。かなり強引にねじ込んだらしく、ほとんど最優先の速さで結果が出た。

「……ヴァンパイア・キス？」

斎の言葉に、諸角が苦い顔で肯ぐ。

「最近、若い連中の間で広まってる、アップ系の薬物だ。成分が酷似してて、十中八九、ヴァンパイア・キスで間違いないらしい」

アップ系というのは、人を興奮させる　いわゆる“ハイにさせ”る”類の薬物だ。対して、虚脱させ夢想状態に陥らせる薬物はダウン系と呼ばれる。

「ヴァンパイア・キス　つてのは、どっちかってと“初心者向け”だ。注射器を使うようなドラッグと比べると、錠剤だから飲むだけいいし、従来のドラッグより使いやすい。ぶっちゃけた話、経験のない人間を引きずり込むのにぴったりの薬つてことだ」

例えば、あの少女たちのような。

「冗談じゃないと、斎は苛立たしげに床を蹴りつけた。

「……飲んじやつた場合、どうなるんですか、これ」

「最初は、やたらとハイになつて頭が冴えたような気分になるらしい。一度や一度なら、まだ何とか後戻りできるだろ？が、慣れちまうと危ないな。下手すりや、こいつなしじゃ生活できなくなつちまうぞ」

諸角の言葉に、ぞつとした。

「……ちょっと、すみません」

断りを入れて廊下に出ると、携帯で那々にかけた。

「あ、天瀬だけど。ごめんね、こんな時間に」

『そんなの構いませんけど……どうしたんですか？』

「あのさ、ちょっと確かめてもらいたいことがあるんだ。友達の持つてた風邪薬、あれ、どこから手に入れたのか、分かるかな」
『学校の保健室だつて言つてましたけど……』

「保健室？」

そんなはずはない。『この世界に、ドラッグを常備してある保健室があるというのか。

『けど、あたしもちょっと変だなつて思つて……あの、一日切りますね』

『え？』

『直美のところへ、本人に聞いた方が早いですね。また電話入りますから』

「え、あの」

問答無用の勢いで切られて、斎はため息をついた。今から友人の家に行つたのでは、待ち時間は十分ではきくまい。

……と思つたら、ものの一、三分で携帯が鳴つた。

『天瀬さん？ ごめんなさい、いきなり切つちやつて』

「いいけど……もの凄く早くない？ しばらく待つの覚悟してたけど」

『直美ん家、あたしとおんなんじマンションの七階上なんです』
納得した。確かにそれなら、自分を中心とするより直接直美本人に話をさせた方が早いと、那々が考えたのも肯ける。

『天瀬さん、あたしに訊きたいことって何ですか？ 一応彼氏持ちですけど、天瀬さんならお付き合いしても』

「いや、あの、そういうことじゃなくて」

電話口に出るなりモーションをかけてくる直美に苦笑した。何といふか、女子高生というのは誰でもこんなにパワフルなのだろうか。「今日店に落ちてたあの風邪薬。学校の保健室でもらつたっていうの、間違いない？」

『そうですよ？ 保健室の棚にあつたって、言つてましたもん』

「……『言つてた』？ 自分で持つてきたわけじゃないの？」

『あたし、ちよつとだるくて寝てたんですよ。そしたら一年の先輩が、薬持つてきてくれて』

「じゃあ、自分で棚から持つてきたわけじゃなくて、その人にもらつたの？』

『そうですけど。ティッシュに二錠包んで、その内の一錠その場で飲んで』

「飲んだ！？」

『え、あの薬、何かまずい薬だつたんですか？』

斎の勢いにただごとではないと感じたのか、直美の声が不安げになる。真実を告げるべきか迷つたが、このままでは彼女たちがドラッグに引き込まれる危険があった。迷いを切り捨てる。

「……込み入った話になるから、電話じゃ話せないんだ。どこか、落ち着いて話できるところないかな。僕らみんなで」

『話……ですか？ 那々、どうする？』

すると、電話が直美から那々に代わった。

『あの……お店に行っちゃ、ダメですか？』

「店？ ペニーハウスに？」

『ウチも直美のところもだめだから……他に思いつかなくて』

「うん、こつちは構わないけど……じゃあ、明日の夕方？」

『天瀬さん、明日土曜日ですよ？ あたしたち、学校休みです』

「あ……」

そういうえば、もう週末だ。土日祝日関係ない商売をしていると、つい忘れがちになる。

「そうだけ。じゃあ、時間いつでもいいから。朝八時半から午後七時までやつてるから、その間なり」

『分かりました。じゃあ、十時頃、お店の方に行きます』

電話を切つて、斎は壁に拳を叩きつけた。

「くそ！」

間に合わなかつた。最悪の事態でなかつたことは救いだが、それでも後手に回つてしまつたのは事実だ。

部屋に戻るうとした時、また携帯が鳴つた。

「はい」

『あの……あたし、那々です。さっきの話ですが、その……直美、何か変なことに巻き込まれてるんですか？ 何か、嫌な感じがして』

直美、ホントに大丈夫かなって』

『うん……気をつけた方がいいよ。あまり知らない人に、気を許さない方がいい』

勘のいい子だ。しかし、話をするまで不安な思いはさせたくないので、斎は言葉を濁す。せめてもの、忠告だった。

通話を終えると、急いで部屋に戻つた。

「諸角さん、学校の中を捜査つて、できますか？」

「よつほど事情があればな。だが何でだ?」

「ドラッグが、校内で受け渡された可能性があります」

「諸角も立河も、目を丸くした。

「生徒が、流してゐるってことか?」

「少なくとも、今回のケースでは、薬を落とした女の子は同じ学校の生徒から薬を渡されてます。さつき、話を聞きました。風邪薬だつて言われたそうですが?」

「それで、疑いなく受け取つちまつたのか……」

「一錠、もう飲んじやつてるそつです」

「諸角がぎょつとした。

「何だと!?」

「まだ、ぱつと見で分かるような症状はないみたいですね。僕もそんなにおかしな感じは受けなかつたし……だけど、これ以上彼女たちが関わる前に、何とかしないと」

「そうだな。薬物対策課の方に話は通すが……」

「一年の生徒から、薬を渡されたそうです。その生徒がどこまで関わつてゐるかは分かりませんけど、調べてみる価値はあると思います」「分かつた。伝えておく」

「それと……明日、彼女たちと話をするようになりました。諸角さんも、立ち会つてもらえますか? その方が、彼女たちも納得してくれると思います」

「ずいぶん急だな。どこへ行きやいい」

「ペニーハウスへ。十時頃について、あの子たちと約束していますから。あまり騒ぎを大きくはしたくないんです。できるだけ穏便に、お願いします」

そう言い置いて、斎たちは捜査一課を後にした。

帰途に着きながら、立河は斎をちらりと見やつた。厳しい表情で、フロントガラスの向こうの闇を見つめている。

「よく、分かつたな」

そう言つと、斎は我に返つたように立河を見つめた。ふつと自嘲

めいた笑みを浮かべて、フロントに視線を戻す。

「……昔、教団にいた時にさ。動物実験に立ち会つたことがあるんだ。自分たちの使う薬を作るための実験だからって」

教団では、斎たちのよつた戦闘要員にドラッグを服用させていた。戦うことに興奮し、盲目的に臣従する兵士を作り上げるために。

「あの薬を食べた猫の様子が、その時実験に使われた猫とよく似てたから……興奮剤に近い、ドラッグの一種じやないかって思つてさ」

「おまえも……か？」

恐れるよつた立河の問いかけに、斎はかぶりを振った。

「僕は……体質的に、薬が効きにくかつたらしいから。ほら、たまにいるでしょ、麻酔が効きにくい人とかさ。あんな感じ」

「じゃあ、ドラッグは使つてないんだな」

「うん。……つていうか、使つても無駄だつたつていうか

「無駄？」

「教団でよく使われてたドラッグって、興奮剤と、あとは鎮痛剤だつたから。興奮剤は効きづらいし、鎮痛剤は必要ないでしょ」

自分の両手を見つめて、斎はこともなげに言つ。

ペインレス・ドッグ。決して痛みを感じることのない、忠実な教団の犬。

ずっと昔、少なくとも物心つく以前から、彼には痛覚がなかつた。痛みというのがどういうものなのか、彼には分からなかつた。任務のたびにドラッグを打つ仲間たちを、どこか遠い目で見ていたのだ。他の誰もが当たり前に持つているものが、自分には欠落している。教団の幹部には歓迎されても、彼自身はいつも、自分が人間ではないような気がして怖かつた。

「……僕はずつと昔から、自分がどこか間違つた存在なんじやないかつて思つてた」

「馬鹿言つな！」

間髪入れず怒鳴られて、きょとんとする斎に、立河は哀しくな

る。教団では、誰も手を差し伸べることがなかつたのだろうか。この孤独に。

だが、斎はすぐに、綻ぶような笑みを浮かべた。

「うん。 そんなこと言つなつて、前にも言われた。『痛みを感じるのは、おまえが悪いんじゃない』って」

それはきっと、斎が今なお面影を抱えている“父親”。

それでも、立河はその存在に感謝する。

斎を、人間として愛してくれたのであろう、その人物に。

「……良かつたな、大事にしてくれる人がいて」

「うん。 大好きだつたよ、父さんのこと」

斎は窓の外へ顔を向けてしまい、直接表情を見ることはかなわなかつたが。

ガラスに映つた口元だけは、かるうじて読み取れた。

『……ごめん、父さん。 ごめんなさい』

治まつたはずの症状が、また再発している。

直美はだるい身体を、引きずるようにして歩いていた。いつもヨリペースの遅い彼女を、気がかりな那々が振り返る。

「ねえちよつと直美、あんたホントに大丈夫？ 何か、昨日より具合悪そうだよ」

「そうかも……あ～やつぱ、あの風邪薬取つといてもらつた方がよかつたかなあ」

「けど、天瀬さんの様子だとさ、あんまり使わない方がいいような薬みたいだよ？ やめときなつて」

斎は、いたずらに人を不安に陥れるような人間ではない。その彼が、わざわざ注意を促したような事態なのだ。那々はずつと、嫌な予感を感じていた。

ペニーハウス のドアを開けると、テーブルを拭いていた斎が顔を上げて出迎えた。

「いらっしゃい」

「……どうも」

斎はシンクで手を洗い、立河に声をかけた。

「叔父さんごめん、ちょっと抜ける」

「そこ使うんだろ。エプロン外しとけよ」

「うん」

斎は言われた通り黒のエプロンを外して、奥まつた四人掛けの席に那々たちを案内した。なるほど、目立たない席だ。しかしここにはすでに、先客がいた。

「あ……」

那々は思わず呟く。そこにいたのは、諸角だつた。

「この間の刑事さん？」

「ああ、こいつに呼ばれてね」

諸角は苦笑しながら、モカブレンドを飲んでいる。斎は一旦カウンターに取つて返すと、カップとグラスを人数分トレイに載せて持つて来た。斎が諸角の隣へ、そして向かい合つ形で那々たちが座る形で落ち着いた。

「……ごめんね、わざわざ呼び出して。でも、大事な話だから」
斎はしばし言葉を探すように言いよどんだが、ほどなく口火を切つた。

「昨日、あの薬を警察で分析してもらつたんだ」

薬を食べた野良猫に起こつた異常を話し、斎は直美を見つめた。

「君が落としたあの薬。あれは風邪薬なんかじゃない。ドラッグだ」

「え……？」

直美がぽかんとする。那々が割つて入つた。
「ちょっと待つてください、ドラッグって」

「くら何でも、突拍子がなさ過ぎる。だが、諸角があつさりとそ

れを肯定した。

「残念ながら、事実だ」

今まで黙っていた諸角が、小さなビニール袋をテーブルに置いた。

同じ、白っぽい錠剤。

「ヴァンパイア・キス つつてな、若い連中の間で流行つて ドラッグだ。こいつは押収品だが、似てるだろ?」

似ているどころではない。そのものだ。直美が力のない声で呟いた。

「……じゃああたし、麻薬飲んじゃつたんですか……?」

「まあ、一回くらいなら、そう大した影響は出ない。これからこいつに手を出さなければ、そんなに時間はかからず治る。大切なのは、自分自身の意志だ」

「あの……あたし、何か犯罪に問われちゃつたりするんですか?」

「まさか。君は被害者だよ。騙して飲ませた方が卑怯なんだ」

斎が吐き捨てるように言つ。いつもは穏やかな双眸に、鋭い光が宿つていた。

「こんなこと言つと何だけど、自分から進んでドラッグを使うのなら、どうぞ」自由について言つよ。ついてくる結果だつて、本人の責任だからね。自滅したいのなら、そうすればいい。でも、それを他人に押し付けるのは許せない。卑劣もいいところだ

「おいおい……仮にも刑事の前で、そういうことを言つなよ」

呆れたような諸角の言葉に、斎は肩をすくめた。

「偽らざる本音ですから」

「……おまえ、おとなしそうな顔して結構きついよなあ

「そうじやなきや、できない商売してますから」

自嘲するような笑みをこぼした斎は、那々たちに向き直つた。

「その薬を持って來た二年生つて、誰だか分かる?」

さすがにショックを受けていた直美だが、それでもしつかり肯いた。

「苗字だけなら。西脇つて、言つてました。

ほら、こないだス

トーカー見たつて言つてた、あの人だよ

「え？ そうなの？」

後半に、那々が目を見張つた。

「ストーカーって、あの手紙の？」

「あ、はい。最近は家だけじゃなくて、学校の下駄箱にも手紙が放り込まれるようになつて……それで直美が、あんな変なこと頼んじゃつたんですけど」

じろりと直美を睨むと、けろつと返された。

「いいじゃない。おかげで天瀬さんみたいなカツコイイ彼氏ができるんだから」

モカブレンドを飲みかけていた諸角が咳き込んだ。

「……彼氏！？」

じりりと見やつてくる眼光に、斎は心持ち身を引いた。

「おまえ、青少年保護条例違反でしょっ引くぞ。この子がいくつだと思つてるんだ」

「彼氏の“ふり”ですよ！ そつすれば、ストーカーも諦めるかもしけないって」

慌ててまくし立てる斎に、少女たちが笑つた。恨みがましそうに彼女たちを見やりながら、斎が話を戻す。

「……とにかく、その西脇つていう一年生には、絶対に気を許さないで。それと、一つ訊きたいんだけど、君たちの住んでるマンション、防犯カメラつてあるかな」

「は？」

戻つたと思うと、いきなりすつ飛んだ話に、那々たちは顔を見合わせた。

「ある、と思いますけど。エントランスとか……あ……
那々がはつとする。

「カメラに、映つてるかも！ 郵便受けに手紙入れるストーカー！」
「だよね、やっぱ！」

斎がにつじりと、諸角の肩を叩いた。

「というわけで、お願ひします、諸角さん。やつぱり、警視庁が乗り出せば一発ですよね」

「おまえなあ……最近、大分いい性格になってきたんじやないか？」

「これが地ですよ」

あつさりと言いつて、斎は立ち上がった。

「じゃあ、諸角さん、お願ひします。ドラッグのことはもちろんですけど、ストーカーも思い余ると厄介ですから。早く解決しないと、両方とも」

「そうだな。何とか動いてみるさ」

一杯目のモカブレンドを飲み干して、諸角は席を立った。

「さあ、君らのマンションに行こうか。防犯カメラの記録が残ってるだろ?」

「あ、はい!」

那々たちも「コーヒー や カプチーノ を 片付けて 立ち上がつた。

「気をつけて。何かあつたら電話してくれていいかから」

那々にそう言つ、斎の表情はやせしい。さつきの突き放した言葉が、嘘のようだった。

あんな鋭い表情も、できる人なのだ。

知らなかつた一面に、少しづくりとした。

発着履歴からコールバックした相手は、なかなか出なかつた。コール音が十回を超えて、諦めかけた時、やつと氣だるそうな声が聞こえた。

『……何だよ』

「今、どこにいるんだ?」

『家で寝てんだよ。何だよ、朝っぱらから』

『薬、都合してもらえる? いい獲物が手に入りそつなんだ』

『マジかよ?』

相手の声音が変わった。

「大体そつちの希望通りのがね。ウチの一年で、社長令嬢。顔もまあ、いい方なんじゃない?」

ひゅう、と相手が短く口笛を吹くのが聞こえた。

『上玉じやん。おまえの女か?』

「違うよ」

『なら、俺らが頂いちまつてもいいわけか?』

「別にいいよ。つていうか、どうなろうとこっちの知ったこっちゃない。で、そろそろそいつがあの薬欲しがりそつなんだけど、

都合つく?』

『いつでもいいぜ。けだ一、三日じや、ちょい短いんじゃねえのか? 一月くらい使つちまえば、完璧中毒だけどよ』

「何なら、ちょっと強めのを打つちゃつてもいいよ。それこそ、一回やつちゃえばもうやめられないようなのを」

『おっまえ、意外と怖えのな。マジ容赦ねえって』

「ああいうタイプの女、嫌いなんだ。どうせなら、とにかくやってもらつてもこつちは一向に構わない」

吐き捨てて、哲治は携帯を握り直す。

「で、や。割り引いてくれるのか?」

『まだ無理だな。その女目の前に連れて来るってなんなら考えていいけどな』

「そう」

足下を見やがって。歯噛みしたいのをじらえた。

「……連れてけば、いいんだな」

考えがまとまらない。ヴァンパイア・キスを一錠取り出し、噛み碎いた。しばらくすると、頭がクリアになつてくる。いい感じだ。

今日は土曜で、学校は休み。昼間は遊びに出かけたとしても、夜にはさすがに家に戻つているだろう。

ふと、ある考えが閃いた。

「じゃあ今日の六時頃、今から言ひマンションに来てくれよ

『マンションへ。』

「ああ。そいつをうまくおびき出すから、後は好きにしなよ。薬を打つなり、拉致るなり」

『待てよ、誰かに見つかったりしねえだらうな?』

「安心してくれよ、絶対見咎められない方法を考えてある。最近は何かと物騒だからね。何が起こったって不思議じやないだろ?』

『ふうん、まあいいさ。なら、その女は俺が頂きた。せいぜい遊ばせてもらひづ。ホントに拉致つちまつてもいいんだな?』

「ああ。そつちも、薬用意しといてくれよ

『OK、じゃあ、そのマンションの名前は?』

マンション名を伝えて通話を終えると、哲治はふつと息をついた。いよいよだ。

直美と引き換えに、ヴァンパイア・キスを安く手に入れることができる。そして同時に、あの女を那々の傍から引き離すことも。あの女は厄介だ。早く那々から遠ざけなければ。

いつものように、那々の後をつけていた帰り道。彼女に彼氏ができたと聞いた時、危うく取り乱すところだつた。ストーカー対策のための“恋人のふり”と分かつてほつとしたが、けしかけているような直美に不安が膨らむのを感じた。

那々と恋仲になる相手が自分でないと考えるだけで、腹の底から湧き上がるような怒りを抑えられない。

しかもその相手が、強盗から那々を救つたあの青年であるうことが、怒りを増幅した。

何もかも、沖田直美　　あの女がそもそもの原因だ。あの女が那々をペニーハウスに連れて行かなれば、那々があの男と出会うこともなかつた。しかも、二人の間を取り持とうとしているのもあの女だ。

そう、あの女があの女があの女が！

……だから、めちゃくちゃにしてやる。薬漬けの、廃人にもな

つてしまえばいい。

哲治はリビングに顔を出した。父は出かけ、母は家事に忙しいようだ。サイドボードに歩み寄り、通帳とカードのある引き出しを開けた。ほとんど残高のない自分のものは残して、親名義のカードを抜いた。暗証番号は確か、父の誕生日だったはずだ。

カードをポケットにねじ込み、哲治はリビングを出た。

「母さん、ちょっと出かけてくる」

「どこに行くの？」

「分からぬよ。適当にぶらつけてくる。夕方には帰るよ」

「息抜きもいいけど、勉強もちゃんとしなさいね。最近成績上がってるみたいだから、母さんも楽しみよ」

「うん」

勉強なんて必要なものか。ヴァンパイア・キスさえあれば、そんなもののひとつともなる。

家を出で、近くのデパートのATMで、二十万ほど引き出した。そして、デパートやホームセンターを回り、必要なものを買い集める。

袋を抱えて歩きながら、哲治は会心の笑みを浮かべた。

「これで、何もかもうまく行くんだ。

もうすぐ。もうすぐ那々を、あの男から取り戻す。

「……そうか。じゃあ、あいつも邪魔だな……」

ふと気づいたように咳くと、哲治は何かを思案するように視線をわざよわせながら、雑踏へと消えていった。

身分証明書の威力か、住人のプライバシーは守るという約束で、防犯カメラの記録はあっさりと見せてもらえることになった。

詳しい話は後ですると少女たちを家に帰してから、諸角はカメラの映像と睨み合いを始める。ここ一週間ほどの映像を中心に調べると、ほどなく収穫があった。

郵便受けに手紙を放り込む人影。まだ若い男だ。郵便受けに向かうと、ちょうどカメラに背を向ける格好になるので顔はよく見えない。しかし、マンションを出る際には、ちょうどカメラに顔が映るはずだ。

男はカメラをまるで警戒していないように見える。手紙を届けることに夢中になるあまり、他のことを考える余裕もないのだろう。それにもしても、朝の七時に郵便受けに手紙を放り込みに来る根性があるなら、もつと別の方向へ発揮すればいいものを。

男が郵便受けを離れたその瞬間、映像を静止させた。神経質そうな顔つきが、小さいながらもはっきりと映し出されていた。

諸角は手帳にその男の似顔絵を書き込んだ。映像の持ち出しを、管理人に渡られたためだ。他に、郵便受けに手紙が放り込まれた日付などを書き込み、諸角は管理人詰所を後にした。

エントランスの奥にはインターホンがあり、各部屋の住人が部屋でボタンを押すと、エントランスからエレベーターホールに入るドアが開くようになっている。マンションの住人に関しては、暗証番号を打ち込んで開けるシステムになっていた。諸角はインターホンで、那々と直美をエントランスへ呼ぶと、手帳の似顔絵を見せた。「こいつがどうやら、ストーカーの可能性が一番高い。見覚えがないかな?」

一目見た瞬間、那々たちは叫んだ。

「あーっ！ あの人！」

「あの西脇つて一年生…」

「本當か！」

早速手帳に書き込む諸角を他所に、少女一人は大騒ぎだ。

「あ～い～つ～つ！ ストーカー見たつてのも、作り話だつたんだ
！ 本人がストーカーじゃないの！」

「ムカつく！ 許せないよね！」

「あ～…盛り上がつてるとこ悪いんだが」

少女たちの剣幕に恐れをなしながら、諸角が口を挟んだ。

「間違いないね？」

「間違いようがないですよ！ あ～も～、こいつのせいで…」

直美が地団太を踏む。諸角は手帳をポケットにしまつと、表情を引き締めた。

「……とにかく、ここまで来れば、事情を聞くべきじゃ済みそう
にないな。引っ張ることになりかねないぞ」

「逮捕、するんですか？」

「ドラッグを流してるとこ、そつなるかもしけないな。君たちも、充分気をつけた方がいい。本人がドラッグをやつてたら、どういう行動に出るか分からんからな

「は、はい。分かりました」

二人はおとなしく肯いた。直美など、斎が気づかなければ危うく薬物中毒になりかねなかつたのだ。さつきまでの勢いは消えて、神妙に話を聞いている。

マンションを出ると、諸角は考え込んだ。

どう攻めたものか。生徒の名簿の提出を求めようにも、令状なしでは難しい。

考えあぐねたまま、諸角はとりあえず、警視庁へ向かうことになつた。

デパートのトイレで、ヴァンパイア・キスをもう一錠噛み砕き、哲治は息をついた。

最近、薬を飲む間隔が短くなっている。減りも早かつたが、そんなことは気にもならなかつた。ヴァンパイア・キスを飲まなければ、考えがまとまらない。頭の中が混乱してきて、止まらなくなるのだ。

哲治はデパートの一階のコインロッカーに、今まで買い込んだ荷物を詰め込んで、デパートを出た。行き先はもう決まつていて、ポケットの中の感触を確かめて、哲治は目的地に向かつた。

ペニーハウス。

建物の裏手に回ると、階段の上に裏口があつた。試しにノブを回すが、鍵がかかっている。舌打ちした哲治は背負つたディパックから爆竹と発煙筒を取り出すと、ライターで爆竹に火を点け、その場に放り出して階段を駆け下りた。

パンパパンパーン！

弾けるような音が、辺りに響き渡つた。

「何だ？」

カウンターの中で、立河が耳を澄ました。客たちも、いぶかしげに周囲を見回している。

「裏口の方だ。ちょっと見てくる」

斎はトレイを置いて、裏口へ向かつた。

裏口のドアの前に立つた時、かすかに鼻腔をくすぐつた臭いに、斎は眉を寄せた。

（……火薬の臭いだ）

銃声でないことは分かつていて、文字通りきな臭い。斎はそつと取つて返して、掃除に使う箒を持って来た。静かに鍵を外し、ドアを開けた。

外には誰もいない。ただ爆竹の残りかすが落ちている。斎は箒を

持ったまま階段を下りていった。踊り場を通り過ぎ、駐車場へと下りる外階段。

その中ほどの踏み板の隙間から、ナイフが突き出された。そのままなら足首に刺さっていた一撃を、斎は跳び上がってかわしていた。手摺に手をかけ、飛び越える。空中で軽く身を捻って、軽やかにアスファルトに降り立つた。

階段下の空間に身を潜めていた相手が、がむしゃらにナイフを突き出してくる。

斎はとっさに、箒で受け止めた。突き出された腕を蹴る。

「てえっ！」

声がして、箒からナイフが引き抜かれる。箒を放り出し、相手を引きずり出そうとした斎の顔面目がけてその時、投げつけられたものがあった。

発煙筒。

煙が噴き出し、斎は飛びすさった。息を止めて、煙の向こうを凝視する。眼に違和感を感じたが、痛みを感じないので開けていられないほどではない。ただ、涙が出てくるのには参った。

煙の向こうから突き出されたナイフを、斎は落ち着いてかわした。体を開いてナイフと平行にし、左手で手首を掴んで受け流しながら、右肘を相手の顔の辺りへ突き込んだ。

濁つた悲鳴をあげて、相手が膝を折る。その腹に足を当て、思い切り蹴り飛ばした。

吹っ飛んで背中から倒れる相手に、斎は冷静に判断を下す。

素人だ。

発煙筒を遠くへ蹴り転がすと、相手を見下ろした。

まだ高校生くらいの少年だ。起き上がり、握り締めていたナイフで切りかかってきたのを、あっさりと拘束した。腕を捻り上げると、呆気なくナイフが落ちる。

「放せ！」

「いきなりナイフで切りかかってきたわけを、聞いてからね」

ナイフを遠くに蹴り飛ばすと、少年は諦めたように、腕の力を抜いた。

「……おまえが」

振り返ったその顔は、歪んで目が憎悪に光っていた。
「おまえなんかに、渡すもんか！」

哲治は混乱していた。ただのウェイターが、なぜここまで体術に長けているのか、分からなかつた。銃の腕は知つていたが、今は素手なのだ。なのに不意打ちも、発煙筒の目眩ましも通じない。計算違いだつた。ナイフで一突きして、そのまま逃げるつもりでいたのに。

だが、あれだけ ヴァンパイア・キス を飲んだのだ。無駄だつたはずがない！

哲治はめちゃくちゃに暴れた。少しでも拘束が緩めば 。

その時、

「ずいぶん遅いな。どうした？」

裏口のドアが開き、立河が顔を出したのだ。

「何やつてるんだ、斎！」

「叔父さん、警察呼んで。この子、ナイフで切りかかつてきた」

「何だつて？ しかし、それにしても 」

階段を下りて近づいてきた立河に、哲治は足下の石を蹴りつけた。顔に当たりそうになつたのを、慌てて腕で庇つた。

「叔父さん！」

斎の腕が、わずかに緩んだ。哲治は渾身の力で斎を振り払うと、落ちていたナイフに飛びついた。掴み、投げる。偶然ながら、ナイフは奇跡のような正確さで、立河に向かつて飛んだ。

そのままなら、確実に直撃していたナイフは、しかし斎に叩き落とされた。

哲治は後ろも見ずに、駆け出そつとした。瞬間、足を払われて前のめりに転ぶ。

わけも分からず見上げると、斎がいた。

何でだ？ 何でこいつがここにいる？ なぜこんな化物じみた反應ができる？

俺が ヴァンパイア・キス をあれだけ飲んだ俺が、負けるわけないのに！

だが見上げた哲治は、斎の眼を見て硬直した。

何の感情もない、無機質な瞳だ。たとえば 人を殺す時でさえ、微塵も揺らがず見開いているような。そのくせ、恐ろしいまでの冷たい光を放っている。

普通の人間が、持つている眼ではなかつた。それが今、自分を見下ろしているのだ。本能的に恐怖を感じて、哲治は息を呑む。大人と子供などというレベルではなく、人の枠すら外れている。ただの生物として、哲治は身動きが取れなくなつた。

……何でもものを、敵に回したんだろう。

呆然と見上げる哲治の耳に、パトカーのサイレンが聞こえてくるまで、そう時間はかからなかつた。

「……西脇哲治、十六歳、か」

財布に入った学生証を見て、五十がらみの警官がため息をつく。哲治はじつと黙秘していたが、持ち物を調べられればひとたまりもなかつた。

大体、捕まるなど予定外れもいいところだ。客や他の店員に顔を見られないよう、裏口で騒ぎを起こしたのに、これでは意味がない。

哲治は唇を噛み締めて、警官が荷物を調べるのを見つめていた。パトカーの車内。周囲には野次馬がまばらに集まり、その視線を避けるように、哲治は顔を伏せた。両手にかけられた手錠の鎖が、じやらりと鳴つた。

パトカーには、哲治と警官の二人しかいなかつた。後部座席に並んで座つている。哲治がおとなしくしているので、もう一人の警官

は店員に話を聞きたく、ペニー・ハウスに行ってしまった。現在、所轄署の方から警官が何人かこちらへ向かっているらしい。

「一体何だつて、こんなことやらかしたんだ」

息子か孫の失敗を咎めるように、警官が尋ねた。哲治はむつりと黙り込んで、自分の爪先を見つめる。

犯罪者にしてしまった。つい数時間前まで、思いもしなかつた状況。

これから自分はどうなるのか、ぼんやりと考える。おそらくこのまま、所轄署へと送られ、留置されるのだろう。

そこまで考えて、はっとした。

そうなればもう、那々には会えない。

愕然として、哲治は自分の両手を見つめる。そうだ。このまではもう、彼女には会えなくなる。そんなことになつてたまるものか！

「う……うあああああ！」

哲治は頭を抱え込んで叫んだ。いきなり叫んで背を丸めた哲治に、警官がぎょっとする。具合でも悪くなつたのかと、顔を覗き込んだ。「どうした！」

瞬間、哲治の両手にかけられた手錠が、警官の顔に叩き込まれた。「ぐつ！」

ぐぐもつた声をあげ、警官が鼻を押さえて身を折つた。まだ ヴアンパイア・キス の効力が残つていたらしい。思ひがけないほどの力が出た。警官の身体をシートに押し付け、手首の手錠で顔を滅多打ちにした。

ぐつたりした警官の服を探つて、手錠の鍵を見つけた。繫がれたままの両手で財布と携帯、それにコインロッカーの鍵だけをかき集めて、ドアを開け外に転がり出た。

「どけよ！ おまえら！」

野次馬を突き飛ばし、哲治は走り続けた。適当な路地に飛び込み、持つて来た鍵で手錠を外して捨てる。手錠で切つた傷と警官の返り血で、両手は血まみれだった。近くにコンビニを見つけ、手を洗つ

てガーゼとテープ、それにリストバンドを買い、トイレで手当を済ませた。

コンビニを出ると、前に停めてあつた自転車の中で鍵がかかっていないものを選んでまたがる。全速力で漕ぎ、大通りができるだけ避けて、コインロッカーのあるデパートへと舞い戻った。

コインロッカーから荷物を回収すると、哲治は新しく買ったディパックに荷物を詰め込み、パークーを買って羽織ると、盗んだ自転車に乗つて次の目的地に向かつた。

彼の脱走が伝わり、近隣に警官が出動したのは、その数分後のことだった。

西脇哲治脱走の知らせに、諸角は眉を寄せて唸り声をあげた。苦々しい思いと、取り逃がした悔しさが入り混じつている。殴り倒された警官は、顔面を数ヶ所骨折する重傷を負つたらしい。

諸角がペニー・ハウスの事件の第一報を聞いたのは、本庁で令状を取ろうとしている最中だつた。泡を食つて、ペニー・ハウスに駆けつけたのだ。結果的に、令状どころではなくなつた。

「諸角さん？」

声に振り返ると、斎が立つていた。左手にはガーゼが当てられており。ナイフを叩き落とした時に切つたのだ。抜き身のナイフを素手で叩き落とせば当然だが。

「災難だつたな。まあ、怪我も大したことがないよかつた」

「しばらく水仕事できませんでしたけどね。ところで、何で彼、僕にナイフで切りかかつってきたんですか。通り魔にしちゃ、爆竹から発煙筒まで用意してえらく周到でしたけど」

「その前に、こっちも収穫があつてな。例のストーカーの面が割れた。娘ちゃんとちに確認取つたら、はつきり証言してくれたよ。ドラッグを渡してきた西脇つて生徒だつてな。おまえに切りかかつた、

あの坊主だ

「そうか。それで……」

襲われた理由に納得が行つて、斎は呟いた。自分が那々の“彼氏”だつたからだ。彼が歪んだ顔で『渡すもんか』と言つた意味が、やつと分かつた。

あれは、那々のことだつたのだ。

「手当てしてゐる時に外で騒いでたんですけど、彼、逃げたそうですね」

「ああ、警官を殴り倒して脱走した。今、所轄が必死こいて行方を追つてゐる。おとなしかつたんで、油断したらしい」

「そうですか」

斎は目をすがめた。

「……彼女たちが、危ないかもしません」

こんな力技を使つてまで彼が脱走した理由を、他に思いつかなかつた。諸角は肯く。

「手配はした。マンションには警官をやつてある。行つても入れんぞ」

「僕も、気になるんでもちよつと行つてみます。どうせ店も、こんな状態じや今日一杯は営業できないし」

真ん前にパートカーが停まり、未だに野次馬が残つてゐる店を見て、斎はため息をついた。つい数日前にも事件があつたばかりだというのに。何となく縁起がよろしくない。

斎は自宅に戻ると、服を着替えた。Tシャツに、ブラックジーンズ。少し考え、薄手のデニムシャツを掴むと、そのまま階段で一階へと下りた。

カウンターの下から、ヒップホルスターを取り出して腰に着ける。そして棚を開け、一丁のオートマチック銃を取り出した。

シグザウエルP226。9mmパラベラムを最大十六発装弾できるこの銃を、頑丈さと命中精度の高さの一点から、斎は気に入つていた。

マガジンを確かめ、P226をホルスターに挿し込むと、デニムシャツを羽織つてホルスターを隠す。あいにく長袖しかなかつたが、薄手なので暑苦しくはなかつた。ホルスターを隠せるほど長さのある服で、夏場に着てもおかしくないのはこれしかないのだから仕方ない。まさか堂々とホルスターを晒すわけにもいかないし。

準備を終えて一階に戻ると、諸角は右腰のホルスターに気づいたようだ。渋い顔になる。

「……今日は何持つて行く気だ」

「P226を。頑丈ですから、少々鈍器代わりにしても大丈夫です」「する気かおまえ……まあ、護身用つてことにしどくか」
それにしちゃでかいが、とぼやいて、諸角は斎を伴い覆面パトカーに乗り込んだ。

ペニーハウスから那々たちのマンションまでは、意外と近い。車で十分ほどだろうか。

マンションの前には、制服の警官が一人立っていた。彼らに手を上げてみせて、諸角はマンションに入していく。斎も会釈しながらそれに続いた。敬礼を返されてぎょっとする。もしかして私服刑事とでも思われたのかもしれない。こんなラフな格好の刑事はいないと思うのだが。

那々の家は八階、直美の家は七階上の十五階。まずは、那々の家に向かうことにして、インターホンのボタンを押した。

『はい』

「ああ、諸角だ。例のストーカーのことで進展……つーか動きがあつた。上がつてもいいかな」

『あ、はい、どうぞ。今、直美もこっちにいますから』

エレベーターホールへのドアが開いた。エレベーターに乗り込み、七階に着くと、ドアのインター ホンを鳴らした。

「刑事さん、ストーカーのことで何かあつたつて」

ドアを開けるが早いかまくし立てた那々が、斎の姿を見てびたりと止まる。そういえば僕のことは言わなかつたつけ、などと呑気な

」とを考えていたら、那々が裏返つたような声をあげた。

「ど、どうして天瀬さんが刑事さんと一緒に？」

「ああ……ちょっと、色々あつてや。 とりあえず、上がりせてもらつていいく？」

「あ……『ごめんなさい、どうぞ…』」

慌ただしくスリッパを出し、お茶でも出そうといつのか台所へ消える。それを微笑ましく見守りながら、斎たちはリビングにお邪魔することになつた。

「今日、家の人は？」

「あ、高校の時の友達って人と一緒に出かけてます。 紅茶でいいですか？」

「ありがとう」

ソファに座ると、直美が斎の左手に手をついた。

「その手、どうしたんですかあ？」

直美が無邪気に訊いてくる。紅茶を出しながら、那々も左手の怪我を気にしたようだつた。

「ちょっとドジっちゃつて。大したことないよ。 それより、僕らが来るまで何か変わつたことなかつた？」

「別に……ないですけど。ねえ？」

直美と顔を見合わせ、肯き合つ様子にほつとした。どうやら間に合つたようだ。だが、諸角はすぐに顔つきを引き締めた。

「例の、ストーカー小僧だがな。ほんの少し前に、ナイフ持つてペニーハウス に乗り込んだ。もちろんすぐに取り押さえられて警察に引き渡されたんだが、そのパートカーから脱走しやがつたんだ。まったく、面白い話だよ」

「ナイフ……つて、じゃあ、その手の怪我……」

はつとした那々に、軽く手を振つた。

「大丈夫、ほんとに大したことないから。それより、こっちの方が心配なんだ。脱走までして来るような場所、もうここしか思いつかなくて。一応警察の人に入口ガードしてもらつてるんだけど、念の

ために、つて思つて

「ナイフは取り上げてるんだが、他に何をどれだけ持つてるか分からん。どこででも買えるしな」

少なくとも ペニー・ハウス に現れた時の装備が全部だとは、斎は思わなかつた。自分に切りかかつてきた時はともかく、ストーカー行為や直美に薬物を飲ませようとした彼の行動は、それなりに計画的だつた。彼の主目的は、斎ではない。準備を整えていることは、想像ができた。

そこまで考えて、ふと思いついた。

「諸角さん、西脇哲治が脱走した時に殴られた警官の人、今話ができる状態だと思いますか？ 持ち物調べたはずですから、それについて知りたいんですけど」

「どうだかな……手錠かけた手で殴られて顔面骨折つて聞いたぞ」「じゃあ、手錠したままなんですか？」

「詳しい話は聞いてないんだ。ちょっと待て」

諸角は携帯を取り出し、どこだかへかけ始めた。しばらく話して通話を切ると、斎に向き直つた。

「殴られた警官は、まだ話ができる状態じやないらしい。それと手錠は、近くの路地に捨てられてたそだ。鍵ごと取られたんだな。それで面白い話を聞いたんだが、すぐ近くのコンビニでガーゼとテープを買ってつた高校生くらいの男がいたそだ。両手首に怪我をしてたんだと」

「……手錠で殴つたんなら、その拍子に切つてもおかしくないですね」

「それと直後にその店で、自転車が一台盗まれたそつだ。おそらく逃走に使つたんだろ？」「自転車を使つたとしたら、ここまでの時間はかなり短縮できる…

：警察がここに手配されるまでの間に、ここに来た可能性は？」

「……ないとは言えんな。だが、管理人が見逃しやしないだろ？あの管理人、置物みたいにずっと詰所に座つてゐるからな」

「それでも、席を外すことはあります。可能性はあるかもしれません。一通り、マンションの中を調べた方が良くないですか？」

「分かった、調べさせるか。俺も行くが、おまえはここにいり」

「分かりました」

諸角が出て行くと、斎は那々の淹てくれた紅茶をゅっくりと飲んだ。コーヒーに慣れた舌に、新鮮な味だ。

「たまには紅茶もいいね。美味しい」

呑気なことを言う斎を、那々たちが浮かない顔で見つめる。それに気づいて、微笑してみせた。

「大丈夫だよ。あくまでも念のためだし。そう長く逃げてられるもんじやないから、彼が捕まるまでのことだ」

そう言つた斎に、那々はかぶりを振つた。

「そうじやないんです。　あたしのせいで、ずいぶん迷惑かけたなつて」

「迷惑？」

「彼氏のふりなんか、頼んだせいで。ただ、ストーカーが諦めるまでのつもりだつたのに……天瀬さんに、怪我までさせちゃうなんて『ごめんなさい』と呴く彼女は、ひどく頼りなげに見えた。そういうことかと、合点が行つた。彼女たちに浮かない顔をさせているのは、狙われている不安ではなく、斎を巻き込んだ罪悪感。

彼女たちが、気に病むことなどないのに。

「ほんとに、気にするようなことじやないよ。気にするのも謝るのも、怪我させた本人の役目でしょ？　あんまり期待してないけど」というか、するだけ無駄だ。あの少年は完全に、自分だけにしか通用しない独りよがりの論理で動いている。

「……嫌いなんだよ、こいついう事件」

「え？」

「自分にしか通用しないような理屈を人に押し付けて、うまく行かなきや全部他人とか社会とかのせいにするようなのが、一番嫌いなんだ」

五年前、ただ力を信奉する歪んだ教義の果てに、子供を誘拐しての家族を利用しようとした、青銀天聖教団。それに従っていた、自分。

そして。

這い出しかけた古い記憶を、かぶりを振つて打ち消した。

「だからもう、成り行きなんかじゃない。僕自身の意志で、彼を止めに来た」

分かつてゐる。ただの好き嫌いだ。西脇哲治が、斎の嫌いな性質を多く持つてゐるから、その思いを遂げさせる氣に到底ならないだけで。那々が、五年前に関わった少女だというだけで。そこには正義も、倫理観も居合わせはしない。

ただ、

(……守りたい、だけなのかもね)

あたたかくて小さな手を、思い出した。

「そう、ですか」

那々が目を伏せる。安心したのか、それとも落胆したのか判断のつかない、微妙な表情。

まあ、聖人君子なんて柄じゃないのは確かだ。斎は小さく肩をすくめて、紅茶のカップを傾けた。

どうしてこんな目に。

今日は彼、野村圭太(のむら けいた)にとって、生涯でも五指に入る厄運のようだ。でなければこんな目になど遭うものか。

彼の状態を簡潔に説明するならば、ガムテープで手足を縛られ床に転がされている、という一文で済む。付け加えて、傍のソファにはナイフを持つた神経質そうな少年が、何やらぶつぶつ言いながら腰かけていた。

(大体、あいつがあんなワガママ言い出したりしなきや、俺だって

こんな目に遭わずに済んだんだよ！）

ハつ当たり気味に思い出す。そもそも今日のデートで、ささいなことから恋人と口喧嘩になつたところから、彼の不幸は始まつたのかもしれない。三日も前から予約していたイタリアンレストランの前まで来ておいて『フレンチがいい』はないだろうと、駐車場で大喧嘩になつたのだ。

何とか食事は済ませたものの、そこからさつさと解散して（彼女はタクシーで先に帰つた）、圭太は自慢のポルシェで帰宅したのだが、マンション裏手の駐車場で車を降りた途端、ナイフ片手の少年に捕まつてしまつた。武道や護身術の心得があるわけでもない圭太は、あつさりと降参し、少年の言つまま彼を従弟と称して、マンションの中へ連れて行くハメになつたのである。逃げ出そうにも、脇腹にナイフを突きつけられては実行する氣にはなれない。

しかも、それでお役御免かと思いきや、部屋まで案内させられてガムテープで縛り上げられた。幸い口は塞がれてはいないが、何か喋れば口もガムテープで目張りされそのうでの、恐ろしくて声すらあげられない。

部屋の主を床に転がしておいて、少年はソファに陣取り、デイパックから荷物を取り出しているようだつた。

ずいぶん長いことその体勢でいた気がして、身体の節々が痛くなつてきた頃、インター ホンが鳴つた。少年が、ぴくりと肩を跳ねさせる。

「……余計なことわめいたりするなよ。一言でも喋つたら本氣で刺すぞ」

ナイフを握り締めて立ち上がつた少年に、逆らえるはずもなく肯く。少年はインター ホンのボタンを押した。

「……はい」

『警察の者です。少しお尋ねしたいんですが、このマンションの周辺で、不審人物なんかは見かけませんでしたか』

「いえ、特には。何かあつたんですか？」

『いや、大したことじゃありませんので。最近は何かと物騒ですか
ら、気をつけてください。それでは、失礼しました』

「どうも、ご苦労様です」

インター ホンを切つて戻つて来ると、少年は『うれ切れな』ように笑い出した。

「大したことじやないだよ……犯人に逃げられて、今頃大騒ぎし
てるんだろうに。　おい、知ってるか？　俺は今日、パトカーか
ら脱走してやつたんだ。警官の顔面滅多打ちにしてな。スッとした
ぜ」

白慢げな少年に、顔から血の気が引くのを感じた。どうやら自分
は、思つた以上にヤバい相手に捕まつてゐるらしい。言ひ通りにし
ていないと、殺されるかもしれない。

身を縮めて見上げる圭太を氣にも留めずに、少年はナイフの刃を
なぞりながら低く笑つた。

重い空氣を破つて、携帯が鳴つた。圭太は身じろぎしたが、鳴つ
たのは少年の携帯だつた。少年はディスプレイを見て舌打ちする。
「うるさいな、クソババアが」

二十回近くコールして、携帯は静かになつた。少年は息をつくと、
今度は自分からどこかへかけ始めた。

「ああ、俺だけど、今どこだ？　分かつた、もうすぐ着くんだな。
じゃあこっちも準備しとくよ。ああ、分かつて、好きにしなよ。
車は、マンションの裏の駐車場に停めといて。じゃあな」

携帯の電源を切つてポケットに放り込むと、少年はディパックを
背負い、短い筒のようなものを数本、そしてガムテープを掴んで立
ち上がつた。

「さてと。　そろそろか」

呟いて、少年はにやりと唇を歪め、圭太を見下ろした。息を呑む
彼をリビングに置き去りに、筒の内一本のキャップを外して、リビ
ングに放り込む。筒から噴き出した煙に圭太が咳き込むと、少年は
嘲るように言い残した。

「遠慮はいらないぜ。大声で叫べよ、助けて欲しけりやな」
玄関のドアが音をたてて閉まる。煙から逃れようと、圭太は文字通り転がるように、リビングから脱出した。

「……た、助けてくれ！ 誰か――！」
彼が掠れた声で叫んだ瞬間。

火災報知機のベルが、けたたましく響き渡った。

「……火事！？」

立ち上がりかける那々を抑え、斎は立ち上がった。
「待つって。僕が見てくる」

玄関のドアを細く開けて、廊下の様子を窺う。特に変わった様子はなかつた。エレベーターの方から、諸角が走つて来るのが見えた。

「諸角さん、この火事本物ですか？」

「分からん。だが、このまま部屋に閉じこもつてるわけにもいかんだろう。一応避難だ」

「分かりました」

室内の少女たちに呼びかける。

「とりあえず、一旦外に避難しよう。もし本当だつたらいけないから。一応、貴重品だけは持ち出してね」

「あ、はい！」

どうしたものかと顔を見合わせていた彼女たちは、指示を与えられたとたんに飛び上がるよう立上がつた。それぞれ財布だの携帯だのを掴み、廊下に出てくる。

「諸角さん、先に行つてください。僕は後ろを」

「分かつた」

少女二人を挟む形で、階段を足早に下りて行つた。他の住人たちは、本人たちやマンションを警護している警官が何とかしてくれる

だろう。

五階まで下りてきた時、薄く漂う煙に直美が声をあげた。

「やだ！ ホントに火事！？」

「落ち着いて。とにかく外へ！」

彼女を押しやつて、再び階段を下り始める。下へ行くにつれ、人の姿が多くなった。エントランスには人が溢れ、前の道には早くも野次馬が集まり始めていた。警官たちが声を張り上げて、住人の誘導や野次馬の整理に当たっていた。

警官の誘導で、マンション裏手の駐車場に向かつた。建物から薄く煙が立ち昇っているのを見て、住人たちがざわめいた。

「やだ、ウチの階からも煙が出てる！」

「ちょっと、ウチんとこは大丈夫なの？」

鋭い声をあげる母親に、子供が不安そうにまとわりつく。斎は周囲を見回した。ここでは人が多すぎる。誰が紛れ込んでいても、少し離れてしまえば分からぬ。

同じことを諸角も考えたようで、少女たちを呼び寄せた。

「離れないように。どこに奴がいるか分からない」

「は、はい」

那々たちが肯いた瞬間、それは起こつた。

人込みの中で突如、けたたましい破裂音と共に、爆竹が炸裂した。そして、噴き上がる煙。逃げ惑う人々に巻き込まれて、少女たちがわずかに引き離された。

「きやあ！」

人に押されて、直美が転びかける。だが、那々が助けに入るより早く、直美は誰かにぶつかって転ぶのを免れていた。

「あ、どうも……」

見上げて、直美は凍りつく。

西脇哲治が、そこにいた。

彼はパークーのポケットから、ナイフを握った手を引き出し、素早く直美の首筋に宛がつた。

「ついて来い。声をあげるな。もちろん、君も一緒にだよ」

穏やかな声が、かえって怖かった。那々はぐくりと喉を鳴らす。

彼は本気だ。少しでも逆らえば、直美を傷つける。

ぎくしゃくと歩き始めた那々を満足そうに見つめ、哲治は直美を引きずるように駐車場の出入口の方へ向かう。白の、大きなウイングをつけた車が、出入口近くに停まっているのが見えた。

「あれに乗るんだ」

哲治が直美を連れて車に向かい、那々もそれに続いた。祈るよう

に、胸中で叫んだ。

助けて！ おねがい、！

哲治がドアに手をかける。もうだめだ！

その時、ジヤカツ、と硬質な音がした。

「ストップ」

涼やかな声。呪縛が解けたように、那々は振り返った。斎が、そこに立っている。シグザウエルP226を、その手に構えて。「気づくの遅れてごめん。さ、ナイフ捨てて、その子を離して。それ以上やると、ほんとに後戻りできなくなるよ」

後半は哲治に向けられている。今や彼の方が、呪縛にかかつたよう

に動きを止めていた。

「こっちへ。下がって」

斎が那々を呼ぶ声に、哲治は我に返ったようにわめき始めた。

「だめだ！ 彼女も一緒に来るんだ、こいつが死んでもいいのか！」

？ おまえこそ、銃を捨てるよ！

「僕が銃を捨てたって、君はその子を離す気なんかないでしょ？ それに、君がナイフを引こうとする瞬間に、僕は引鉄を引ける。ナイフより、銃弾の方が速いよ」

哲治がびっくりと震えた。斎の声は冷えている。取り押さえられた

時の、あの眼を思い出しても、哲治は無意識に後ずさった。

その時 車のウインドウが開いたのだ。同時に、背筋を冷たい

ものが走って、斎はとっさに那々に飛びつき、押し倒すように地面

に伏せた。

瞬間、車内から発砲された。弾丸は斎たちの頭上を切り裂き、遠いアスファルトにめり込む。

(トカレフ!)

斎は那々を引っ張つて、手近な車の陰に転がり込んだ。弾速とちらりと見えた形からして、車内の人物が持っているのはトカレフだ。秒速500メートルの高速弾は車もあつさり撃ち抜くが、車のエンジンブロックは意外と遮蔽物として優秀なのである。

斎たちが車の陰に隠れた隙に、哲治は直美を車の後部座席に引きずり込んでいた。ドアが閉まるか閉まらないかの内に、車がタイヤを鳴かせて急発進した。

「直美！」

叫ぶ那々の隣で、斎がP226を撃つた。駐車場の出入口でハンドルを切ったのに完璧に合わせて、左前輪を撃ち抜く。だが、運転手は見事に車を立て直して、街の中に消えていった。

斎はセーフティをかけて銃をしまつと、駆けつけて来た警官たちに叫んだ。

「田黒ナンバーの白のインテグラ、緊急手配お願いします！早く！」

一時間ほどすると、マンションの周囲は落ち着きを取り戻した。現在は、マンションの出入口で警官が警備に当たっていた。西脇哲治が現場に舞い戻る可能性は低いが、万一を考えて警官が配置されている。

車の前輪を狙つたわずかな間に、斎は車のナンバーを頭に叩き込んでいた。それをもとに緊急手配がなされ、パートカーが駆け回っている。もちろん諸角もそれに加わっていた。自分にも責任があるからと那々は強く同行を希望し、斎もそれに同調したが、さすがに民間人を同行させるわけにはいかないと拒否された。

仕方なく、車を確保したら連絡を入れてもらうことを条件に、二人はマンションに残つた。

「……天瀬さん、お店、いいんですか？」

黙りこくつていた那々が、ぽつりと口を開いた。斎は微笑する。

「うん、今日は臨時休業」

「……やっぱり、事件のせいですか？」

「そうだね。でもそれは、君のせいじゃないよ

「けど、あんなこと頼まなきや」

「那々ちゃん」

柔らかい声に、顔を上げる。初めて、名前を呼ばれた。

「そんなこと言つてたら、何もかも那々ちゃんのせいになる。西脇

哲治が暴走したのも、直美ちゃんがさらわれたのも」

「……その、通りじやないですか？」

「違うよ」

あつさりと言い切つて、斎は那々を見つめる。那々は息を呑んだ。

鋭くないのに、目をそらせない。

「彼の暴走は、彼が責任を負うべきものだ。直美ちゃんのことでは、君だって守られるべき立場だった。なのに危険な目に遭わせたんだ。むしろ、僕たちの方に責任があると思つよ」

「それは……！」

違う、と言いかけて、那々は口をつぐんだ。つこさつき、斎が彼女に言つたことと同じだ。

彼も悔いでいる。直美を守れなかつたことを。

「でも、ここでこうして動けないでいる。情けないな」

自嘲氣味に呟いて、斎は窓から外を見下ろす。辺りはすっかり夕闇に染まって、ライトのきらめく夜景に変わりつつあった。

その時、玄関のドアが開く音がした。

「那々？ いるの？ お客さん来てるみたいね」

母の由里が帰つて来たのだ。玄関の見慣れない靴に眉をひそめながら入つて来た彼女は、リビングの斎の姿を見て立ち止まつた。

「すみません、お邪魔します」

「どうも……」

会釈した斎に背きを返しながら、由里は斎を見つめる。那々が慌てて間に入つた。

「あ、あのね、この人天瀬さんつていつて、その、知り合いなの」「天瀬斎です。 お嬢さんがストーカーに狙われてるの、ご存知ですかね？」

「ええ……手紙がよく来て」

「その相手が、とうとう行動を起こしました。マンションで火事騒ぎを偽装して、彼女に近づこうとしたんです。その前にも喫茶店で刃物振り回してるような相手なんで、心配になつて様子見に来ました」

「じゃあ、警察の方？」

「いえ、刑事じゃないんですけど。こないだ、一回お会いしましたよね？ ペニーハウス の前で起きた強盗犯の発砲事件の時に。覚えてらつしゃらないかもしだせませんけど」

「あら、あの時の？」

由里が目を見張る。あの時は期せずして五年前の担当刑事に会つたことが印象的で、そういえば助けに入つてくれたという相手には礼もそこそこになつてしまつた。

「まあ、ごめんなさいね。あの時は動転してて」

「いえ、当たり前ですよ、あんなこと何度もあるわけじゃないし。で、あの時の刑事さん……ていつか今もう警部なんんですけど、知り合いなんです、僕」

「まあそこの。あら、ごめんなさいね、いつまでも立ち話じや何だから、お掛けになつたら？」

「いえ、お構いなく」

そう返した時、斎の携帯が鳴つた。ディスプレイを見ると、相手は諸角だ。

「ちょっと失礼します」

急いで廊下に出て、通話ボタンを押した。

「天瀬です」

『ああ、俺だ。手配車両を押された』

喜ばしい内容のはずだが、諸角の声には霸気がない。それで、大体の事情は察した。

「いなかつたんですか」

『車には、一人しか乗つてなかつた。そいつが言うには、知り合いで頼まれて車を交換したそうだ。友人から携帯に電話があつて、車がパンクしたが、急ぐんで車をしばらく貸してくれつつて頼まれたらしい。ちょうど近くにいたし、暇だからつてんで頼みを聞いたそつだ』

「そうですか」

斎は軽く息をついた。予想していなかつた結果ではない。だがむしろ、こちらに限つてはそちらの方がまだ、動くチャンスが残されていることも確かだつた。

「諸角さん、車の中に銃は？ 運転手が同一人物なら、トカレフを

持つてゐるはずです

『なかつた』

「なら、その車の運転手は多分無関係ですね。乗員」と入れ替わつたんだと思ひます」

『西脇哲治に渡した可能性は』

「ありません。少なくとも僕なら、扱いに不慣れな薬物中毒の学生に銃は渡しません」

『なるほど、確かに』

電話の向こうで、諸角がため息をついた。

「諸角さん、もう一ついいですか。手配車両を押されたのはどうですか？」

『代々木のタイヤショップだ。おまえが撃ち抜いた左前輪を、修理しに寄つたらしい』

「そうですか、分かりました」

少し考えて、付け加える。

「諸角さん、マンションの警備を強化してもらえるよう、所轄署に頼めませんか？ 外からの侵入もですけど、内側から脱け出されることもないように」

『あのお嬢ちゃんか？』

「責任を感じて、思い詰めてます。必要だと思つたら、やりかねません」

小さい子供を庇つて大男に立ち向かつた、五年前のようだ。思い出して苦笑した。無茶などには、変わつていよいよだ。

『分かつた、何とか頼めるだろ？ おまえも無茶はするなよ』

『はい、ありがとうござります』

電話を切つて携帯をしまつと、斎は星海家に戻つた。

「少年が逃走に使つた車を押さえたそうです。まだ捕まつてないようですが、遠からず捕まるでしょうし、警察の方からマンションの警備に人を増やしてくれるみたいですから。あまり長居するのも迷惑なんで、そろそろ失礼します」

「わざわざ」「めんなさいね」

「いえ、それじゃ。何か進展あつたら、諸角さんから連絡来る

と思うから、こっちにも電話入れるね」

那々に向き直ると、気丈に肯かれた。

「……お願いします」

「じゃあ、気をつけて。おやすみなさい」

マンションを出ると、通りに出てタクシーを捕まえた。今は歩いて帰る時間も惜しい。こういう時は、交通手段を持つていなければ悔やまれた。バイクくらいは持った方がいいかも知れないと思いつつ、タクシーに乗り込んで ペニーハウス の住所を告げる。

西脇哲治と直美の居場所の見当がついたような気がした。
車が見つかった代々木は渋谷区だ。だが多分、彼らは渋谷にない。斎はそう断定した。

あの車は、衆目に晒されている。特徴を覚えられた可能性のある、目立つ車を他人に貸して、匿したのだ。いつ乗り換えたかは知らないが、おそらく渋谷には向かっていない。

ならどこへ行つたのかと問われれば、思いつく地名は一つしかなかつた。

彼らは新宿に戻つている。

ある意味賭けだが、西脇哲治がどこから薬を手に入れていたか、考えてみた。学生の彼が、そうそう遠くまで薬のために出かけていたとは思えない。薬を流していたのは、近くにいる人物だ。だとしたら、彼らのホームグラウンドは新宿。手配の裏をかいて、戻つた可能性は低くない。

もちろん、全然別の方向に行つた可能性もあるが、具体的に地名が思い浮かぶのが新宿しかなかつた。

探し出したい。一刻も早く。

那々が無茶なことをやらかす前に、決着をつけてしまひたかった。斎はじっと、前方の闇を見つめた。ペニーハウス までの道が、ひどく遠く思えた。

連れて来られたのは、どこかのクラブのような店だった。

途中で車を乗り換えて新宿に逆戻りし、いわゆる歓楽街の中の小さな雑居ビルの前で、哲治たちは車を降りた。後部座席から、ぐつたりした直美を抱えるように降ろす。騒がれないようにと、薬品で眠らせたのだ。

車を裏手の路地に置いて、運転していた少年が戻つて來た。ベルトに挿したトカレフに向けられた、哲治の怯えるような視線に気づくと、歯を剥くようにしてにやりと笑つた。

「いいだろ。意外と安いんだぜ」

「で、でも、さつきは……彼女に当たつたら、どうするつもりだったのさ？」

「当たんなかつたんだからいいだる。それより、一緒にいた野郎、あいつ何者なんだ？ 刑事か？」

「喫茶店のウエイターだよ」

「はあ！？ 何でウエイターが拳銃持つてんだよ！？」

「そんなこと知るかよ。 あいつ、普通じゃない。化物だ」

あの眼を思い出し、哲治は吐き捨てた。

「まあそんなことより、女運ぶの手伝えよ。奥に部屋があんだよ」

二人で直美を左右から支えるようにして、地下一階にある店内に連れ込んだ。けばけばしいネオンの下で、呼び込みをしていた少し年下の少年が興味深そうに見上げてきた。

「何すか、その女？」

「新しいオモチャだ」

「へえ！」

少年が唇を歪める。

「新しいの入つたって言つてたつすよね。試すんすか？」

「当たり前だろ」

少年にドアを開けさせて、一人は中に入る。きらきら光るライトが、哲治の目を射た。中には何人かの少年少女がいて、耳をつんざくようなBGMをものともせずに騒いでいる。彼らの物珍しそうな視線を受けながら、一人は奥に入り、小部屋の一つに直美を運び込んだ。ソファに寝かせる。

「さて、と」

少年はサイドテーブルの引き出しから小さなボトルとケースを取り出した。ケースの中には、小さな注射器が数本セットされている。針のキャップを外し、ボトルの中の液体を注射器に吸い上げると直美の腕を掴んだ。腕の内側、血管に沿つようになして注射器の針を刺し、ピストンを押し込む。直美が軽く身じろぎした。

「へへ、後は起きてからのお楽しみだな」

それまで店で騒いでくる、と言い残して、少年は小部屋を出て行こうとする。哲治は慌てて呼びとめた。

「ねえ、薬　　ヴァンパイア・キス　はどうなってんだよ？」

「あ？　あー、あれか」

少年は一旦店に消え、袋に入れた錠剤を持って来た。

「いくら持つてんだ？」

哲治が札を渡すと、少年はにやりとして、袋の三分の一ほどを出して寄越した。

「安くなつただろ？　欲しけりやもつと強いのもあつからよ、いつでも言えよ」

「……ああ」

哲治は　ヴァンパイア・キス　をポケットに詰め込んだ。

少年が残りを持って店の方へ出て行く。残された哲治は直美を見ていたが、ふと思いついた考えに顔を綻ばせた。

この女にはまだ、使い道があるじゃないか。

哲治は直美の服を探り、彼女の携帯を取り出した。

不意に響いた着メロに、那々はびっくりと身を竦ませた。

「電話？」

「メール」

急いで携帯を出し、新着のメールを開く。とたんに、目を見開いた。

【友達を無事に返して欲しければ、新宿のクラブ カトラス に来ること。もちろん一人で、誰にも秘密で。待ってるよ】

とつさに、携帯を閉じた。

「どうしたの？ 何か変なメール？」

「……ただの広告メール」

母には言えない。那々は携帯をしまい、外を見下ろした。暗くてよく見えないが、多分下には警官がいるのだろう。もちろん那々をガードしてくれているのだが、今はかえってこちらの動きを封じることになった。

那々は少し考えて、口を開いた。

「あたし、今日スペゲティ食べたい」

「ええ？ いきなり言わないでよ、もう買い物済ませちゃったわよ」「いいじゃん、もつかい行こうよ。今日は何か色々あつたしさ、気晴らししたい

「まったくもう……大体、ストーカーがまだ逃げてるんでしょ？」

「もうすぐ捕まると思うって、天瀬さん言ってたじゃない。ねえ、

行こうよ

「しようがないわね」

外出着のままだった由里が、ため息をついてバッグを取り上げた。支度をして家を出た時、またメールが入った。

【 カトラス は新宿歌舞伎町X-X-X-X番地、Fビル地下一階】

歌舞伎町は、ここからそう遠くない。那々は携帯を握り締めた。

メールは直美の携帯から入っている。西脇哲治は、間違いない直美と一緒にいるはずだ。

ヒントランスに下りると、警官に呼び止められた。

「お出かけですか」

「ええ、ちょっと買い物に」

「そうですか、お気をつけて」

拍子抜けするほどあつさり、通してくれた。やはり母親連れだからだろうか。おそらく、手配の車が見つかることも聞いているのだろう。

那々たちは、近くのスーパーに向かった。

店内は、さほど混んでいない。那々はトイレに行くと言つて由里と別れると、そのまま別の出入口に向かつた。辺りをざつと見回して、バス停に走る。路線名を確認、とにかく歌舞伎町方面へ行くバスを探した。

やつと見つけたバスは、発車寸前だつた。慌てて駆け出し、乗り込む。

バスが動き出し、スーパーが遠ざかるのを見た瞬間、かすかに足が震えた。

このまま一人で行けば、何をされるか分からぬ。もちろん怖かつた。だが、行かなければ直美が危険に晒されるのは間違いない。これ以上、彼女に危害が加えられるのを放つてはおけなかつた。

おねがいします。あたしに力を貸してください。

“彼”に、祈つた。

歌舞伎町に着いたのは、七時半を回つていた。きらびやかなネオン、行き交う人々。自分がひどく浮いている気がして、那々は落ち着かなくなる。

不意に、横から声をかけられた。

「ねえ、あんた」

まさか自分が呼ばれたとは思わず、歩き出そうとしたら、肩を掴まれた。

「あんたよ、あんた」

「え？」

振り返ると、徹底的に脱色されたストレートヘアの、切れ長の目の少女が立っていた。

(……あ。こないだの……)

学校の廊下で直美とぶつかった少女だと、思い当たった。だが目の前の少女は確かに、学校よりこの雑踏の中にいる方が似合つてゐるようと思えた。冷めて大人びた雰囲気が、この街に合つている。

「あんた、こんなところで何してんの」

彼女は那々を見下ろすように訊いてきた。実際、もともとの身長とヒールのあるミコールのせいだ、彼女は那々より十センチほど高い。何となく気圧されるように、答えた。

「……用があるから。カトラス っていうクラブに

「 カトラス ？」

少女が眉をひそめた。

「あの薬物中毒御用達って悪名高い」と? あんたそんなことに何の用があんのよ?」

「そんなの、そっちに関係ないでしょ。あたし急ぐの! 早く行かなきゃ直美が

言いかけて、口をつぐむ。言つたら現実になりそうで、恐い。

だが、少女の表情がはつきりと変わつた。

「……それ、あんたの友達よね

「それが、何!?

これ以上、ここで時間を取りたくないなつた。しかしその瞬間、足を止めざるを得なくなる。

「もしかして、西脇つて一年、関わってる?」

那々は目を見張つた。

「知ってるの!?

「……やつぱりか。あの馬鹿……!」

少女は苦々しげに吐き捨てて、髪をかき上げた。息をついて、話し始めた。

「……こないだ、どつかに電話かけてんの聞いた。後で本人にカマ

かけたら、クスリやつてるって口滑らせたからや。 つたぐ、あ

の野郎、きつちり釘刺しといたのに

少女の目が鋭くなつた。那々は息を呑む。同年代の少女で、ここまで鋭い眼ができる者を、彼女は知らなかつた。

「……あんたも、そのクラブに行く気よね

「そうよ」

「なら、あたしも付き合おつか

今度こそ、那々は目を見張つた。

「……何で？」

「いくら何でも唐突だ。だが少女は、あっさりと返した。

「あんたは知らないだらうけど、あたしはあんたに借りがあるから。いつ返せるかって、思つてた」

「借り……？」

那々はしげしげと目の前の少女を見つめたが、いくら考えても見覚えのない顔だった。少女は肩をすくめる。

「だから、あんたは知らないって。 それにあんた、何も持たずに来てるでしょ」「何も、つて……」

「こひいうモンよ

少女はポケットからひょいと、バタフライナイフを取り出して展開する。那々はぎょっとした。

「ちょっと、こんなところでそんなもの……！」

「誰も見てやしないって。 あたしいくつか持つてるけど、一つ貸そうか？」

那々は少し考え、肯いた。

「借りとく

「いい度胸

少女がにやりとした。

借りたナイフは、刃渡り十センチ足らずの、小さなシースナイフ

だった。それを目立たないよう制服に仕込んでもらひながら、那々

はふと尋ねた。

「そういえば、名前聞いてなかつた。あたし、星海那々」

「……桜庭まひる」

そう言つて、彼女はナイフを仕込み終えると、慣れた様子でポケットからメンソールの煙草を取り出し、火を点けた。

「こつちもやつてみる?」

「それはいい」

かぶりを振つて、少女と並んで歩き始める。彼女はよほどこの辺りに詳しいのだろう、足どりに迷いはなかつた。ほどなく、目的のクラブ カトラス に辿り着いた。少年が、気だるそうに地下への階段のところに立つてゐる。

「あたしは、ちょっと遅れて入つてく。その方が都合いいんじょ？」

「うん」

歩き出しかけて、ふと思いついた。振り返る。

「……そういえば、わざわざ言つてた“借り”って何？ 気になるから、教えて」

まひるはちょっと笑つて、ばぐらかした。

「無事に戻つて来れたらね」

「……縁起でもないこと言わないでよ」

ぼやいて、那々は階段を下りていつた。いぶかしげな少年に、待ち合わせだと告げる。ドア越しにも、大音量のBGMが聞こえてきた。

た。

那々は一つ深呼吸して、ドアを開けた。

ペニーハウス では、意外な来客が窓を待つていた。

「……一圓さん？」

「よひ、おひわ」

当たり前のようにカウンターでコーヒーを飲んでいた千秋に、斎はため息をついた。今日は臨時休業、しかも今は営業時間外なのだが。

「いや、こないだからここのコーヒー飲みたくてさ。半時間前まで仕事で、やつと引けてここ来たら、臨時休業だぜ？ 諦め切れなかつたんで、マスターに頼んで入れてもらつた」

「ウチ、七時までですよ？」

「いいだら、固いこと言いつこなし」

いけしゃあしゃあと言い切つた千秋に、諦めた。頭を切り換えて、立河に向き直る。

「叔父さん、悪いけど車出して。行きたいことがあるんだ。急ぎで」「急ぎ？」

「もの凄く。もしかしたら、女の子一人の身の安全がかかってる」「何だそりや」

立河が目を丸くした。

今までの経緯をざつと話すと、立河は難しい顔になつた。

「そりゃおまえ、じうじやつて探す氣だ。新宿ってだけじゃ、探しようがないだろ？」「

「でも、放つておいたら事態はどんどん悪くなる。僕にも責任があるんだ、じつとしてられない」

「おい」

不意に、千秋が二人の間に割り込んだ。飲み終えたカップを立河に渡し、にやりと笑う。

「俺が付き合つてやるつか？」「

「一圓さんが？」

きょとんと、斎は千秋を見つめた。

「俺、明日久々にオフなんだ。歌舞伎町にいい店あってさ、飲みに行こうと思ってたんだよな」

「……付き合えっていうんじゃないですよね。一圓さんも知つてるでしょ、僕、救いようのない下戸ですよ」

「いやそこ威張られてもアレなんだが……前に聞いたことがあってな。歌舞伎町にドラッグ撒いてるクラブがあるから、そこには行かない方がいいってよ。話聞いてたらドラッグ絡みらしいし、可能性あんじやねえ?」

「それ本当ですか?」

「おうよ。歌舞伎町ホステス歴二十年のママから聞いたんだから、間違いないぜ」

なぜか胸を張る千秋。斎は即決した。

「お願いします」

「よし来た」

キー ホルダーを取り上げ、千秋は財布を取り出しかけた。

「マスター、いくらだっけ

「僕が持ちます」

斎が半ば押しやるように急かした。ラッキー、と呟いて、千秋は駐車場へ向かつた。

千秋の車はシルバーのフェアアレディ、クーペタイプだ。乗り込もうとした斎は、助手席に鎮座しますライフルケースに気づいた。ああ、と思い出したようだ。千秋がケースを引っ張り出してよこす。「これは?」

「ああ、ついでに、こいつの修理、頼もうと思つてさ。だからマスターに頼んで粘つてたんだぜ。一階は持ち込み禁止だろ? だからおまえが戻つてからと思ってたんだが」

「シグはこないだ調整したから……レミントン?」

彼の銃はすべて斎が面倒を見ている。ケースの中を覗いて呟いたが、次の瞬間薄明かりに照らし出されたレミントンM700の全貌に、悲鳴じみた声をあげた。

「何ですかこれ、何やつたらこんなに見事に壊れるんですか?!

ああもう、サプレッサーぐぢゃぐぢゃだし、スコープも壊れてるし

! まさかバレルまでいかれてないですよね!?

「こやあ、ポイントで張つてたら向こうの奴に襲われてな。とつさ

にそいつで……」

「……殴ったんですね、撃つんじゃなくて」

思わず、こめかみを押された。レミントンは狙撃銃なのだ、纖細なのだ。動かないボルトを蹴飛ばすくらいならともかく、断じて装備品アセサリが吹っ飛ぶまで相手を叩きのめすためのものではない。自分がP226を鈍器代わりにしようとしていたのは棚上げして、斎は再びため息をついた。

「……スコープとサプレッサー交換、サイト修正、その他諸々調整つてところですね。中のメンテは?」

「しない」

「じゃあ、メンテ込みで。しばらく入院になりますよ、これ」

「おう、頼む」

けりりとした顔の千秋に、白々とした視線を向けて、ケースを閉じる。下手に落としてこれ以上壊すのは避けたい。

とにかく、緊急事態なので原則を無視し、ケースを店に放り込む。下の工房に持つて行つてもう立河に頼んで、斎たちはばたばたと車に乗り込み、スタートした。千秋の運転は危なげなく、フェアレディは滑るように街を駆け抜けていく。

歌舞伎町に入った時、斎の携帯が鳴った。ディスプレイに映し出された名前は諸角だ。進展があつたのかと、電話に出た。

「はい、天瀬で」

とたんに、諸角の怒鳴り声が飛び出してきた。

『おい！ おまえ、今どこにいる！？』

「どこって」

とつさに返答できず口もると、電話口で諸角がまた怒鳴った。

『あの嬢ちゃんが消えたぞ！ おまえ、一緒にいたんじゃないなかつたのか！？』

「消えた？」

思わず携帯を握り直した。

『母親と買い物に出た時に、母親の田を盗んでどうした、だとよ。

おまえ、あれからどうした?』

「ペニーハウスに戻りました。気になることがあって」

『気になること?』

「面の割れてる車を匿にして、彼らがどこへ向かつたかです。那々ちゃんが自分から姿を消したとなると、僕の追つてる線の可能性が上がりました」

『何? おまえ、今何してる?』

諸角の声が低くなつた。怒鳴り声よりもこちらの方がなぜか怖い。気持ち、携帯を耳から離した。

「歌舞伎町にいます。那々ちゃんのマンショングからも、そう遠くはありません。それに、西脇哲治にドリラッジを流してた相手も、新宿にいるはずですから。ちょうど、ドリラッジを流してるクラブの噂を聞いたんで、そこに向かつてるといふです」

『待て、こり! 無茶なことするな、ここは警察だ』

「任せろつて諸角さんが思つてると同じくらい、僕も自分で動きたいんです。僕だってあの場にいた、でもみすみす西脇哲治を逃がして、直美ちゃんをさらわれた。腹立つてるとんですよ、彼にも、自分にも。ここまで来て放り出せるもんじゃない。申し訳ないですけど、止められても無視します」

電話の向こうで、諸角が息を呑んだ気配が伝わってきた。ややあつて、聞こえた声は半分諦め混じりだった。

『……馬鹿野郎。まったく、そこまで言つならもう何も言わん。だが、俺に手錠かけられるような真似はするなよ』

「分かりました」

そんな場合ではないのに、笑いが浮かんだ。

携帯をしまつと、千秋がもの聞いたげに見やつてきた。

『ずいぶん入れ込んでんな、この件に?』

「この件っていうか、あの子たちを、何とか助けたくて。大事ですから、十代の頃つて。十代で経験したことって、下手したら一生残っちゃいますから。こんなことを、あの子たちに残したくない

んです」

自分は、もう手遅れだ。だから、せめて彼女たちだけは。
そう思つてゐると、頭を小突かれた。

「年寄りみてえなこと言つたな。おまえだって、大差ないだろ？が」「二十歳の壁は、高いですよ」

そう言つと、千秋に笑われた。

「成人してようと若い奴は若いし、高校生のガキでも枯れてる奴は枯れてるんだよ。他人のために走り回れるなんざ、若いつて証拠だ」フェアレディがスピードを落とし、有料駐車場へと入つていく。車をどうするのかと訊いたら、代行を頼むと返された。

「それで、そのクラブの名前つて、分かります？」

「ああ、確か」

思い出すように視線をさまよわせ、千秋は答えた。

「カトラス だつたつけな」

通された小部屋で、那々は西脇哲治と対峙していた。初めて顔を合わせた時は別人のような、荒んで鋭い雰囲気に、わずかに息を呑む。あるいはこれが、彼の本性だったのだろうか。

「やあ。来てくれたね」

「……直美は？」

思つた以上に、固い声になつた。哲治は肩をすくめて、顎をしゃくつた。

「隣」

急いで部屋を出て、隣のドアを開けた。

ソファに身を縮めるようにして座り込んだ、細い後姿が見えた。

「直美！」

駆け寄つた那々の顔が、振り向いた直美の様子に凍りついた。目が、どことなく虚ろだつた。身体が小さく震えている。那々の

姿を認めた瞬間、縋るよつに抱きついてきた。

「直美……どしたの？ 寒いの？」

「……ちが……よく、分かんない……止まらないの」

かちかちと歯を鳴らし始める。腕を回された背中に爪を立てられて、思わず声をあげた。

「ちょ、直美、痛いって……」

「あ、あたし、ねえ、どうなっちゃってるの？ ねえ、那々あ

「直美、落ち着いて。ね、落ち着こう？」

直美の腕を引き剥がした拍子に、白い肌に浮かんだ赤い点が見えた。腕の内側、ちょうど血管の真上にぽつんと浮かんだそれ。

理解した瞬間、息が止まった。頬が熱くなる。頭に血が昇るといふのはこういうことを言つたのだと、意識の片隅でぼんやりと考えた。手が自然に、腰の後ろに仕込んだシースナイフに伸びていた。ブラウスで隠していた柄を握り締め、鞘から引き抜く。綺麗に磨き上げられた刃に映る自分は、落ち着いた顔をしていた。だが中身は、煉獄のようにどろどろした怒りを抱いていた。

まひるに感謝する。ありがとう。あたしにこれを貸してくれて。

……あいつだけは。

「ひつ……！」

刃物に怯える直美に気づいて、急いで背中に回して隠した。

「大丈夫。 あいつ、あたしがやつつけてくるからね」

殴り飛ばすなどと、甘つちよろいことを言つていた頃が、ひどく遠く思える。あの時はまさか、事態がここまで悪化するなど思つてもいなかつた。

直美をソファに座らせて、那々は部屋を出た。そして思い出す。今まで関わった人たち。“彼”。それから、

(天瀬さん)

自分のせいで、事件に巻き込んでしまった人。なのに一言も責めずに、自分を守ってくれたやさしい人。自分が姿を消したことを探れば、きっと心配するに違いない。

でも、これは那々の戦いだから。

これ以上、彼を巻き込んではいけない。

ドアの前に立つて、目を閉じた。思い出す。“彼”的顔、斎の顔。彼らの強さを、少しでも分けてもらえる気がするから。

大丈夫。やれる。

目を開いて、ドアを開けた。

哲治は那々の顔を見て、にいと笑った。

「どうだつた？ 友達の様子は」

「……何で、直美に薬なんか」

「仕方ないだろ？ ヴアンパイア・キス は仲間を増やさないと手に入らないんだ」

「仲間？」

「そう。吸血鬼が血を吸つて同族を増やすって、聞いたことあるだろ？ あれと一緒にさ。だから ヴアンパイア・キス。うまいネーミングだろ。それでさ、俺も誰か一人、仲間に引き込まなきゃならなかつたんだ。できるだけ裕福な家の、子供をね。あいつはいつも君を厄介なことに引っ張り込むから、引き込むならあいつにしようつて決めてたんだ」

「何で！ 何でそうなるの！？」

「だつてそうだろ！？ あいつが君をあの店に連れてかなきや、強盗の巻き添えを食うことなんてなかつた！ あの女があの店員と君を取り持とうとしてる！ あいつはいつだつて、俺と君にマイナスなことしかしちゃいないんだ！ 排除して何が悪い！？」

叫びに、息を呑んだ。目が眩む。ああそうか、こいつの世界には、もう彼自身と那々の、二人しか必要ないのだ。

「……天瀬さんの、言つたとおり」

『自分にしか通用しないような理屈を人に押し付けて、うまく行かなきや全部他人とか社会とかのせいにするようなのが、一番嫌いなんだ』

斎の言葉は、正しかつた。

「そ、そいつが何だつてんだ！」

「あなたの理屈は、あんたにしか通用しない。あたしは、あなたの理屈には従わない」

背中に回していた右手を前に出す。ナイフの刃が、室内の照明にきらめいた。哲治が、信じられないように目を見開いた。

「な……何で？ 何で俺を？」

「あんたが、あたしの周りの人を傷つけたから！ 直美も、天瀬さんも！ けどあたしのせいでもある、だから、あたしが決着つけるの！」

握ったナイフは震えなかつた。頭が、ひどくクリアになる。自分のすべきこと。それは、目の前のこいつにこのナイフを突き立てること。

傷つく痛みを、教えてやる。

哲治が後ずさつて逃げようとした。だが狭い部屋の中だ、すぐに逃げ場を失つて立ち尽くした。

「お、俺は……俺は君のことを、ずっと

「あんたなんかっ！」

那々がナイフを振り上げた。哲治が頭を抱えてうずくまる。

その時 銃声が轟いた。

カトラスへ続く階段の降り口で、斎は足を止めた。

どう上に見積もつても十四、五歳の少年が、斎の行く手を遮る形で立っていたのだ。上田遣いが癖になつてゐるのか、三田眼氣味の目で斎を見上げる。

「オーラン、何すか?」

「噂、聞いてきたんだ。ここに来れば、薬、手に入るって。知り合いも、来てるはずなんだけど。女の子」「知らないですねえ」

にやにや笑いながら、少年はどく気配がない。どうやら通す気はなさうだと、内心でため息をつき、さっさと実力行使に切り替えた。

「ちょっと、中見せてね」

「おい、何勝手に」

脇をすり抜けようとした斎の腕を、少年が掴みかける。瞬間、その手を絡め取るように掴み返し、流れるような動きで少年の肘の関節を逆に極めた。

「え」

「動かないで。逆関節極めてるから、ちょっとの力で腕折れるよ。

ここ通るけど、いいよね?」

口調と表情は穏やかだが、行動は思い切り物騒だ。少年は抗いようもなく、ここと肯いた。

「ありがと」

少年を解放してドアを開けると、とたんに音と光の洪水が斎を襲つた。うるさいといつの通り越してほとんど凶器のレベルのBG Mがなり立て、ミラー ボールのきらめきが目を射る。斎はざつと

店の中を見回したが、那々らしき姿は見つからなかつた。外れか。

だが、店の奥の方に、ドアがあるのを見つけた。地下に裏口でもないだろうから、その奥にまだ部屋があるのだろう。

そのドアの方へ歩き出した時、何かが斎の左腕に絡みついた。見下ろすと、髪を染め、派手な化粧をした少女が、左腕に抱きつくようにしがみついている。

「お兄さん、新顔の人？」

そう言つて斎を見上げた彼女は、ライトに照らし出されたその容貌に一瞬目を見張り、次いで歓声をあげた。

「やだあ、すつごいカツコいじやん！　お兄さんも薬やつてるの？　あたし、いいの持つてるけど、やつてみない？」

彼女はポケットから、粉末の入つた小さな袋を取り出した。

「ヴァンパイア・キスつて、今流行つてるでしょ？　これ、その強いやつ。すつごい効くんだよ。身体がすつごい軽くなつて、頭も冴えて」

そう言つて、少女は含み笑いをした。顔を近づけて、甘い声を出す。

「……エッチの時にも、使えるんだつてや？」

そういうことか。斎はため息をついた。

「悪いけど、今人搜してるんだ。高校生くらいの女の子と、神経質そうな顔の男の子。君、見てない？」

「いいじやん、そんなの。それよかさ、もっと楽しいことしよ？　みんなあたしのこと、イイつて言つよ～。お兄さんみたいな美形なら、あたし大サービスしちゃう」

すり寄つてくる少女を、やんわりと押しのけた。

「ごめん、今ほんと急いでる。それに、大事なことなんだ。見てたら、教えてくれないかな」

「……男の方は知らないけど、見たことない女の子なら一人来たわよ。髪これつくらい短い女の子と、あそこにはいる金髪の子」

少女の指差す先には、確かにほとんど金髪の長い髪の少女が、テ

一ブルについて煙草をふかしているところだった。隣には同年代ほどの少年が座り、しきりに彼女を口説いているようだ。しかし斎は彼女よりも、短い髪の女の子というのが引っかかった。那々はショートボブだ。

「その、髪の短い方の女の子って、どこに行つたか分かる?」

「あそこ。奥に部屋があんの。あたしも、入ったことはないんだけど」

少女は、奥のドアを指差す。そして、斎を見上げて口を尖らせた。「あんな野暮つたい子より、あたしの方がいいと思つけどお」

「だから」

その時、テーブルの方でざわめきが起つた。

「てめえこの女、何しやがる!」

見ると、あの金髪の少女がグラスを片手に立ち上がつていた。隣の少年が頭からずぶ濡れになつてゐるところを見ると、グラスの飲み物をぶちまけられたらしい。

「何つて、あんたが入れたもん返しただけよ」

少女はグラスを置いて、煙を吐き出した。

「悪いけど、あたし薬入りのソルティードッグなんて飲む気ないから。薬混ぜんなら、もっと溶けやすいもんに混ぜたら? 一発でバレバレだつての」

「てめ、この――！」

椅子を蹴つて殴りかかるうとした少年を、しかし少女は軽くいなした。

「……踏んだ場数が違つてのよ、チンピラ崩れが」

空振りした拳の内側にするりと入り込み、少年の股間を蹴り上げたのだ。遠慮も躊躇も一切ない、会心の一撃だつた。

周囲のざわめきが、剣呑な空氣を孕み始める。割つて入るかどつか斎が一瞬迷つた時、BGMすら圧して、一発の銃声が轟いた。

「……おまえら、うつぜーよ。せつかくのお楽しみの時間なんだぜ?

もつとクールに行こうぜ、クールによ」

一人の少年が、天井に向けて一発ぶつ放したのだ。彼は注目を集めて満足したように銃を下ろした。その銃を見て、斎は目を細める。

トカレフ。

「あんたさあ、新顔だからこの店のルール知らねえみてーだけど。この店は、新入りがでかい顔できるとこじゃねーんだよ。新顔はおとなしく常連の言うこと聞くんだよ、OK?」

少年が銃口で、少女の胸をつついた。すると少女は、それを押しのけて吐き捨てたのだ。

「そっちこそ、マナーくらいわきまえな。このセクハラ男」

……少年の顔が引きつった。

「てめ……」

少年が銃を構えた。少女も素早くバタフライナイフを展開、少年に突きつける。一触即発の空気。

「はい、そこまで」

不意にそこに、穏やかな声が割って入った。斎は銃とナイフをそれぞれ片手で掴み、相手からそらす。

「そんな危ないもの、室内で振り回すもんじゃないよ。怪我人が出たらどうするの」

「てめえ、あん時の……！」

少年は斎の顔を見て呻いた。愛車のインテグラの左前輪を潰した奴だ。

「やつぱり、君が運転手か。車を乗り換えて、新宿に戻つてたんだね」

「くそ、こいつ……！」

少年は引鉄を引こうとして焦つた。いつの間にか、撃鉄と銃の隙間に斎が指を突っ込んでいたのだ。撃鉄からの衝撃が伝わらなければ、弾も発射されない。

その隙に、斎の足が少年の腹を打つていた。

「ぐつ……！」

吹つ飛び少年から銃をもぎ取つて弾を抜くと、斎はトカレフを手

早く分解した。専用工具を使わず分解できるフィールドストリッピング。そこに分解すると、組み立て直して撃てないように、スプリングとハンマー部を没収しておく。あつという間に銃を解体してしまった斎を、少女が興味深そうに見やつた。

「あんた、一体何者?」

「喫茶店のウェイター兼業の銃工^{ガンスマスター}」

「ふうん」

あまり真っ当とはいえない職業紹介を、少女はあっさり受け流した。

「じゃ、僕まだ用があるから」

奥のドアへ向かう斎に、少年少女たちは怯えたように道を開ける。ドアを開けようとした時、少女が追いついてきた。

「あたしも行く。この先に用があるから」

「じゃあ、一緒に行こうか」

微笑して、ドアを開けた。

銃声に気を取られて、狙いがそれた。振り下ろした切っ先は哲治の髪を何本か宙に舞わせただけで、本人は転がるように刃の軌道から逃れていた。

哲治はよろけながら立ち上がり、ドアへと向かおうとする。那々はそれを追つた。

(　逃がさない)

振り回した刃が、哲治の服の裾に引っかかり、そのままスパツと切り裂いた。哲治が青ざめるが、那々も目を見張る。大した切れ味だ。

那々はナイフを握り直し、哲治に追いすがつた。

「あんたは　あんただけは、絶対！」

「ひいっ……！」

もつれる足で、哲治は何とかドアに辿り着いた。ほとんどじりじ開けるようにしてドアを開け、廊下に駆け出す。

まずい！

那々は慌てて後を追った。隣の部屋には、直美がいる！だが、一歩遅かった。哲治はソファに座っていた直美を立たせると、引きずるようにサイドテーブルのところに連れて行つた。手探りで引き出しの中をかき回し、注射器を取り出して針の先を直美的喉に突きつける。

「……さあ、ナイフを捨てるんだ。でなきやこいつ刺すぞ！」

ぎりぎりと、常軌を逸した目つきでわめく。那々は本氣で刺したくなつたが、直美を傷つけるわけにはいかない。睨みつけながら、ナイフを田の前の床に投げ出した。

「こっちへよ」せ

指示に従い、ナイフを蹴つて哲治の方へ滑らせた。

それを満足げに見て、哲治はねつとりした視線で那々を見つめる。「じゃあ次は、こっちに来るんだ。そう、おとなしく。友達が怪我するのは嫌だろ？」

「……ホント、最っ低、あんたって！」

毒づいて、那々はゆっくりと足を進める。ナイフの横を通り過ぎ、哲治の眼前まで。にやにやしていった哲治は、不意に注射器と直美を突き放すと、那々に掴みかかってきた。

「やだ！ 放してよ！」

伸ばされた腕に、那々は爪を立てる。もみ合いになつたが、やはり腕力では男の哲治の方が勝つた。押されてバランスを崩し、那々が尻餅をついたところへそのままのしかかつてきた。

「これで やつと、君は俺のところに……！」

「冗談じゃないわよ！」

暴れたが、上にのしかかられた体勢では不利だ。押さえつけられた。

これまでか、そう思つた時、ドアの方から銃声が響いた。

(……え？)

哲治の動きがぴたりと止まる。次の瞬間、その重みが那々の上から消えた。引き剥がされて、殴り飛ばされた哲治は、吹っ飛んでサイドテーブルを巻き込んで倒れる。それを呆然と見ながら、身体を起こしかけた那々に、手が差し出された。

「立てる？」

やせしい声。恐る恐る顔を上げた。

「……天瀬、さん」

「大丈夫？ 怪我ない？」

「はい、あの……」

立ち上がりかけて、よろけた。だがすかさず、肩に手を回されて支えられる。

「迎えに来たよ。 頑張ったね」

穏やかな微笑と言葉に、張り詰めていたものがぶつんと切れた。

熱いものがこみ上げてきて、ぼろぼろと涙がこぼれ出す。

「直美が……薬、打たれて……！」

「……そう」

一瞬厳しい顔になつた斎は、だがすぐに安心させるような微笑を浮かべて、肩に回した腕に力をこめた。

「大丈夫。諸角さんにも僕が歌舞伎町にいることは伝えてあるから。もうじき来てくれる。そしたら、すぐ病院に連れてつてもらおう」

「……はい」

肯いて、涙拭く。斎は那々から離れると、哲治の方を見やつた。すぐ近くの床の上には注射器が粉々になつていい。威嚇のつもりだったが、床に転がる注射器を見て、つい撃つてしまつた。許せなかつたのだ。こんなもので、人を操るうとしたことが。

そんなことをしても、人の心など手に入りはしないのに。

「……とにかく、外に出よう」

那々を促して、斎はドアの方に向き直つた。

斎と共に部屋に飛び込んだまひるが、直美を抱えるようにして連

れてきた。

「桜庭さんも、ありがと」

「まひるでいい。それよか、あたしが貸したナイフは？」

「あ、そこに」

振り返った那々は息を呑んだ。同時に、斎の胸を、冷たいものが撫でていく感覚が走る。ペインレス・ドッグ だつた頃の名残。とつをに那々を庇うように腕を回し、左手を伸ばす。

起き上がった哲治が、ナイフに飛びついて拾い上げていた。がたがたと震えながら、斎たちに向かってくる。斎の伸ばした左手が、間一髪哲治の手首を掴んでナイフを止めた。

「……これ以上、何をするつもり？」

冷えた声に、哲治のみならず那々すらびくりと身をすくめた。ぎり、と音すら聞こえそうなほど強く戒められた手首に、哲治が呻いてナイフを取り落とす。那々ははつとして、それを拾つた。

「これ以上人を傷つけて、何が手に入ると思つてる！？」

それはかつて、斎自身もぶつかつた命題。教団に牙を剥く相手をすべて倒すことで、養父の傍という安らぎが手に入ると思い込んでいた。そうやって戦う自分自身に、養父が心を痛めていたとも知らずに。

数え切れない人間を傷つけて得たと思つたものは、あの瞬間に儚く消えた。ただの幻。いつかは自分に返つてくる、たくさんの傷。それを知つたから、斎は今、こうしてここにいる。

斎の一喝に、動きを止めた哲治を突き放した。よろけて後ずさる彼を一警して、重い息をつく。彼がこれからどうなるのか、斎には分からぬ。だが、人を傷つけ、薬に溺れたつけを払うことになるのは確かだつた。

その時、ドアの方から押し殺した足音が聞こえた。そして、かすかに金属の触れ合う音。斎が何よりも聞き慣れれた 銃のスライドを引く音。

「伏せろー！」

叫んで、手近な那々の身体を抱き込み、床にダイブした。次の瞬間、トカレフ弾が斎の左上腕部を抉るように掠めていき、立ち尽くしていた哲治の右脇腹をも傷つけた。

「天瀬さん！」

「大丈夫、掠つただけ」

トカレフ弾ほどの高速弾になると、掠つただけでもきついが、それでも直撃を免れただけマシだ。秒速五百メートルの弾に直撃されれば、間違いなくただでは済まない。

大きな血管が傷ついたのか、出血はあるが、例によつて痛みはない。こういう時は、痛みを感じない体质に感謝する。

室内に、銃を持った少年たちがなだれ込んでくる。手に手に持つたトカレフに、斎がため息をついて天井を仰いだ。

「……失敗したな」

彼らに流れていた銃は、一丁だけではなかつたのだ。それを確認しなかつたのは痛恨のミスだつた。

リーダー格らしいあの少年が、トカレフを構えて唇を歪めた。

「ずいぶん好き勝手してくれたじゃねえか。立てよ」

合計六つの銃口が、こちらに狙いを定めている。斎はゆっくりと立ち上がつた。

四人は、部屋の中に一列に並ばれた。一人で立つていられず、まひるに支えられるように立つ直美を見て、少年は何かを思いついたようににやりと笑つた。斎に銃口を向ける。

「そういうやおまえ、俺の銃をお釈迦にしてくれたよなあ。礼をさせてもらうか」

彼は倒れて呻いている哲治を跨ぎ越して、サイドテーブルに近付いた。引き出しから注射器とボトルを取り出し、中の液体を注射器に吸い上げると、こぼれないようにキャップをして斎に投げてよこ

した。

「……これは？」

「デッドライン。ヴァンパイア・キスなんか田じやねえくらいい強力なやつだ。それを、自分に打て」「そんなん……！」

反発しかけた那々に、銃口が向けられる。

「ただ撃つだけじゃ、面白くねえからなあ。とことんまでぶつ壊れてもらうぜ、俺の銃みてえによお！」

少年は哄笑した。ぎらぎらした目の輝きは、完全に常軌を逸している。逆らえば、彼はためらいなく撃つだろ？ おれりぐ、少女たちの誰かを。

これ以上、彼女たちを傷つけるわけにはいかない。

「……分かつた」

「天瀬さん！」

那々が何度もかぶりを振る。その彼女を、宥めるように微笑んだ。

「大丈夫、だよ」

ゆつくりとキャップを外し、袖を捲り上げて針の先を肌に押し当てる。傷からはまだ血が流れて、腕に筋を描いていた。それを避け、肘の内側辺りに浮き出して見える静脈に合わせて針を刺し、注射器を寝かせるようにして差し込む。少年たちに見えるよう、腕を少し下げた。

「……彼を、放つておく気なの？」

言われて、少年は一瞬誰のことか分からなかつたようだが、哲治を一警して鼻を鳴らした。

「ふん、あんな使えねえ奴、どうでもいい」

「……そう」

咳きに、那々は斎を振り仰ぐ。感情を削ぎ落としたような無表情。低い声に、ぞつとした。自分に向けられたものではないと、分かつてはいるのだが、それでも身がすくんだ。

それは、普段は優しく穏やかな彼が間違いなく持っている、刃の

ような冷徹な一面。

斎はピストンを押し込み、注射器を引き抜くと足下に叩きつけて踏みにじった。

「……これで満足？」

「ははっ、こいつ、マジで打ちやがったぜ！　おい、押さえとけ」少年たちの内一人が、銃をベルトに挿し込み、斎の腕を背中にねじ上げる形で押さえ込んだ。

「一、三分くらいで効いてくるぜ。安心しな、打ってからしばらくは天国だぜ、後は地獄だけなあ！」

那々は少年を睨みつけた。何もできないことが、この上なく悔しかつた。

その時、斎が呟いた。

「地獄、か

「あ？」

「そんなもの、もう見飽きた」

瞬間、斎の右腕を押さえていた少年が悲鳴をあげた。斎の踵が、少年の脛に叩き込まれていた。拘束が緩んだところで腕を振り払い、わずかに身を沈めて反動をつけた後鳩尾に肘を打ち込む。突くというより抉り込むといった方が正しいような強烈な一撃に、少年は声をあげるより早く意識を飛ばして吹っ飛んだ。

唖然としてそれを見ていた左側の少年に、右腰から抜き放ったP226の一撃を見舞う。グリップで額を殴られて、少年はよろけた。すかさず足払いをかけ、バランスを崩して倒れかける少年の腰から、トカレフを引き抜いた。元々安全装置は考えていない銃だ。装弾を瞬時に確かめ、左手に構える。右手には愛用のP226の一丁拳銃。右と左、9ミリと7・62ミリの牙が、同時に撃ち出された。

横飛びに床にダイブしながらの、しかも片手ホールドとは思えないような正確な射撃だった。加えて、見惚れるような早撃ち。ほんの数秒で四丁の銃が弾き飛ばされ宙に舞う。斎の方には、少年たちに必要以上の怪我を負わせないよう、射線をずらす余裕さえあつた。

その様子を、那々は呆然と見つめる。強い、なんてものじやない。完全に格が違う。当然のようにそれをやつてのける斎に、背筋がぞくりとした。

思い出す。やはり恐ろしいほどの銃の腕を持つ“彼”。そして、似すぎているその面影。

彼は、まさか。

視線の先で、立ち上がった斎は呑氣に首をかしげる。

「ん……トカレフ右手にした方がよかつたかな」

口径はP226の方が大きいが、トカレフの方が弾の火薬が多く、反動も強いのだ。右利きの斎にしてみれば、逆の方が確かに扱いやすかつたかもしない。まあ撃つた後で言つても仕方がないが。

常人離れ どころかもはや人間離れしたといつてもいい腕前を見せつけられて、少年たちは一気に腰が引けたようだつた。

「動かないで。弾はまだ充分残ってる」

うつすらと笑みすら浮かべて言われた言葉に、少年たちは息を呑む。穏やかな笑みに見えるのに、斬りつけられるような鋭さを感じた。

ふと少年は、思い出した。西脇哲治がこの男のことを化物だと吐き捨てたことを。

確かにその通りだ。腕に加えて、デッドライン を打つても平然としている。何よりその身にまとう空気が違う。こんな 意識を向けられるだけで身がすくむような鋭さを放つ人間を、少年は知らない。

「……化物……！」

掠れた声で放たれた言葉に、しかし斎は、あっさりと肯いたのだ。

「うん。 そうだね」

どこか、諦めたような聲音だった。

店の方から、ざわめきが伝わってきた。

「警察だ！」

その声を耳にして、斎はほっとしたように銃を下ろした。 P22

6をホルスターにしまい、トカレフも弾を抜く。

部屋になだれ込んできた刑事たちの中に、諸角の姿を見つけて声をかけた。

「早かつたですね」

「俺が教えたからな」

諸角の後ろからひょいと顔を出した千秋に、斎は目を丸くした。

「一圓さん？ 何でここに」

「いやな、馴染みの子が今日出勤かどうか訊こうと思つて携帯にかけたら、同伴頼まれちまつたんだな、これが。で、待ち合わせ場所に着いたらこの警部サンが血相変えて駆けずり回つてんのに出くわしたからさ。近くだつたし、こうして『案内したワケよ。 しかしあまえ、その分じや、俺のレミントンよか先におまえが入院した方がいいんじやねえ?』

血塗れの斎の左腕に、千秋は眉をひそめた。

「掠り傷です」

「いや、その割にや左腕凄えことになつてる気がすんだけど……」

「それより諸角さん、救急車の手配お願ひします。直美ちゃんは薬打たれてるし、西脇哲治は脇腹撃たれてます。掠つただけみたいですが、ちゃんと病院連れてかないと」

「分かった。 オイ、救急車だ！」

諸角が声を張り上げる。はつとして、那々が斎の腕を掴んだ。

「あの、天瀬さんも」

「大丈夫だよ」

「でも！」

「だつて僕、薬なんて打つてないし」

「……え？」

ぽかんとする那々に、斎は袖をまくつてみせた。針を刺した痕がぽつんと一つ、それから少し肘寄りにもう一つ。

「キャップ外す時針曲げて、そのまま刺したんだ。注射器を寝かせて刺したら、針の先が皮膚の外に出るでしょ？ そのまま薬は全部

服に吸わせて、後は針を抜くだけ。袖の長い服着てて正解だつたよ、針の先袖に隠れて見えなかつたし。向こうみんな信じ込んで油断してた

「……じゃあ、注射器壊したのは、針曲がつてたの『まかすため?』」

「そう」

ちよつとしたトリックだよ、と笑つて、斎は那々を促して歩き出そつとした。

……とたん、視界が回つた。

「……あれ?」

よひけた斎を、那々が慌てて支える。そして悲鳴じみた声をあげた。

「何これ、全然血が止まつてないじゃないですか!」

「あ……銃撃つたしね。反動で傷開いたかな……」

「この馬鹿、何が掠り傷だ、せめて止血くらいしつけ!　おい、救

急車もつー台!」

諸角の怒鳴り声を最後に、斎の意識はぱつりと切れた。

ぼんやりと開きかけた目に、飛び込んできたのは白い天井だつた。嗅ぎ慣れた、消毒薬の臭い。まだ朦朧とした意識で、ある存在を捲した。自分がこうして怪我をして帰ってきた時、いつも心配そうに覗き込み、たまに無茶をするなど叱りつけたの人。

「……父、さん……」

だが、ほとんど吐息のような斎の声に応えたのは、養父ではなかつた。

「あ、気がつきました?」

「……那々ちゃん?」

「天瀬さんあの後、いきなり倒れちゃって。貧血みたいですよ」

「ああ……止血し忘れてたもんね」

痛みを感じないせいで、たまに怪我をしていくこと自体を忘れてしまうことがある。だんだんと意識がはつきりしてきて、ベッドの上に起き上がった。

「ここ、病院？」

「はい。 傷、何針も縫つたって聞きました。痛く、ないですか？」

「それは大丈夫。僕、麻酔要らずの特異体质だから。それより、那々ちゃんの方が大丈夫？ 何か、暗い顔してる」

そう言われて、那々が俯いた。余計なことを言つたかと内心焦つ

た時、ぽつりと言つ。

「……ごめんなさい」

「……那々ちゃん？」

「あたしのせいで、天瀬さんひどい怪我して。それに直美も、まひるも、あたしの巻き添え食つて危ない目に遭つたんだって、そう思つたら」

あ、泣きそう。

そう思つたが、どうするべきかが分からぬ。泣きそうな女の子を慰めた経験なんてないのだ。だから、自分がしてもうつて一番安心した方法を取ることにした。

ふわり、と頭に手が置かれて、那々はきょとんと顔を上げた。猫でも撫でるような優しい手つきで、頭を撫でられる。

「あ、あの、天瀬さん？」

「……僕って、あんまり家族に縁がなくてさ。慰めたり慰められたりつていうのも、あんまりないんだけど。いつももらつと、何か落ち着いて。子供扱いすぎるかな？」

ふるふると、かぶりを振る。確かに、落ち着いた。

「それに、一つ言わせてもらつと、今回のこと我が那々ちゃんのせいだなんて、誰も思わないよ。僕の腕だって、撃つたの那々ちゃんじゃないでしょ？ 直美ちゃんたちのことだってそうだよ。那々ちゃんは、何でもかんでも自分のせいにしそぎ」

「でも、彼氏のふりなんて頼まなきゃ、天瀬さんは」「それこそ、見当違い」

ぽん、と軽く頭を叩いて、斎は那々から手を離す。

「僕だつて、これがベストの方法だと思つてOKしたんだ。結果を、那々ちゃんに押しつけるつもりなんてない。」 僕は今まで、色々選び間違つてきたけど、今回だけは良かったと思つ。間違つたなんて思わない

教団時代、間違つた道を選び続けてきた中で、彼女を助けたことだけは、唯一誇れる選択だつた。

だから、守りたかつた。

「……僕は、君を守れたかな」

「はい」

「良かつた」

しつかりと肯かれ、微笑む。そして、那々の額を軽く小突いた。

「けど、一人でのクラブに乗り込んだのは行き過ぎ。せめて、連絡は欲しかったかな」

「ごめんなさい……けど、誰にも言つなつて指示されてたから間に合つたから、良かつたけど」

気が、緩んだのかもしれない。

「あの時から、変わつてない。相変わらずだ」

「……え？」

目を見開く那々に、斎ははつとした。視線をそらす。

安堵に、つい口が滑つてしまつた。自分を呪いたい気分になる。その一言だけは、口にしてはいけなかつたのに。

だが、那々の反応は予想外のものだつた。彼女は一瞬眼を見開いたものの、すぐに微笑して、提案したのだ。

「天瀬さん。 屋上、行きませんか？」

屋上には、誰もいなかつた。物干し竿が何かのオブジェのように立ち並び、眼下には窓から漏れる明かり。

並んでフェンスに寄りかかり、夜景を見ていたが、唐突に那々が口を開いた。

「……あたし、好きな人がいます」

彼女の真意が分からず、その横顔を見やる。彼女は続けた。

「その人は、五年前に一回会つただけの人で……その後すぐ、いなくなっちゃつた人で。名前も何も知らない人。でもあたし、その人のこと好きです。もう一度、会いたい」

「……那々ちゃん」

「その人が教団で裏の仕事してた人だつて、後で知りました。だから、何か犯罪に関わつてたかもしれないし もしかしたら、誰か殺してるかもしれない。でもあたし、どうしてもその人のこと嫌いになれない。だつて、優しかつたもの」

恐くないかと、那々を気遣つてくれた“彼”。銃撃に晒され、恐怖に震えていてもおかしくなかつた状況で、あれほど安心した氣分でいられたのは“彼”が傍にいたから。

那々は斎を見つめる。重なる面影。それを打ち消そつとは、もう思わなかつた。

こうして正面切つて尋ねることが正しいのかどうか、那々には分からぬ。だが、これ以外に取れる方法もない。

前に進むために。

那々は、口を開いた。

「……天瀬さんつて、“誰”なんですか？」

まっすぐ見つめてくる彼女の視線を受け止めきれずに、斎はわずかに視線をそらした。

彼女はもう気づいている。斎が ペインレス・ドッグ であることに。

しかし、それを認めるることは、大切な人に累が及ぶことでもあるのだ。

立河敏也。“叔父”であり、かつてペインレス・ドッグを救つた人間。彼だけは、どうしても守りたい。

だが、那々が今懸命に、自分の心に決着をつけようとしていることも分かる。彼女をいつまでも、過去の幻に捕らえられたままにしておきたくなかった。

それでは、自分と同じだから。

斎は、ゆっくりと視線を戻して口を開いた。

「……ちょっと、昔話をしたいんだ」

「昔話？」

「そう。昔どこかにいた、一匹の犬の話」

那々が息を呑んだ。ややあって、肯く。

「……聞かせてください」

斎は過去を見るように、夜景を見やつて話し始めた。

「……昔、あるところに、一匹の子犬がいた。けど、その母親は子犬が嫌いで、いつもいじめて怪我をさせてた」

物心つく前から それこそ記憶が遡れる限りの以前から、彼は日常的に、母親から虐待を受けていた。繰り返される暴行は、やがて子供の精神を食い破つた。与えられる痛みから逃れるため、彼の本能は痛覚を手放すことを選択したのだ。

そして彼は五歳の時、わずかな金と引き換えに教団に売られた。

「ある日、その子犬を引き取りたって人がやって来た。子犬はそれでも、母親から離れたくなくて、行くのを嫌がつた。でも結局、母親は子犬を捨てた。いらないって」

捨てないで欲しいと哀願した声は、届かなかつた。母親は彼を愛してなどいなかつたから。

彼女がその後どうなつたのかは知らない。もともとお世辞にもまともな生活をしているとはいえた女だ。もしかしたら、もう死んでいるかもしれない。どうでもよかつた。

教団に連れて行かれた彼はそこで、人を殺す方法を叩き込まれた。銃やナイフの扱い、爆発物の知識。最初から、そのために教団は彼を買ったのだ。痛みを感じない彼は、教団にとつて都合の良い兵士だった。戦闘訓練で、教団に所属した十年余りの年月の内、半分以上が費やされた。

「新しい飼い主のところに連れて行かれた子犬は、最初誰にも懐かなかつた。でも、たつた一人世話をしてくれる人にはだんだん懐くようになつた。その内その人をお父さんだつて思うようになつて、その人と一緒にいるために訓練も頑張つたし、たくさん戦つた」初めて人を手にかけたのは、十一歳の時だつた。教団の裏側の構成員が、金で教団の機密を横流ししようとした、その制裁だつた。彼の牙は、十二歳の子供の手には余る、ブローニング・ハイパワー。彼の放つた何発目かの銃弾が、相手の眉間に貫いた。

死体は解体され、焼却と薬品とで完全に処分された。骨のひとつけらすら、残らなかつた。ダークサイドの構成員は、多くが金で買ひ集められた国内外の子供で、教団から出ることなく戦闘技術を叩き込まれ、育てられる。戸籍もなく、例え死んだところで、記録一つ残らないのだ。

いつか自分もああなるのかと、ぼんやりと思つた。

それを皮切りに、彼　ペインレス・ドッグ　は戦闘要員として、本格的に教団の非合法活動の一端を担うことになつた。密輸の警備を始め、薬物のシェアを巡る暴力団との抗争に参加したこともある。教祖の護衛として、凶器を持つて襲いかかつてきた人間を撃ち倒したこと、一度や二度ではない。

だがこれらの事件は、証拠も彼ら自身の存在もひつくるめて、すべてが闇に葬られた。

そんな教団時代の中で、唯一のやさしい記憶。
サイレント・ファング
静かなる牙。

……おとうさん。

教団での、彼の養父。そして、戦闘技術を叩き込んだ師匠。

彼の傍にいたくて、銃を取つた。自分を虫けらを見るような目で見下ろし、殴つたり蹴つたりすることでしか触れてくることのなかつた母親とは違う、そつと頭を撫でてくれる無骨な手。それが嬉しくて、もう一度欲しくて、戦いの中に身を投げた。

痛みなどない身体を、いたわるようにさすってくれた。痛くないのにと答えれば、辛そうに顔をしかめた。あれが“痛い”顔なのかもしれないと、その時思つた。

「……でも、子犬が大きくなつた頃、そのお父さんが死んじゃつたんだ」

彼は自分の養い子であり生徒でもあつた ペインレス・ドッグを、教団に盲従するただの戦闘人形に育てようとはしなかつた。人として失つてはいけないもの その確固とした一線を、養い子に教え込もうとした。例えそれが教義との間で歪みを生み出そうとも、この子供が“人間”であるために必要なことだと、分かつていたから。しかしその考えは教団幹部に危険視され、彼には日を追うごとに過酷な任務が言い渡されるようになる。

養父が、任務の際負つた傷が原因で死んだと聞いた時、世界が崩れるような絶望を感じた。発作的に後を追おうとした ペインレス・ドッグ を、しかし教団は力ずくでこの世に繋ぎ止めた。舌すら噛めないよう猿轡を噛ませ、厳重に拘束したのだ。

そして、ようやく回復を見せ始めた彼に、リハビリの意味合いで込めて割り当てられた任務が、誘拐されてきた子供たちの監視だつた。

昔の自分とはあまりに違う、幸福な家庭に育つた子供たち。だが今は、その家庭と引き離されて怯えている。

養父という家族を失つた自分に近しい感情を、子供たちに対して覚えた。

まだ、現実と過去との間を浮遊しているような状態だつたのだ。あの時までは。

小さな男の子を庇つた少女が殴られて倒れた時、意識が現実に引

き戻され、そのまま縛り付けられた。そして、押し寄せる記憶。ばらばらの過去が、母の拳や足が、時を越えて自分を打ち据えるように感じて。

夢中で、引金を引いていた。

そこからは、衝動に流されるままだった。業者の車を奪い、銃を撃つた。銃を撃つのはこれで最後だと、決めて。

『助けてくれるんでしょう？　あなたが』

そして、彼女に出会った。気丈に年下の子供たちを庇い、斎に無条件の信頼をくれた、彼女。出血に意識が薄れかけた自分の背中を、さすってくれた小さな手。養父の大きな手とはまったく違うのに、同じあたたかさを感じた。

自分に痛みが戻ることは、おそらくない。自分で分かっていた。それでも、あのあたたかさを思つと、胸が少し苦しくなる。もう触れてはいけないと思うから、なおさら。

痛みとは違うけれど。

未だに胸を刺し、ため息をつかせる記憶。

那々を見つめた瞳を切なげに細める。きつと情けない顔をしているのだろうと、自嘲気味に考えた。

「お父さんを亡くした犬は、飼い主のところを逃げ出した。その人のところにいた理由は、お父さんだけだったから。　これで、その犬の話はおしまい。さ、中に戻ろう」

そう長い話ではなかつたのに、身体が冷え始めていた。

階段を下りようとした時、那々がぽつりと言つた。

「天瀬さん。　その犬は今、幸せだと思いますか？」

斎はきょとんとしたが、すぐに微笑んだ。

「うん。きっと優しい人に拾われて、幸せに暮らしてると思つよ

「……そうですよね」

それを最後に、二人は言葉を交わすことなく、階段を下りていった。

立河は一人、カウンターの内側でコーヒーを淹れている。

つい十分ほど前、病院から帰ってきたばかりだった。斎が撃たれて入院したことと連絡を受けたものだから、泡を食つて病院へ駆けつけたが、当の本人はけろりとしていて拍子抜けしたものだ。出血のせいで軽い貧血を起こしており、大事を取つて一晩入院することになったというので、とりあえず戻つて来たのである。

どうやら自分が着く少し前に、起き抜けにふらふら出歩いているところを看護士に捕まつたらしく、斎はおとなしくベッドの住人とか化していた。その姿に、出会った時のことふと思いつ出す。

あの時の彼は、何かに取り憑かれてでもいたよう、元氣にがむしやらに死に向かつて歩いていた。

その頃の記憶 やつとと思い出話にできる程度に和らいだ記憶を、頭の奥から掘り起こす。

『……どうして、僕を助けたんですか』

あの時、確かに彼はそう言つたのだ。

一〇××年七月、横浜。

立河は横浜のいわゆる暗黒街で、非公認の銃工ガンスマスターを営んでいた。扱う品はもちろん、非合法の密輸銃や犯罪歴のある銃だ。特に犯罪に使われた銃は、弾丸に残つた旋条痕から足がつきやすいため、ライフリングを加工しないと決定的な証拠を残すことになる。

その日も、持ち込まれていた銃を客に引き渡し、立河は「コーヒーを淹れて一息ついた。コーヒーを淹れるのは若い頃からの趣味だ。この仕事から足を洗つたら、次はコーヒーショップでも開こうかと思つてゐるくらいである。

この界隈は、立河のような非公認・非合法な商売の人間、そしてそれを当てにしてやつてくる犯罪者たちの街だった。海外からの不法入国者や、密輸の一大中継地でもある。警察でさえおいそれとは手を出せない、関東有数の都市・横浜の闇の部分。立河自身、その闇の住人を顧客として生活している身だ。

「コーヒーを啜りながら、立河は窓の外を眺める。この街は、昼よりも夜の方が人の姿が目につくようだ。

その時、スチールのドアをノックする音がした。

「鍵は開いてる。入つてくれ」

ドアの方に声を投げ、カップを流し台に置ぐ。この店に来る客は大抵が、ノックなどという気の利いたことはしない。誰だろうかと首をかしげながら、開いたドアを見やつた立河は、次の瞬間絶句することになった。

「……姉さん、こんなところへ何しに」

ようやく押し出した声に、前触れなしに訪ねて来た姉は肩をすくめた。

「何つて、あんたが最近連絡も寄越さないから、どうしてるかと思つて来てみたのよ。ちょうど横浜へ出て来る用があつたから」

「それにしたつて……素人が来るようなところじゃないぜ、ここは」とりあえず、申し訳程度に置いてある椅子に姉を座らせ、冷蔵庫を開ける。

「何か飲むかい。 つつても、アイスコーヒーくらいしかないが」「構わないわよ」

答えながら物珍しげに、姉の光子は店舗兼住居である室内を見回した。

光子は、実業家の男性と結婚したが、その夫に先立たれた後、遺

産を相続して熱海に移り住んだ。会社の株式や土地を持つているおかげで、毎月結構な収入があり、悠々自適の毎日を送っている。銃への興味が高じて銃工になつた立河とは違い、至極穏やかな生活だ。もつとも最近では立河も、危険と隣り合わせの生活を楽しむには少々年を取つたと感じるのも事実だが。

「案外きちんととしてるのねえ。非合法なんていうから、もつとこたごたしたところかと思つてたわ」

「呑気なこと言つて……よく無事に来れたなあ。そんななりして」いかにも良家の奥様といった身なりの姉に、呆れ半分感心半分で嘆息する。口があるからといって安心はできないのがこの界隈なのだが。

「あら、普通に来れたわよ。すぐそこまで車で来たんだけど、この辺りがあんまりごちゃごちゃしてるから、分からなくなっちゃつてしまふがないから、その辺の人人に訊いちやつたわ」

「…………」

ため息をつく。どこかの組の姐さんと勘違いされたんじゃないかと一瞬頭をよぎつたが、言わない方がいいだろう。

「でも、もう銃は合法化されたんだし、あんたも非合法でやつてないで、試験でも受けて公認受けたらいじやない」

「今むら無理だろう。辞めようと思えば銃自体から手を引くしかないさ。銃を扱える人間はいくらいても足らないからな。よつぽどの理由がなきや引退もできない」

立河は自嘲気味に笑つた。彼の腕は、裏社会でも認められている。足を洗うといつても、そう簡単にはいかないだろう。下手をすれば、色々まずいことを知つているからと狙われかねない。

「それより、そつちはどうなんだ。まだ五十前なんだし、再婚でもしたら」

「そんな元氣もないわよ。親戚付き合つても面倒だし、独りが氣楽。

子供もいないし、せいぜいのんびり暮らすわよ」

「そんなこと言つてると、あつという間に還暦過ぎまうぜ」

「あんたこそ、結婚はしないの？」

「こんな商売でか？ 嫁さんだつて逃げ出しちまつよ」

肩をすくめた弟に、光子は苦笑いした。この弟の方こそ、早く身

を固めなければ瞬く間に還暦過ぎだらう。

「あんまり長居はしない方がいいぞ、この界隈は。ろくな連中がいやしないからな」

「あら…… そうなの？」

「ああ。できれば、もう来ない方がいい」

「いやだ…… 物騒なこと言つて」

「そういうところなんだよ、ここには」

そして、そういう場所を選んだのも自分なのだ。

姉を早々に送り出して、立河は息をついた。まともな生活をしている姉には、こういう界隈に足を踏み入れて欲しくはない。まあ、この街の住人は移り気だから、ほんの数十分訪れただけの闖入者のことなど話題にも上らないだろう。

それよりも、この間始末を頼まれたトカレフをどうにかしなければ。仕事の方に頭を切り替え、立河は空のグラスを持つて台所に立つた。

数日後に大きな転機が待つてゐるなど、この時は思いもしていなかつたのだ。

七月十日から十一日に口付が変わつた頃。ライフリングの加工を終えた銃を机の上に置き、立河は大きく欠伸をした。このところずっと銃にかかりきりだ。しばらく仮眠でも取ろうと、入口のドアの鍵をかけ、寝室にしている奥の部屋に向かつた。もちろん、この界隈に住む人間の用心として、護身用の銃を枕元に置くことは忘れない。

ベッドに横になつて目を閉じ、數十分ほど経つた頃だらうか。かすかな音を耳にした気がして、立河は目を開いた。ほとんど条

件反射で、枕元の銃を掴む。愛用のベレッタM92FS。残弾を確認し、静かに起き上がり、隣室の様子を窺う。

かちり、とドアノブが回った。

ドアが豪快に開け放たれると同時に、立河は床に飛び込んで転がる。次の瞬間には、頭の上を横切つた銃弾が、ベッドのマットレスにいくつもの風穴を開けていた。一瞬だけ視界をよぎったのはコルト・ガバメントだ。大口径の、ストップピングパワーに重点を置いた銃。

(本気で殺る気が)

床の上からベレッタを構え、撃つた。相手が自分を殺しに来ているのだ、手加減などしていたらやられる。相手の身体のど真ん中を狙つた。

三発の内一発は、不安定な姿勢がたたつて外れた。だが残りの一発が、相手の右胸を直撃して撃ち倒した。

相手が動かないのを確かめ、立河が立ち上がる。襲撃者の顔を見て、思わず呟いた。

「何てこつた……子供じゃないか」

襲撃者は、髪を派手な色に染めてはいるが、せいぜい十七、八の少年だった。右胸の一発がかなりの深手を負わせたらしく、動ける状態ではないようだつた。

立河はとりあえず隣室を窺い、他に仲間がないのを確かめる。入口の鍵はこじ開けられていた。ため息をついて、ひとまず机を引きずつてきて鍵代わりにして、少年のもとに戻つた。

「誰に頼まれた?」

こんな少年に恨まれる覚えはなかつた。大方、今までの顧客の誰かが金でやらせたか、組の下っ端をよこしたかのどちらかだ。下手な詮索をするなど脅されたことは星の数ほどある。あいにく、心当たりが多すぎた。

尋ねるも、少年はもはや答える力すら残っていないようだ。立河はとにかく止血を施した後、彼の服を探り、携帯を探し当てる。発

着履歴にある番号を控え、さらに身許が分かりそうなものを洗いざらい引っ張り出して床に並べる。その中に、銀行のキャッシュカードを見つけた。

トダ イツキ

がたん、と音がした。

はつと田をやると、少年の右手がまだ銃を握り、こぢらに銃口を向けている。とつたに銃口を掴んで、射線をそらした。

引鉄が引かれた。掴んだ右手に激痛が走る。撃ち出された銃弾と高温のガスが、掌を深く傷つけていた。

最後の力を使い切ったように、少年の右手が「」と落ちる。脈を診てわずかに顔を歪めた。そこには何の反応もなかつた。

殺してしまった。

立河は重い息をついて、見開いたままの少年の臉を下ろしてやる。自分の命を守るためにとはいえ、まだ年端も行かない少年の命を奪つてしまつた。何の恨みもないといふのに。

ふりりと立ち上がり、右手の傷の手当てをした。指を動かすと、引きつるような感覚がある。しばらくは もしかするとこの先生、銃を扱うことはできないかもしれないが、それでもいいと思えた。これまでにも銃を撃つたことがないわけではなかつたが、二十歳にも満たない少年を殺してしまつた経験は強烈すぎた。銃への興味も熱意もすっかり拭い去つてしまつた。

もう一度少年の方へ田をやつた時、激しくドアを叩く音が聞こえた。

「おい！ 今銃声がしなかつたか！？」

それがこの辺りに住んでいる、親しい情報屋だと思い当たつて、立河は怪我をした右手に苦労しながら机をどける。ドアを開けると、情報屋の茂木もみが転がり込んできた。

「何だ……ピンピンしてやがるじゃねえか」

殺されてるかと思ったぞ、と物騒なことを言つ彼に、苦い笑みをこぼしてかぶりを振る。

「……そうでもないや」

寝室を指し示した。

「撃つちまつた。ひどい話だ。まだ年端も行かない子供だぞ」
床に倒れた少年に、茂木は息を呑んだが、落ち着いた声で問い合わせ返す。

「ガバメント持つて乗り込んで来たんだ、撃たなきや撃たれたらうさ。正当防衛だろ?」

「慰めにはならんよ。せめて、どこから頼まれたのかだけでも知りたい。調べてもらえるか?」

「手がかりは?」

「これだ」

先ほど控えた電話番号を見せる、茂木は肯いた。

「分かった、何とか調べてみるさ。ところで、この坊主はどうするんだ。真正直に通報するわけにもいかんだりつ」

「それは……」

立河は言い淀んだ。自分が逮捕されれば、姉の立場にも影響が及びかねない。その逡巡を見抜いた茂木が息をついた。

「……この界隈じや人が一人消えたところで誰も気にしゃしない。

始末屋に連絡しよう

「いや。自分でやる」

かぶりを振つて、立河は少年の身体をベッドのシーツでくるんだ。せめて、自分の手で始末をつけるべきだと思った。

茂木に手伝つてもらい、少年の遺体を車のトランクに乗せる。目立たないよう上にタオルや毛布を被せた。夜半過ぎのため、人目はなかつた。部屋に残つた血痕や穴だらけのマットレスを始末し、番号調べを茂木に任せた立河は車に乗り込んだ。できるだけ人目につかない時間帯に目的地に着きたい。

当てはあつた。以前通つたことのある、人通りのほとんどない海沿いの山の中。

まだ夜の闇が色濃い中、立河は街を出た。

幸い見咎められることもなく、夜明け前に目的地に着いた。明るくなる前にことを済ませたい。立河はアクセルを踏んで、山道を登つていった。

かなり奥まで車で入ることができた。限界まで車を突っ込ませると、トランクから少年の遺体を抱き出し、木立の中に分け入った。しばらく行ったところに一旦遺体を横たえ、車に取つて返してシャベルを持つてくる。シャベルを地面に突き立て、穴を掘り進めた。ざくざくと土を掘り返す音がやけに響くような気がした。気がつくと、空がすでに白み始めている。シャベルを置き、穴の底にシーツにくるんだ遺体を横たえ、土を被せた。

すべてが終わつた頃には、すっかり夜は明けていた。どつと疲れが襲ってきて、立河はシャベルを抱えて車に戻つた。そういえば、仮眠すら満足に取れていないので。シートを倒し、引き込まれるように眠りについた。

……目を覚ますと、もう昼を過ぎて日が傾き始めた頃だった。携帯で時間を確認しようとして、茂木からの着信に気づく。急いで口一日バツクした。

「俺だ。すまん、つい寝ちまつてな。それで、何か分かつたのか？」

『ああ、おまえ以前に、松嶋組の組員の依頼で、銃を扱つたことがあつたろ？』

その名には聞き覚えがあつた。関東で強い勢力を持つ 白真会系列の組だ。暴力団関係からもずいぶん仕事を受けていたので、その中の一人だろう。

『そいつは、一ヶ月くらい前の銀行強盗で、行員を一人撃つた銃だつたらしい。その強盗、組員が組長に話を通さず、勝手にやらせたらしいんだ。その話に勘付かれちゃ困るつてことだつたらしいぜ』

『よく調べたな、そんなやばいネタ』

『もう始末がついたんだよ。ほら、おまえが控えた電話番号。の中に、その組員の携帯の番号が混ざつてな。それを足掛かりに組の方に問い合わせてみた。そしたら上がえらい勢いで問い合わせたら

しくて、奴さんもたまらず白状してな、そつから先はどうなつたのか知らんが、この件はこっちで始末つけたからって、組の方から連絡がきた。まあ、何とか収めてくれつてこつたる『う』

「そつか……いや、片付いたんならいい。こっちももう終わつた。

今から戻る」

懸案が一つ片付いて、息をつきながらキーを差し込んだ。疲れも少しだが取れた。狭い山道を、慎重にバックで戻つて行く。

少し戻つたところで、分岐に差しかかつた。右へ行けば、もと来た道を戻ることになる。だが気分を変えたくなつて、左の道へ行くことにした。おそらく山を越える道だろう。

山道を進んでいく内に、日がどんどん傾いてくる。沈みきる前に山道を抜けたいと思いながら、ライトを点けた。

不意にライトの中に白っぽいものが浮かび上がつて、ブレーキを踏んだ。近づいてみると、バンが道を塞ぐよう停まつている。もう少しで山道を抜けられるのだが、これでは進めない。近くに運転者がいるのかと見回した立河は、バンの向い側を覗いて息を呑んだ。

少年が一人、服を血に染めて倒れていた。

反射的に自分が射殺した少年のことを思い浮かべ、慌てて駆け寄つた。脈を診ると、弱くはあるが打つていて。急いでトランクからタオルを取つてきて止血した。見たところ、この少年もここに来てそう時間は経っていない。すぐに処置をすれば、助かる可能性がある。いや、助けてやりたかった。少年を射殺した罪悪感の裏返しと分かつていたが、それでも。

何か手掛かりはないかとバンを調べようとして、眉を寄せ。明らかに弾痕と分かる傷が、あちこちについていた。よく見ればフロントやリアウインドウも割れ、シートにも血と思しき染みが広がっている。

(何者なんだ、この子供……)

とにかく放つておけば死ぬのは目に見えているので、その身体を

余った毛布にくるんで後部座席に乗せた。バンは処置に困つたが、とりあえず脇の茂みの中に突つ込ませて道を開け、車をスタートさせた。

山道を抜け、県道に入る。なぜかやたらと検問が敷かれていて冷や冷やしたが、片つ端から脇道に突つ込んで何とかすり抜けた。この時ほどGPSに感謝したことはない。検問のせいでの少し時間を食つて、横浜に戻つたのはもう日が暮れた後だった。

出迎えた茂木は、後部座席の少年に目を丸くした。

「おい、死体じやなかつたのか」

「別人だ。まだ生きてる。医者に診せなきゃならんから、連絡していくくれ」

「闇医者のジイさんか？」

「ああ」

本人の寿命の方が気になる「老体だが、こんな面倒そうな患者を診せるのに普通の病院へ転がり込むわけにもいかない。立河は再び車を走らせて、闇医者の神崎かんざきが居を構える雑居ビルへと向かつた。

神崎は、面倒臭そうな顔で立河たちを出迎えた。立河に事情を説明させ、一通り少年の容態を診て、傷の処置を済ませると顔をしかめる。

「また面倒そうな坊主を拾つて来たもんだ。こりや間違いなく銃の傷だぞ」

「そんなことは分かつてる。俺だつて銃工だ」

「ほ、そうじゃつたな。しかしこの坊主、おまえさんが見つけるまで、ろくに止血もしてなかつたらしいぞ。ずいぶん出血してるようだが、まあ体力はありそつだから何とか保つじやろ」

その言葉に、ほつと胸を撫で下ろした。しかし皮肉な巡り合わせだ。少年を射殺した自分が、同じように銃で撃たれた少年を救うとは。

「まあとりあえず、これ以上できることは何もない。坊主のことは置いておいて、おまえさんのその右手もどうにかせんとな」

「ああ……」

右手の傷は、穴を掘つたりしたせいでもひどく痛み出していた。さつと診て、神崎が唸る。

「……いや、細かい作業は当分無理だぞ。銃工はしばらく休業だな」「……いや、もう銃工は辞めよつたと思つてゐる」

神崎が器用に片眉を上げた。

「懺悔かい」

「……いや、それもあるが、もう銃を扱う気が起きなくなつちまつたんだ。もう前と同じようには打ち込めんさ。それくらいならいつそ、すっぱり辞めちまつのも手かと思つてな」

「ふん……まあいいや、診断書くらこは書いてやる」

神崎が鼻を鳴らした。つまり、立河が銃工としてはもう再起不能だという噂を流すのに、一役買つてくれるといつことだ。思わず笑みが浮かんだ。

「世話になつたな、ジイさんにも」

「そう思つんなら治療費は弾めよ」

相変わらずの物言いだ。立河は苦笑するに止めて立ち上がる。

「色々準備もあるからな。また来る」

そう言つて歩き出そつとした時だつた。

「……ん」

呻くような声をあげて、少年が身じろぎしたのだ。

「気がついたかい。大したもんだ。目が覚めるような状態じゃないはずなんだが」

半分くらい本気で感心しているような聲音で、神崎が声をかけた。少年はゆっくりと視線を巡らせる。

「……僕は、生きて……？」

「危うく死にかけとつたが、何とか生きとるよ。ほれ、そこにいる奴が命の恩人だ」

神崎の言葉に、少年が立河を見た。そこには奇妙に、疲れたような色があった。何かを、諦めたような

それだけで、立河はこの少年が望んでいたものを悟ってしまった。

「……ど、して……」

掠れた声で、少年は絞り出すように言葉を紡いだ。

「……どうして、僕を助けたんですか……？」

立河は、わずかに肩をすくめた。

「……気紛れだ」

そう言つと、立河は振り返らずに部屋を出た。
少年の声は、追いかけてこなかつた。

自宅兼店舗である雑居ビルに戻ると、立河はテレビを点けた。検問の多さが気になつたのだ。あちこちチャンネルを回した挙句、映し出されたニュースでは、ちょうどビ速報が流れているところだつた。

【行方不明の子供たち、無事保護】

【児童誘拐に、宗教法人関与か】

表示されたテロップに目が引かれた。キヤスターがニュースを読み上げる。新興宗教法人の信者を名乗る少年が、行方不明だつた子供たちを連れて警察署に出頭したという。聞いている内に、次々に疑問が解けていくのを、立河は感じた。少年が重傷を負つたまま姿を消したというところまで聞くに至つて、確信する。

自分が拾つた、あの少年だ。

(それで、あの怪我か)

そしてそれだけ思い切つた真似をしたということは、あの少年は死をも覚悟していたのだろう。いや、むしろそれを望んでいたはずだ。だから、助かったことに落胆した。

そこまで考えて、立河はやり切れない気分になった。

(……冗談じゃない)

自分が撃つた少年のことが、頭をよぎる。おそらくは死にたくないなかつたはずだ。それに引き替え、助かつたのに生きたがらない

あの少年。

自分が言えた義理ではないが、不条理だ。

立河は、テレビを消して立ち上がった。

再び車に乗り込み、キーを捻る。今朝のように思えるが、辿った道をもう一度、あの山に向かつた。途中、大きめのスーパーでビニールシートとロックアイスを買い込み、山道に車を乗り入れた。

あのバンは、変わらずそこにあつた。人通りのなさが幸いしたのだろう、見つかっただけではない。立河はとりあえず自分の車を奥に停めておいて、バンの運転席のドアを開けた。キーはついたままだ。座席にビニールシートを敷き、ハンドルを握つてバンを県道に出す。数十メートルほど進むとヒターンして一旦停め、他の車が通る気配がないのを確かめると、ハンドルをわずかに斜めに調整した。前方には緩いカーブ。ガードレールの向こうは崖だ。

立河はバンを降り、アクセルの上に穴を開けたロックアイスの袋を押し込んだ。ずれることを確認し、シートを回収してギアを入れ、サイドブレーキを解除した。

バンはアクセルを全開にし、徐々にスピードを上げて県道をやや斜めにそれ、緩いカーブに突っ込んだ。衝突音。ガードレールを突き破る。金属がこすれ合い、ねじれる凄まじい音がしたかと思うと、次の瞬間バンは崖下に消えていた。大きな水音は、しかし波の音にほとんどが紛れた。

壊れたガードレールの切れ間から見下ろすと、沈んでいくバンの後部がちらりと見えた。

立河は息をついて、その場を離れた。おそらくこれで警察も、あの少年の生存の可能性は低いと見るだろう。ロックアイスは溶けて消えるし、座席に痕跡も残していないはずだ。指紋や袋は水に洗われて消える。トリックがばれる可能性は低い。何より、都合のいい解釈が目の前に転がつていれば、人はついそちらに目を奪われてしまうものだ つまり、少年は海に落ちて死んだ、と。

自分でも、何がしたいのかはつきりとは分からなかつた。ただ、あの少年をこのまま死なせるわけにはいかないと、半ば意地のようなものを感じていた。

再び横浜に戻つたのは夜半だつた。かなりハードな一日だつたが、不思議と疲れは覚えていない。多分翌日辺りにどつと反動が来るだろうと自嘲氣味に思いながら、立河は自宅に戻つた。机の引き出しに突っ込んでいた品々を、一つ一つ並べ始める。

あの襲撃してきた少年の遺品だつた。血痕やマジックテレスはともかく、これはすぐに処分する気になれず、とりあえず置いておいたのだ。

それらを眺めながら、立河の頭にある考えが組み上がりつつあつた。

五日ほどで、仕事の方はあらかた片がついた。茂木や神崎が噂をばら撒いてくれたらしく、銃の注文はぱつたりなくなつた。数丁ほど預かっていたものは同業の知り合いのところに回してある。向こうも客が増えて困るということはないだらう。

立河は、この街を出て東京へ行くつもりだつた。東京のどこか片隅で人波に紛れ、小さなコーヒーショップでも開いてひつそりと暮らせたらいい。危険と隣り合わせの生活を楽しめる年齢はとうに過ぎていたのだと、今さらながらに悟つた。

ただ一つ、やり残したことを片付けるために、立河は神崎のもとへ向かつた。

絶対安静を言いつけられて療養中の少年は、相変わらず感情をどこかに置き忘れたようなぼんやりした様子で、無言のまま立河を迎えた。

「近い内に、俺は東京に移る」

「……そうですか」

事務的に、少年が返す。立河を見る事もなく、ただ機械的に答えただけのような感じだ。ため息をついて、立河は用意していた一言を投げた。

「おまえも来るか」

少年が立河を見た。初めての、感情の混じった視線。ただそれは、困惑のそれだったが。

「……どうしてですか」

「このまま置いてつたら、その内野良犬みたいにふらふら出てつて、誰もいないところで死にそうだ」

「その、つもりです」

天井を見上げて、少年はかけられた毛布を握り締める。

「……父さんが、いないのに……僕だけ生きてたって、何もないのに。なんにもいらない。教団も、僕も、なんにもいらない……」

「父親の後でも追う気か」

「そうしたかつたのに……あなたが、助けた」

「そりや悪かったな」

肩をすくめて、立河は少年を見下ろす。ひどく弱った、子供の顔をしていた。

「で、その父親があの世から、こっちへ来いつて手招きしててるのか？ だったら、無理に止めはしないがな」

その言葉に、少年は思いがけない鋭さで立河を見た。立河が見返すと、少年の顔がくしゃりと歪む。

「……そうなら、良かった」

そんな人じゃないから。そう呟いて、少年は枕に顔を埋めた。

立河は手近な椅子を一つ拝借し、ベッドの傍に陣取る。長丁場になりそうだった。

「……ほんとの父さんじやなかつたんです。あそこに来る子供は、捨てられたり、買われたりした子供ばかりだったから。僕も、そうだった」

不意に、少年が細い声で話し始める。立河に話していくとこうよ

り、自分を振り返った独白のようだった。

「変わった人なんです。僕に戦い方を仕込みながら、こんなことさせたくないんだけどな、って苦笑いしてました。でも僕は、どれだけ血に濡れても、父さんと一緒にいたかった。だからずっと、戦つてきたのに」

小さな子供のように、ぎゅっと身体を丸めて、彼は何かに耐えるように唇を引き結ぶ。やがて漏れた声は震えていた。

「……僕の親にならなかつたら、父さんだつて死なずに済んだ……！」

「めんなさい」と繰り返し呟く声。僕が迷つたから、と切れ切れに吐き出して、彼は堰を切つたように嗚咽と涙をこぼした。立河はただそれを見やる。何かアクションを起こすには、あまりに少年を知らなさすぎた。

しばらく泣いた後、少年はのろのろと顔を上げた。

「……どうして、僕を助けたんですか？」

責めるような響きはなかつた。ただ純粋に疑問をぶつけているような声音に、立河も正直に答えた。

「さあな。とりあえず、生きてたから助けた。で、今は少しばかり腹が立つてる

きよとんとする少年に、疲れたため息が漏れた。

「銃を持って俺を殺しに来た相手を、返り討ちにした。おまえと同じくらいの子供だ。死にたくもなかつただろうに死んじました。その死体を埋めに行って、血塗れで転がってるおまえを見つけて拾つてきた。が、当の本人はさつさと死ぬつもりと來たもんだ。おまえ、人生なめてんのか」

八つ当たりに近い言い分であることは自覚していたが、今さら撤回はできなかつた。この気持ちから、今まで動いてきたのだ。

「死んだ父親が助けたなんて陳腐なことは言わん。けどな、生きられる奴が勝手に死ぬのは腹が立つ。だからとりあえず生きとけ」

「無茶苦茶だ……」

少年が呻いた。確かに無茶な言い分だらう。

だが、その後彼が発した言葉は、立河の予想を望ましい方向に裏切つた。

「……大体、生きてくにしても僕、戸籍も何もないんですよ。本名だつて、とうの昔に忘れたし」

「それなんだがな」

立河はポケットからあの少年の持ち物を引っ張り出した。トダイツキ の名前が入ったカードや、携帯電話。

あの少年 戸田斎 について、茂木に色々調べてもらつた。親が事業に失敗し、借金を背負つて悲觀の挙句、一家心中しようとしたらしい。だが彼だけは死ぬのが怖くなつて逃げ出し、この街にやってきた。そして松嶋組に入れてやる代わりにと、立河の襲撃を持ちかけられたそうだ。つまり、彼には家族がない。

田の前に並べて置かれたそれらの意味するところを、少年はすぐ悟つたようだつた。

「……この名前を乗つ取れつてことですか？」

「身代わり、つて言うと氣分が悪いか？ だが話としちゃ悪くないはずだ。借金は親の死亡保険金で何とか相殺できるそうだから、金錢的な負担はないな。 それに、今までのおまえはもう死んだことになつてるはずだ。車と一緒に海に落ちてな」

彼の生存の可能性は低いと、ニュースで報じているのを見たばかりだ。上手くごまかしきれたらしい。

「実を言うと、入れ替わってくれれば俺も助かる。実在してゐる人間の死体を捜そぐとする奴はいないだらうからな」

少年は立河を見、そして手を伸ばした。カードに書かれた名前を、しげしげと見つめる。

彼を 戸田斎 の代わりにするつもりはなかつた。だがこの国では、戸籍があつた方が自由が利くのだ。幸い年齢は近いし、遠く離れた土地に移れば露見する可能性も低いだらう。あの少年には悪いと思わないでもないが、せめて田の前の彼にわずかでも未来への糸

を繋いでやりたかった。

「……いつ、ここを発つんですか」

少年の問いに、立河は少し考え、

「仕事の方はもう片がついた。家は、放つときやその内誰かが住み着くだらうし、発とうと思えばすぐにでも発てるな」

それを聞いて、少年が身体を起こそうとした。さすがに慌てて止める。

「おい、傷に障るぞ」

「平気です。どうせ、痛みなんかないし。 小さい頃、母親に殴られてばっかりいて、神経がどつか飛んじゃったみたいで。痛覚がないんです」

あつさりと言われた言葉が、かえって重かつた。立河が絶句している間に、少年は何とか身体を起こして、ベッドから降りようとしていた。支えてやると、力は弱いものの確かに腕を掴んできた。

「考え方で、ください。さつきの話。 まだ、空っぽみたいな

感じだから。どうするかって、すぐには決められないけど、でも」

「ああ、分かった。別に元んとこに捨てに行きやしないから」

「……捨て犬ですか、僕は」

「似たようなもんだろ?」

そう言つと、少年は初めて、表情を緩めた。 そうですね、と呟いて腕を下ろした。

彼を残したまま、立河は神崎のところへ顔を出した。少年の容態について訊くためだ。神崎はベッドの方をちらりと見て、声を低めた。

「……本当に、あいつを連れて行く気か?」

「拾つちまつたからな。しばらくは、面倒見るつもりだが

「見きれるか?」

「どうも、かなりのトラウマを抱えるところだ。寝てる間も、よくうなされてる。鍛えてる割に怪我の治りが遅いのも、その辺に原因があるかもしけんな

「動かせそうか?」

「五日でそこまで治るもんか。せめて倍は待て。骨に異常がないのが救いだが、下手に動かせば傷が開くぞ」

「ずいぶん入れ込むじゃないか。患者によつちや縫いつ放しで放り出すジイさんが」

すると、神崎は肩をすくめた。

「どうも、世話を焼きたくなる手合いなんだよ、あの坊主は」確かに、放つておけない危なつかしさがある。それが弱っているせいなのか、生来のものなのかは分からぬが。

……捨て犬、とは言ひえて妙かもしれない。それも、保護欲をくすぐる子犬だ。

（なら、俺は飼い主か？）

行き着いた考えがあまりにしつくり来て、立河は思わず乾いた笑みを浮かべた。

その後、とりあえず抜糸だけは済ませて、立河は少年 戸田斎を連れて街を出た。といつてもすぐに東京に行くというわけにはいかなかつた。療養がてら熱海の光子の家に転がり込んだところ、彼女が一人をなかなか手放そうとせず、結果として三年ほど世話になつてしまつたのだ。いきなり見知らぬ少年を連れて転がり込んできた弟に驚くのもそこそこに、連れてきた斎の容姿の端整さに大喜びしていた姉は大物なのだろうと、今さらながらに思う。

もつとも、その勢いのまま斎を養子にすると言い出した時はさすがに驚いた。万一戸籍のからくりがばれた際には、光子にまで影響が及びかねないと思つて諫めたのだが、立河よりはまだ自分の方が養子縁組には都合がいいからと押し切られてしまった。確かに、彼を養子にすることを考えていないのでなかつたし、立河より光子の方が社会的な信用もあるう。こうして光子がさつさと手続きを済ませてしまつた結果、彼は 天瀬斎 となつた。立河とは、戸籍

上叔父と甥になつたわけだ。

そして裏社会から足を洗つた後、立河は前々から考えていたプランを実行に移すこととした。

「コーヒー・シヨップ?」

「ああ、前から考えてはいたんだ。銃工を引退したら店でもやるかつてな」

趣味を生かした、コーヒー専門の喫茶店。薄々とは考えていたプランが一気に現実味を帯びてきて、立河は嬉々として斎に自分の構想を語る。幸い、そこそこの蓄えはあった。裏社会とこゝのは、とかく法外な金額が行き来する場所なのだ。

「東京の方で、物件も探してゐるんだ。ここなんか、三階が住居スペースになつて、いいと思わないか? まあ店舗部分が二階から地下一階までつてのは多すぎだが、それはテナントにでもして……」

斎は立河の話をじつと聞いていたが、やがて思い切つたよつと口を開いた。

「あのさ、叔父さん。その内の一階、予約しといでいいかな。僕も、やつてみたいことがあるんだ」「やつてみたいこと?」

「うん。銃工」

斎の言葉に、立河は啞然とした。

「斎、おまえ……」

「あ、ちゃんと許可証取つて、公認受けるよ? でもさ、叔父さん、言つてたよね。裏社会から完全に抜けるのは難しいつて。だから、保険

「保険?」

「僕、今まで銃とかナイフとか、そういうのしか扱つてこなくて、もうそれを持つてゐる方が自然なくらいに、身体がそれに慣れちゃつてるから。どうせ離れられないんなら、いつそのことそれを仕事にしちゃおつかつて。 それなら、いつでも戦えるから、叔父さんを守れる」

思いがけない言葉だった。

「裏社会時代の関係とかで、もし危なくなつたらせ。 父さんのこと、守れなかつたけど……せめて、叔父さんだけは」途中で声は掠れて消えたが、唇は確かに動いた。
まもらせた。

……泣き出しそうな顔で言われて、却下できるはずもない。子犬のつぶらな瞳に負けた父親の気分で、立河はため息をついた。そういえば昔、そんな感じのCMを見たような気がすると思いながら。

「……分かつた」

斎がぱっと顔を上げた。その表情が綻ぶ。

“父親”には敵わないまでも、家族にはなれたと感じるのはこんな時だ。面映い心持ちになつた。それをじまかすように、付け加える。

「ただし、銃の資格取得は二十歳以上だ。それまで書つんなり、それまでちゃんと勉強して試験受かれよ?」

もちろんこの時、立河は何の氣なしに言つたのだ。

数年後、彼が実技試験で満点を叩き出すことなど知る由もなく。

十日後。ペニーハウスに、那々はいた。

店内に客はない。今日は定休日なのだ。那々の前にはカフェオレのグラスが置かれ、カウンターでは立河がコーヒーを淹れている。斎は腕の傷の抜糸のため、病院に行っていた。

しんとした空間の中、不意に立河が口を開いた。

「……悪いね、あいつも、もうすぐ帰つて来ると思うんだが」

「いいんです。あたしも、お休みの時に来たんだし。あの、マスターさん

「何だい？」

「子犬の昔話、聞いたことがありますか」

沈黙が落ちた。サイフォンのビーカーにコーヒーが落ちる音が際立つ。

ややあつて、立河は息をついた。

「……あいつが？」

「はい」

肯いて、那々はカフェオレを一口。相変わらず、絶品だった。自分のブルーマウンテンブレンンドをカップに注ぎ、立河は彼女を見た。五年前に、斎いや、ペインレス・ドッグが救った少女。

彼女がある意味自分たちの命運を握った存在になったことに、しかし不思議と脅威は感じない。むしろ、奇妙な仲間意識のようなものを、彼女に対して感じていた。

同じ人間に惹かれた者同士の、連帯感ともいづべき感情。

「あいつのことが、好きなのかい？」

そう尋ねると、那々はわずかな沈黙の後、肯いた。

「はい」

「そうか」

目を細めた。彼女の目に、迷いはない。

だが 懸念が胸を掠めるのも確かだ。

斎は、誰かを愛することに慣れていない。幼い頃から、実の母親に愛されず、痛覚を切り捨てざるを得ないほどに虐待を受けた経験。そして教団で積み重ねられた、奪い、殺す日々。それらは切れない鎖となって、彼を縛り続ける。

そして、唯一彼を愛したであろう“父親”を失った傷が、今でも斎を苛んでいるのを、立河は最も近くで見てきたのだ。そんな斎が、少女の恋心を受け止められるのか、立河には分からなかつた。

「あいつは……難しいぞ」

呟かれた言葉に、那々はきょとんと目を見張り、そして微笑した。

「覚悟、します」

そう 彼女はすべて分かつた上で、斎を好きだと言つたのだから。

「そうだつたな」

笑いを漏らして、立河はカップに口をつけた。

いつか彼女が、斎の隣で笑う口が来ればいいと思つた。

「あれ？」

ドアを開けた斎は、店内に那々の姿を見つけて声をあげた。

「那々ちゃん、来てたんだ」

「あ、天瀬さん。 怪我、もういいんですか？」

「うん、おかげさまでね。もともと大した怪我じゃなかつたし」 カウンターの内側に入ると、手慣れた様子で自分の分のカプチーノを淹れ、那々にも尋ねる。彼女がかぶりを振つたので、そのまま

カウンター席に座つた。

「……大丈夫？ 事件のことで何か言われたり、してない？」

「大丈夫です。ニュースとかでも、麻薬とかの方がメインみたいな感じで報道されてて、あしたちのことはあんまり。ただ、学校の方は色々、大変だったみたいだけど」

「だろうね」

生徒が薬物に手を出して事件を起こしたのだ。学校関係者の人々はさぞかし、胃の痛いことだろう。

カプチーノに口をつけながら、斎は那々を見やる。事件を乗り越え、彼女はずいぶん落ち着いて見えた。

彼女は大丈夫だろう。強い子だ。

だが、もう一人の方は、どうだろうか。

そう思つた時、那々が口を開いた。

「……あたしは大丈夫だけど……直美は、今入院してます。退院したら、転校するつて。もしかしたら、留学するかもしれないって、言つてました」

「……そつか。そうだね」

新しい環境に身を置くこと。乗り越えるには、忘れるには、それが一番いい。日々に追われて、きっと、記憶も薄れしていくだろう。「僕がこんな」と言つのも何だけど……早く忘れられると、いいね

「……はい」

肯いて、那々は斎を見た。

「……何？」

「えつと、その……ストーカーのことも片付いちやつたし、天瀬さんに彼氏のふりしてもらわなくともよくなつたでしょ？」

「あ、そうだね」

そういえば、もう理由がないからお役御免か、そう思つた矢先。

「だから今度は、ホントの彼女に立候補します」

「……は？」

何かとんでもないことを聞いた気がして、斎は思わず間の抜けた

声をあげていた。

「えーと……僕、七歳も下の女の子に手を出す気はないよ?」

「出す気になるまで待つてます」

あつさり言われて、斎は頭を抱えた。ぐつたりと呻く。

「……何年かかるか分かんないよ?」

「いいですよ」

きやろんと言われた言葉に、何だかもう、何もかも投げたい気分になつた。

……そりゃまあ、彼女のことは守りたいと思つたし。いい子だと思ふけど。

でも、僕は。

「天瀬さん?」

那々の声に、斎は顔を上げた。見つめてくるその瞳が、五年前の記憶に重なる。

そういえば彼女は、あの頃からまつすぐ人を見る子だつた。

「何でも、ないよ」

そう言つて、斎は自棄のようにカプチーノを一気飲みする。たん、とカップを置いて叔父を見据えた。

「……叔父さん、さつきから何か楽しそうだね」

「いやあ、可愛い彼女ができて良かつたなあ、斎」

「そのセリフは前にも聞いたよ!」

叔父も共犯だと悟り、斎は天井を仰いだ。この人は絶対確信犯だ。くすくす笑つていた那々が、ふと居住まいを正して斎を呼んだ。

「天瀬さん

「なに?」

向き直つた斎に、那々はぺこりと頭を下げた。

「ありがとうございました。色々と」

今回のこと。そして、五年前に言えなかつたこと。すべてを込めたつもりだった。

やつと、言えた。

顔を上げると、斎が微笑した。

「どういたしまして」

その表情に、『彼』の面影を見つけて、泣きたくなるような想いがこみ上げてくる。探していたものをようやく見つけた、そんな達成感にも似た気持ち。

このひとだつた。

このひとでよかつたのだ。

斎の笑顔の中で、あの日の『彼』が微笑っていた。

もう、迷わなくていい。

彼女の恋は、ここから始まる。

那々が帰った後、斎は立河をじるりと見やり、カップを突き出した。

「叔父さん、もう一杯」

「ブルーマンなら余ってるぞ」

「それでいいよ」

ブルーマウンテンブレンンドを啜りながら、息をついた。

「……どうしろつていうのさ」

「どう、とは？」

「那々ちゃんのことだよ。誰かを好きとか愛してるとか、そんなの分からぬ、僕は。足りないところが、いっぱいある」

「別にいきなりそこまで突っ走ることはないだろ。あの子が大事なんだろう？ 大事にしたいってのは、好きだつてのと大差ないぞ」「……そうかな」

「そんなもんだ。大体こんなもん、頭でああだこうだ考えたつてどうにもならん。なるよにしかならんもんだ」

「それって経験談？」

「まあ、そんなもんか」

叔父の言葉に苦笑して、斎は店内を見回した。少しくすんだ色合の床、磨き上げられたカウンター、そして何より、全身を包むコーヒーの香り。この一年の間に、すっかり店内に染み付いた香りだ。ここに越して来て一年。そしてそれ以前に三年。

「……五年、か」

呟いた斎に、立河も思い出す。もう五年も経つたのだ。彼の“叔父”になつてから。

「早いもんだな」

「うん。ほんとだね」

カップを弄びながら、斎が微笑した。その穏やかさに、感慨ともいづべきものを感じる。五年という時間があつたからこそ、できるようになつた表情。五年前の彼からは、想像もつかない。

今回のように無茶をすることはあっても、命を粗末にするようなことはしなくなつた。“死”に魅入られていた、あの頃の彼はもういないのだ。

父親を失つた傷が消えることはなくとも、それを覆つて癒すことはできるだらう。

彼女　那々が、そういう存在になつてくれればいいと思つ。

「いい子じゃないか。守つてやれよ」

そう言つと、斎は少し目を見開き、そして肯いた。

「うん。　そうしたいと思つてゐる」

祈るよつて、呟いた。

三階の自室で、斎は机の上のパソコンを起ち上げた。一階の店から持つてきた“カルテ”的内容をデータ化するためだ。

個人別に作つてあるファイルに新規の分の入力を済ませると、メールをチェックする。たまに千秋のような常連客が予約のメールをよこすことがあるのだ。たまに銃と一緒にコーヒー豆の注文もあつ

たりして笑つてしまつた。

メールのチェックを終えると、少し考え、インターネットに接続した。アドレスバーの履歴から、警視庁のサイトにアクセスする。サイトに入ると、もう何十回もクリックしたリンクをまたクリックした。

【 青銀天聖教団 の幹部たち】。

相変わらず、新しいトピックスはない。そのことに、安堵とも落胆ともつかない息をついた。

教団に対する斎の感情は、複雑だ。自分を育てた組織。そして、父を死に追いやった組織。

……いや、父の死は自分にも責任の一端はあるのだろうが。

そう思つて、顔を覆つた。

教団が父を危険視し始めたのは、斎が迷いを見せ始めたからだ。父が示した、人としてのボーダーラインを、教団の任務は容易く越える。教団に忠実な犬でなければいけなかつたのに、そのギャップに戸惑い、板挟みになつて迷いが生じた。教団随一の戦士であるペインレス・ドッグの迷いは、そのまま戦闘力の低下に繋がる。そう考えた教団側は、原因の排除を実行した。そして 任務の果ての父の死。

迷わなければよかつた。父の意にそぐわなくても、教団に忠実な犬のままでいれば そうすれば、父が死ぬことはなかつたかもしない。少なくとも、もつと長く傍にいることが叶つただろう。

そしてまた、戻れない過去を嘆いて、同じループを回り続ける。かぶりを振つて、斎はサイトへの接続を切つた。そのままパソコンの電源も落とし、窓から外を眺める。

……教団時代の仲間たちの誰かも、いるのだろうか。自分と同じように、この街のどこかに。

教団が崩壊した際、教祖を始め幹部たちや主立つた信者たちは軒並み逮捕・収監されたが、斎と同じくダークサイドに属していた者たちは、数人が未だ行方不明のままだ。教団では、任務のために偽

造パスポートを支給することもあったので、それを使って海外に逃れた者もいるかも知れない。

彼らの戦闘能力の高さは、斎が一番よく知っている。めったなことで捕まるとは思えなかった。

彼らは、恨んでいたりするだろうか。教団崩壊の引鉄を引いた自分を。そしてこの街は、華やかさの下にその憎悪を隠しているのだろうか。

今思えば、顔を変えなかつたのは失敗だつたかも知れない。熱海の養母のところに転がり込んだ際、一度整形をしようかと口にしたら、せっかくの綺麗な顔がもつたいたいないと猛反対されたのだ。かといって、今さら整形するのも妙なものだし……。

とりあえず今は、考へても仕方がないので、その問題は棚上げすることにした。見つかって、自分の周囲に累が及ぶようなことになれば

その時のために牙を研ぎ、戦う覚悟だけはしておくつもりだった。この街にはきっと、牙を隠した獣が山ほど棲んでいる。もちろん自分も、その中に含まれるのだが。

斎は立ち上がり、カルテを持って部屋を出た。出掛けに振り返つて、肩越しにもう一度、窓の向こうを見やつた。

夜の闇は、まだ遠い。

わけもなくそのことにほつとして、斎は再び振り返ることなく部屋を出て行つた。

ペニーハウス を出て、どこへ行くとも決められずに街を歩く。家へ帰つても、暇を持て余すだけだ。直美は部屋を引き払つてしまい、もうあのマンションに帰つて来ることはない。

ふらりと本屋に立ち寄つた。今はネット配信に押され気味だが、まだペイパーバックを好む風潮も根強い。棚の間を歩いていると、

出し抜けに肩を叩かれた。

「……あ」

少し目を見張る。すらりと背の高い、すっかり顔見知りになつた少女。

まひるも、意外そうな顔で那々を見て、

「あんた、本屋なんかに来ることあるんだ」

「……それって、ちょっと失礼だと思つ」

確かに、お世辞にも勉強熱心とはいえないが。

成り行きで並んでレジに行きながら、ふとまひるの手にした本のタイトルを見て絶句する。

【世界ナイフ百科】。

そういえば出かけるにも複数のナイフを持ち歩く少女だ。よほど

のナイフマニアなのだろう。部屋を見るのが怖い気もあるが。

会計を済ませて本屋を出ると、一人はしばらく歩いて歩道橋に差

しかかる。那々がふと、口を開いた。

「……そういうばさ、あたし一つ訊きたかったんだけど」

「何？」

「前に言つてた、“借り”つて何なの？」

結局、聞かないままに終わつてしまい、気になつていたのだ。
まひるは那々を見て、ふと笑つた。

「……五年前の事件の時」

彼女の言葉に、はつとする。なぜまひるが事件との関わりを知つているのか分からず、息を詰めた。まひるはどこか那々の反応を楽しむように、言葉を継ぐ。

「あんた、男の子助けたことあるでしょ」

言われて、おぼろげに思い出した。大柄な見張り役から、小さな男の子を庇つたこと。その後自分も、斎に助けられたのだけれど。

「その子、あたしの弟なのよね」

「……そうなの！？」

まじまじとまひるを見つめる。意外なところに、意外な縁があつ

たものだ。

「おかげさまで、今十歳。毎日サッカー漬けよ

「へえ……そうだよね、もう五年も経つんだもんね」

相槌をうつて、軽い気持ちで尋ねた。

「そういえば、まひるの家つて何の仕事してたの？　ウチはあの時、お母さんが成田空港にいたんだけどわ」

すると、まひるはなぜか顔をしかめた。

「……ウチじゃなくて、伯父貴がね」

「伯父さん？」

「警察庁長官」

……一度目の絶句。

「……何でまひる、ウチの高校通つてんの？　私立でも行けたんじや……」

「だつて金かかるじゃん。伯父貴がお偉いさんでも、ウチはただの会社員なんだからさ」

確かにその通りだ。

「それに、伯父貴の方だつてあたしみたいな問題児の面倒は見たくないだらうし。弟ならともかく」

「問題児、ね……」

ほとんど金のロングヘア、メンソールの煙草をふかし、ナイフを持ち歩く少女。しかしまひるには、不思議と粗暴さは感じられない。どこか大人びて、自分というものを持っている人間に思えた。

「……けど、まひるって実はいい人でしょ」

「お、分かつてんじゃない」

からからと笑つて、まひるは歩道橋の中ほどで立ち止まり、バッグの中をじそじそと探る。

「何？」

「ん、煙草」

「ちょっと、ここで吸うの！？ 制服で！？」

「いいじゃん、ほとんど人なんか通りやしないし」

まひるは意に介さない。マイペースも困りものだ。

煙草をくわえて、ライターで火を点ける動作が、相変わらず妙に堂に入っていた。白い煙が、暮れかける空に細長く立ち昇る。

「……あん時さあ、弟が教団に誘拐された時。ウチの親、おたおたして見てらんなかつたんだよね」

空を見上げたまま、まひるは煙草の灰を落とした。手摺にもたれて、長い指に煙草を挟む姿が、やけにはまつていた。

「伯父貴んとこに駆け込んでつて、何とかしてくれつてわめいたり。そりや伯父貴も扱いに困つたと思うけど。結局、誰も何にもできなかつたんだけどさ。そん時、あたし決めたんだ」「決めた、つて？」

「あたしは、誰かの弱みにはならない」

どこか晴れ晴れと、まひるは言い放った。

「弟みたいにおとなしく取つ捕まつたりしない。戦つてやろつと思つて。だから、ナイフはあたしの牙なんだ」「……そっか」

分かるような気がした。那々自身も、誰かの足枷になるのは嫌だ。目の前で他の誰かが傷ついて、それを見ているしかできないなど、冗談ではない。それくらいなら、自分で戦いたかった。

あの時のように、血を流す斎を見ていればしかできないなど、もうごめんだ。

「そうだよね。自分でも、何とかしたいもんね」

そうでなければ、彼の隣には立てない気がした。

短くなつた煙草を携帯灰皿にしまつて、まひるは手摺に頬杖をつく。靴先で足元のコンクリートを叩きながら、那々を見た。

「けど、あんたは昔から、度胸据わつてたんじやない。誘拐された先で大の大人に食つて掛かつたつていうし、こないだもちゃんと自分で落とし前つけに行つたしさ。　あたしみたいにナイフ持つてるわけでもないのに、どうしてそんなにできるのかつて、思ったことあるよ」

「それは……アタマ来ちゃって、周りの状況なんて飛んじゃつてたから。それに、助けてもらつてたし、結局」

一度とも、斎に助けてもらつた。そして、一度とも彼は血を流した。本当は、那々が負うはずの怪我だったのに。

「あたしが強いわけじゃない。運が良かつただけだよ」「強くなりたい。守られるだけにはならないように。

すると、まひるは少し笑つた。何というか にやりとこいつ擬音が似合いそうな、笑い方。

「……あん時助けに入つたのつて、あれ、あんたの男？」

「は！？」

一瞬、思考がぶつ飛んだ。

「ありや只者じゃないね。ガンスマス銃工ガンジムつて言ってたけど、相当修羅場潛

つてそう。おまけにいい男だし」

「あの、それ

慌てる那々に、まひるが笑いかける。大人びた、きれいな笑顔だつた。

「捕まえるんなら、きつちり捕まえといった方がいいよ

「……その、つもり」

五年も想つた相手だ。あと数年、どうといつことはない。

「ま、頑張れ。じゃね」

肩を叩いて、まひるは歩き出した。肩越しに振り返つて、ひらひらと手を振つた。那々も家に帰るため歩き出す。気分が軽い。

彼女とは、気が合つそつな気がした。

その後数日、千秋のレミントンと他の顧客持ち込みの銃の調整にかかり切りになつていた斎は、週が変わつた頃によつやく喫茶店のウェイターに復帰を果たした。土日はともかく、平日は日がな一日、一階の工房に閉じこもつていたのだ。

いつになく新鮮な気分で喫茶店のユニフォームに袖を通して、テーブルを拭いていると、ドアの開く音がした。

「いらっしゃいませ……諸角さん？」

「おう」「

軽く手を上げて、諸角はいつものようにカウンターに直行する。立河が、モカブレンドを淹れ始めた。

「やつと一段落ついてな。今度の事件が」

「あ……」「迷惑かけました」

あの時は斎も景気よく発砲してしまった。別に人を撃つたわけではないが、そういう意味では、むしろ斎の方が被害者だが。正当防衛ということで片付けるのに、諸角がずいぶん走り回ってくれたであろうことは想像に難くない。

「いや、あれで薬物の流通ルートの一部を掴めたからな。上手く連れれば、もつと大物が釣れるかもしれない。そういう大事件解決の立役者が民間人つてのは、どうもありがたくないらしい、上としてはつまり、手柄を譲る代わりに発砲の件は不問に付す、ということらしい。もつとも、斎にとつてもその方が好都合だが。

「そうですね。僕もその方がありがたいです。あんまり騒がれたくないですから」

「やれやれ、謙虚だねえ、おまえも」

というよりは、あまり顔を売りたくないというのが本音だが。

「まあ、薬物絡みの事件の担当を引っ張つてつたから、そいつが喜んで引き受けてくれるだろうよ。ついでに、この後の捜査もな」

そう言つて、諸角はしてきたモカブレンドを啜る。

「……そういうば、西脇哲治はあれからどうなったんですか？」

ふと尋ねると、諸角は難しい顔になった。

「まだ入院中だ。中毒症状が、予想以上に進んでてな。あの分じゃ、医療少年院の方に入ることになるかもしだれん」

「そうですか」

斎は息をついた。彼はまだ十代だ。これからいくらでも、やり直

しはきくだろう。個人的に親しくしたいと思う相手ではなかつたが、何とか立ち直つてくれればそれに越したことはない。

彼はまだ間に合つ。

自分のような、獣にはならずには済む可能性が残つてゐるから。と、諸角が思い出したように言い出した。

「そうそう、公安の“姫”がまた騒いでたぞ。おまえが撃たれたつて話が、どつかから行つたらしくてな。今は忙しくてなかなか抜けられないみたいだが、その内見舞いと称して押しかけてくるんじやないか」

「……ありがとうございます。心の準備だけはしております」「いつ襲撃されるかは分からぬが、ふわりと気分があたたかくなるのを感じる。自分のことを気にかけてくれる人が、何人もできた。五年前 教団を出奔してきた時は、想像もしていなかつたことだ。自分を案じてくれる人など、養父以外にはいないと思つていた。仲間たちとも仲が悪かつたわけではないが、やはり“家族”として愛情をくれたのは、彼だけだつたから。

しかし、立河に出会つた。養父を失つて心身ともにぼろぼろだつた斎を、教団とは違う形でこの世に繋ぎ止め、家族として受け入れてくれた人。そして、養母となつてくれた彼の姉。諸角も、斎を亡くした息子と重ねているのだろう、何かと親身になつてくれる。千秋や凜子は、例えば兄や姉がいたらああいう感じなのかもしれない。そして、彼らの中の誰とも違つベクトルで、斎を想つてくれる那々。

(……だから、大丈夫)

だいじょうぶだよ、父さん。

僕には、大事な人がこんなにできた。

だからもう、自分から死のうとはしない。彼らを守るために命を張ることはあるかもしれないけれど、それは命を投げるんじゃない。彼らを守つて、自分も生き残る未来を掴むためだから。

そう思わせてくれる人たちに、ただ感謝した。

モカブレンド一杯すぐに帰った諸角と入れ替わるよう、千秋が店に姿を見せた。レミントンが仕上がったと、連絡しておいたためだ。

「一圓さん、この間はありがとうございました」

「おう、怪我の方、大したことなくてよかったです。で、俺のレミントン、できたって？」

「はい。けどまず、コーヒーですよね？」

「ああ、エスプレッソ頼む」

「分かりました」

立河が淹れ始め、斎は銃の準備をしようと奥に入りかかる。すると、千秋が彼を呼び止めた。

「ちょい待ち」

「何ですか？」

「俺んとこでな、おまえに銃を見て欲しいって奴がいるんだけど。出張整備とかって、頼めるのか？」

「出張？ 一圓さんの仕事場って、確か……」

「ま、詳しい話は下でするとして。ここって出張やつてたつけ？」

「僕に足がないですから、やってなかつたんですけど……いい機会だから、バイクくらいは持つてもいいかなって。今回のことじや、足がないのが不便だつてことん痛感しましたから」

「ああ、いちいち人に送つてつてもううんじや不便だもんな。じや、可能性はアリなわけだ」

「そうですね、やつてもいいかなって思つてます。ただそつなつて、喫茶店の方が休みがちになつちゃうと困るかなつて」

「こつちは構わんぞ。別に手間暇かかる料理を作るわけでもないんだしな。 エスプレッソ、どうぞ」

立河がカップを千秋の前に置く。

「ども。 じゃあ、頼んでいいか？」

「はい。ただ、バイク買つのが先ですけど」

「そりやそうだ」

笑つて、千秋はエスプレッソに口をつける。斎は奥に入つて着替えると、一階に下りて店の鍵を開けた。棚から千秋のレミントンを、スコープとサイレンサーつきのフルセットで取り出す。サイトの照準は調整してあるが、千秋好みもあるだろうから後は本人に任せることにする。機関部やバレルに被害がなかつたのが救いだが、傷が入つていたストックやらアクセサリやらは根こそぎ交換になつてしまつた。それでも思つたより時間がかからなかつたのは、日本にもメーカーの代理店ができる、バーツの入手が比較的楽になつてゐるためだ。よほどリアな銃でなければ、一日から一日で大抵のバーツが手に入る。とはいへ、銃工の資格証提示が必須条件なのはもちろんだが。

ややあつて下りて来た千秋は、すっかり直つたレミントンに目を輝かせた。

「おーっ、俺のレミントン！ やつと退院だな」

「サイトの方、じつちでも調整してますけど、やつぱり実際に使るのは一圓さんですか。どうですか？」

「ん、いいんじゃねえ？ レンジ借りるわ」

「はい」

千秋がレミントンを抱えてシューティングレンジへ下りる。斎は明細書と領収書を用意して、試射後のクリーンアップの準備を始めた。

試射を終えた千秋が受け取りの書類にサインしている間に、さつとクリーンアップを済ませる。

「やっぱ本職、早いな」

「どうも。 で、さつきの出張の件ですけど、ビルへ行けばいいんですか？」

「ああ、俺らの待機所が藤城の本社ビルにあるんだ。そこへ来てもらえるか。時間なんかは、そいつの都合次第になるから、また連絡

する

「分かりました。 じゃ、これ、明細と領収です。ありがとうございました」

「おう、また頼むわ

代金と領収書のやり取りを済ませて、千秋は ペニー・ハウス を後にした。斎がバインダーを片付けていると、カウンターの電話が鳴った。内線だ。

「叔父さん？」

『斎、上方、客が入つて来たからちょっと戻つてくれ』

「分かった」

斎は急いで鍵を閉め、階段を駆け上がつていった。

やはり出張整備や修理は、件数を抑えた方がいいかもしれない、と思ひながら。

彼は、静かに微笑^{わら}っていた。

那々はそれを見つめる。五年前の、出会った頃の姿をした彼は、バンの窓越しに囁きかけた。

『……さよなら、だよ』

置いていかないで、と言いかけてやめた。代わりに、まっすぐ彼を見つめる。

「……またね」

そう言つと、彼は驚いたように口を開いて、そして微笑し、手を伸ばした。

『うん、またね』

ふわり、と彼の手が髪を掠め、バンが走り去つていく。那々はそれを見送つた。もう、泣くことはない。

これで終わりじゃない。また、会える。

今度は待つているだけのつもりはない。自分からでも、会いに行

けるか、

ベルの音に、那々は目を覚ました。

毎年のように見ていた夢。だが来年からは、もう見る事はないだろう。だからこれは、五年前の彼との別れだ。

そして、現在の彼との再会の約束。

那々はベッドから下りて、部屋を出た。

リビングのあの窓を、思い切って開けた。毎年、彼に祈っていたあの窓。

もう、祈ることはない。

その代わり、余ごに行こうと思つた。

「 那々？ 起きたの？」

「うん」

母の声に振り返ると、母は窓からの光に眩しげに目を細める。

「 今日もいい天気ねえ」

「 そうだね」

「 ほひ、起きたんなうひつわと」 飯食べぢやこなさい

「 はーい」

返事をして、窓に向き直った。流れ込んでくる、朝の澄んだ空氣。

今日もまた、ペニーハウス に行こう。

立ち止まっていた分を取り戻しに、斎に会いに行くのだ。
そう決めて、大きく息を吸い込んだ。

Shoot : 1 End .

“End”とあります、完結ではありません（笑）。
章ごとの区切りとしての表示ですので、紛らわしいですがよろしく
お願いします。

Side Stories: 1 “Painless Dog” (前書き)

時系列は 青銀天聖教団 崩壊直後くらい。諸角さん視点です。

なあ、親父さんには会えたかい？

ざん、と波の打ち寄せる音がした。

諸角久尚は、道の端に立つて下を覗き込む。海沿いの人通りのない道。ガードレールの外はすぐ崖になつていて、数メートルの落差の下には、かなり強く波が打ち寄せている。深さがあるらしく、海底は見えない。

捜査の途中、運転していた部下に路肩に車を停めさせ、諸角は車を降りて周囲を見回す。

「……ずいぶん、高いんだな」

崖下を覗き込み、諸角は息をつく。視線を横に走らせると、すぐ脇には、申し訳程度にロープを張られた箇所がある。ずっと伸びたガードレールは、そこだけがねじ切れ、加えられた衝撃の凄まじさを物語っていた。

ここから、彼は海に飛び込んだのだ。

ロープの下には、花束が一つ、海風に揺れていた。

ペインレス・ドッグ。

じじしばらく世間を騒がせていた、青銀天聖教団による誘拐・監禁事件。彼はその事件を明るみに出すきっかけとなつた人物だつた。子供を人質に、その家族にテロへの協力を要求していた卑劣な犯罪は、その子供たちの見張り役だったペインレス・ドッグによって暴かれ、やがて教団の裏の顔すべてが白日の下に晒されることとなつたのだ。

だが、その後の世界に彼はいない。

子供たちを助けたその足で、彼は姿を消し、ここから車ごと海へと転落した。車はすぐに見つかったが、遺体は潮に流されたのかついに見つからなかった。事故・自殺 様々な憶測が乱れ飛んだが、真相は彼自身と共に、この海の底に永遠に沈んだままだ。

彼は、養父に会えたのだろうか。

捜査の過程で、彼が教団の闇に染まつていった理由が、徐々に明かされつつあった。

ペインレス・ドッグ は、とある地方都市で生まれた。

彼の母が彼を身ごもつたのを知った時、父親である男はすでに彼女の元を去っていた。不規則な生活がたり、彼女は自分の体調の変化に気づくのが遅れた。彼女が妊娠に気づいたのは、もう妊娠期間の半分以上を過ぎた時だ。すでに中絶できる時期ではなかつた。

不承^{ネグレクト}不承彼を産み落とした母親は、彼を愛そうとはしなかつた。
育児放棄、そして度重なる暴行。 ペインレス・ドッグ が命を繫

いでいられたのは、彼女の母親 彼にとつては祖母に当たる

が、警察沙汰になるのを恐れて時折面倒を見ていたからだ。

しかし彼女はついに、自分の息子を 青銀天聖教団 にわざかな金で売り渡した。

支部の人間が子供を探しているという噂を、インターネットで知つたらしい。そうして実の母親に売られた少年は、当人の意思とは無関係に教団へと連れて行かれた。

逮捕した教団の人間からその話を聞いた時、諸角は胸が悪くなるような気分がした。

せつかく授かった子供を、金と引き替えに売り渡す 息子を事故で亡くした経験のある諸角にとって、その行為は子供に対する冒涜にすら思えた。目の前に彼女がいたら、殴つていたかもしない。それでも救いに思えたのは、教団内で彼が、自分を人として扱つ

てくれた相手に出会えたことか。

教団内で

サイレント・ファンク

静かなる牙

と呼ばれていた男。

彼が ペインレス・

ドッグ の師であり、養父でもあった。彼の存在があつたからこそ、

養い子は人としての愛情を知り、心を失つた快楽殺人者への道を歩まずに済んだ。

ペインレス・ドッグ にとつては、彼がすべてだつたのだ。彼の傍らにいるために銃を取り、そして彼がいなくなつた世界から、ためらいなく去つてしまつほどに。

諸角は重い眼差しで、どこまでも広がる海を眺めた。

なあ、もう少しだけ待つてれば、違う生き方もできたんじゃないのか？

ペインレス・ドッグ の行為は確かに違法であり、訴追は免れなかつただろう。だが、子供たちを救い、ひいては東京をテロの脅威から救つた彼には、少なからぬ共感と同情が寄せられていた。現に、今足下で揺れている花束も、子供を救われた家族が捧げたものだ。彼らは確かに、少年に対する感謝を抱いている。

ペインレス・ドッグ がもし、生きて逮捕されていたならもちろん罪は償わねばならなかつただろうが、それでもその先に、違う人生が待つていたかもしれない。

この世界のことをもつと知つて、そして家族とは違う意味で愛する相手を得て……最初から愛されていたなら得られたはずの人生を、遅ればせながらも摑めていたかもしれない。

教団内で時を止められ、そして少年のまま逝つてしまつた彼。もし、子供を守り、慈しんでくれる親の元に生まれていたなら。きっと彼は今頃、平凡でも幸せな人生を生きていた。

不意に息子のことが頭をよぎり、目を閉じた。

愛していたのに、どうしようもない運命でこの世を去つてしまつた息子。

実の親から愛されず、唯一愛してくれた養父を追つてこの世を去つてしまつた彼。

「この世界は、何もかもが噛み合わない。」

なあ、そつちで、会えてたらいいな。

ビニカ息子に重なる彼に、胸中でそつ呟いた。

「ずいぶんそこそこに立ち直り歩いていたことに気づいて、諸角は海から目をそらした。車に向かって歩き出す。部下に缶コーヒーの一本も奢つてやるかと思った時、反対方向から来た一台の軽自動車とすれ違つた。

車は、ついわざと諸角が立っていたガードレールの間隙の、すぐ近くで停車する。

何気なく振り返った諸角の視界の中で、運転席から一人の女性が降りてきて、まさに諸角が立っていた同じ場所に足を止めた。

ちらりと振り返られ、諸角は止めかけた足をまた動かし始める。彼女はこちらを一瞥しただけで、すぐに海に向き直つた。右手には、小さな花束を携えている。

救われた子供の誰かの、母親だらうか。それにしては少し年が上のようだが。

そう思いながら、諸角は車に乗り込んだ。

なおも気になつて、ミラー越しに見た彼女は、奇妙に寂しげに見えた。花束を投げ、目を伏せる。

突然天啓のように思い当たつた考えに、諸角は思わず振り向いた。

「諸角さん?」

「……いや、何でもない」

部下の声に我に返り、ミラーに視線を戻す。

最後に彼女が目を伏せたのは、ただ海風に耐えかねただけか、それとも。

(……俺の考えることじゃない、な)
せつ思つて、マリーからも視線を外した。

愛されていなかつた少年。

届かなかつた想い。

彼はもつ、養父と共に逝つただろつか。

「諸角さん、もう本庁に戻りますか？」

「ああ、そうしてくれ」

部下の声に答えるながら、シートに身を沈めて蒼い海を見る。

もつじに来る」とはないだろつなど、ほんやうと黙つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9605/>

City Fang

2010年10月8日16時11分発行